

文化財保護課

熊野谷遺跡

1989

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

熊野谷遺跡



J-3号住居址出土の縄文式土器

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

卷首図版 1



1. 熊野谷遺跡Ⅱ区全景



2. J-3号住居址出土の縄文式土器



1. 棚名山と熊野谷遺跡



2. 熊野谷遺跡全景

は　じ　め　に

前橋市は関東平野を一望できる雄大な赤城山を背に、坂東太郎で名高い利根川や詩情豊かな広瀬川の清流が市街地を貫流する、水と緑にあふれた美しい県都であります。

遠い古墳文化の時代には東国の中心とも言える文化を築き、続く律令政治の時代に入ると、元総社に上野国府が置かれ、山王廃寺、国分二寺が立ち並ぶ一大政治文化圏が形成されました。さらに近世には、「関東の華」と言われた厩橋城とその城下町、そして近代に至っては生糸の主要生産地として繁栄を生み出してきたように、前橋には歴史が織りなした様々な情景が満ちています。

市の西北端にあたる清里地区は、榛名山の裾野に位置する緑豊かな純農村地帯であります。あたりには桑畠が広がり、昔ながらの農家も数多くありましたが、近代化の波により、近年、関越自動車道の開通や各種学校建設等の開発が増加しつつあり、今後大きく発展する地区といえます。

このたび前橋工業団地造成組合による清里地区における開発計画があり、発掘調査をする運びとなりました。発掘調査によって、縄文時代早期の押型文土器が発見され、初めてこの地に訪れた人は、8,500年前の人々であることがわかりました。4,000年前には人々が立ち並び、夕餉には狩りでとってきたごちそうを開んで和やかな一家団欒があったことでしょう。また、1,000年前の平安時代になるとたくさんの家が造られ、秋には豊作を祝ったお祭りが行われていた光景も想い起こされます。

現状のままでの遺跡保存は無理でしたが、今後、調査にともなう幾多の遺物等や記録資料に検討を加え、社会教育、学校教育の場に充分活用していく所存であります。

最後に調査事業を円滑に進められたのは、前橋工業団地造成組合をはじめとする関係機関や各方面の方々の御配慮の結果といえます。また、本報告書が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、斯学の参考になればさいわいと存じます。

平成元年3月20日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

團長　二瓶益巳

例　　言

1. 本報告書は、前橋工業団地造成組合（管理者 清水一郎）が造成する青梨子住宅団地に係る
　　^{くわのや かいせき}　熊野谷遺跡発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、群馬県前橋市青梨子町1,295番地他に所在する。
3. 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が前橋工業団地造成組合と委託契約を締結し実施した。
　　調査担当および調査期間は以下の通りである。
　　発掘・整理担当者 前原 豊 都所敬尚（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）
　　試掘・発掘調査期間 昭和63年6月1日～昭和63年11月15日
　　整理・報告書作成期間 昭和63年11月16日～平成元年2月28日
4. 本書の原稿執筆・編集は前原・都所が行った。
5. 石器石材ならびに造構石材の鑑定は飯島静男氏（群馬地質研究会員）、地質の鑑定は早田
　　勉氏（パリノ・サーヴェイ株式会社）の手をわざらわせた。
6. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教
　　育委員会文化財保護室収蔵庫で管理されている。

凡　　例

1. 挿図中に使用した北は座標北である。
2. 挿図に、建設省国土地理院発行の1／20万地形図（長野、宇都宮）と1／5万地形図（前橋）
　　を使用した。
3. 本遺跡の略称は63A33である。
4. 各造構の略称は次の通りである。
　　J…縄文時代の住居址、JT…縄文時代の竪穴状造構、JD…縄文時代の土坑、S…集石
　　H…平安時代の住居址、B…掘立柱建物址、D…土坑、W…溝、O…落ち込み（風倒木痕）
5. 造構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。
　　造構　　住居址・土坑・井戸…1／60、全体図1／400
　　遺物　　土器・石器…1／3、一部の土器・石器…2／3、1／2、1／4、1／6
6. スクリーントーンの使用は次の通りである。
　　造構平面図　　焼土…点、炭化物…斑、粘土…レンガ
　　遺物実測図　　黒色処理…網、炭化物…斑、赤色塗彩…点、施釉範囲…あられ、
　　須恵器断面…黒塗、灰釉陶器断面…点、繊維含有土器の断面…点、
　　石器使用痕…線、石器磨滅痕…淡点

目 次

はじめに

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地	1
2 歴史的環境	3
III 調査の経過	
1 調査方針	5
2 試掘調査	5
3 調査経過	7
IV 層序	8
V 繩文時代の遺構と遺物	
1 住居址	13
2 壝穴状遺構	16
3 土坑	16
4 集石	18
5 焼土	18
6 包含層の遺物	18
VI 平安時代の遺構と遺物	
1 住居址	22
2 掘立柱建物址	32
3 土坑	32
4 溝	36
VII その他の遺構と遺物	37
VIII 成果と問題点	38
付編 熊野谷遺跡の地形と地質 (早田勉)	41

図 版

口絵 1	株名山と熊野谷遺跡	口絵 2	熊野谷遺跡全景
口絵 3	熊野谷遺跡B区全景	口絵 4	J-3号住居出土の縄文式土器
PL. 1	熊野谷遺跡A・B区全景	PL. 2	熊野谷遺跡B・C～E区全景
3	熊野谷遺跡A・B・F区全景	4	縄文時代の住居址
5	縄文時代の住居址	6	縄文時代の住居址
7	縄文時代の遺構	8	縄文・平安時代の遺構
9	平安時代の住居址	10	平安時代の住居址
11	平安時代の遺構	12	平安時代の遺構
13	縄文式土器	14	縄文式土器
15	縄文式土器	16	縄文式土器
17	縄文式土器	18	縄文式土器
19	縄文時代の石器	20	縄文時代の石器
21	縄文時代の石器	22	縄文・平安時代の遺物
23	平安時代の遺物	24	平安時代の遺物

挿 図

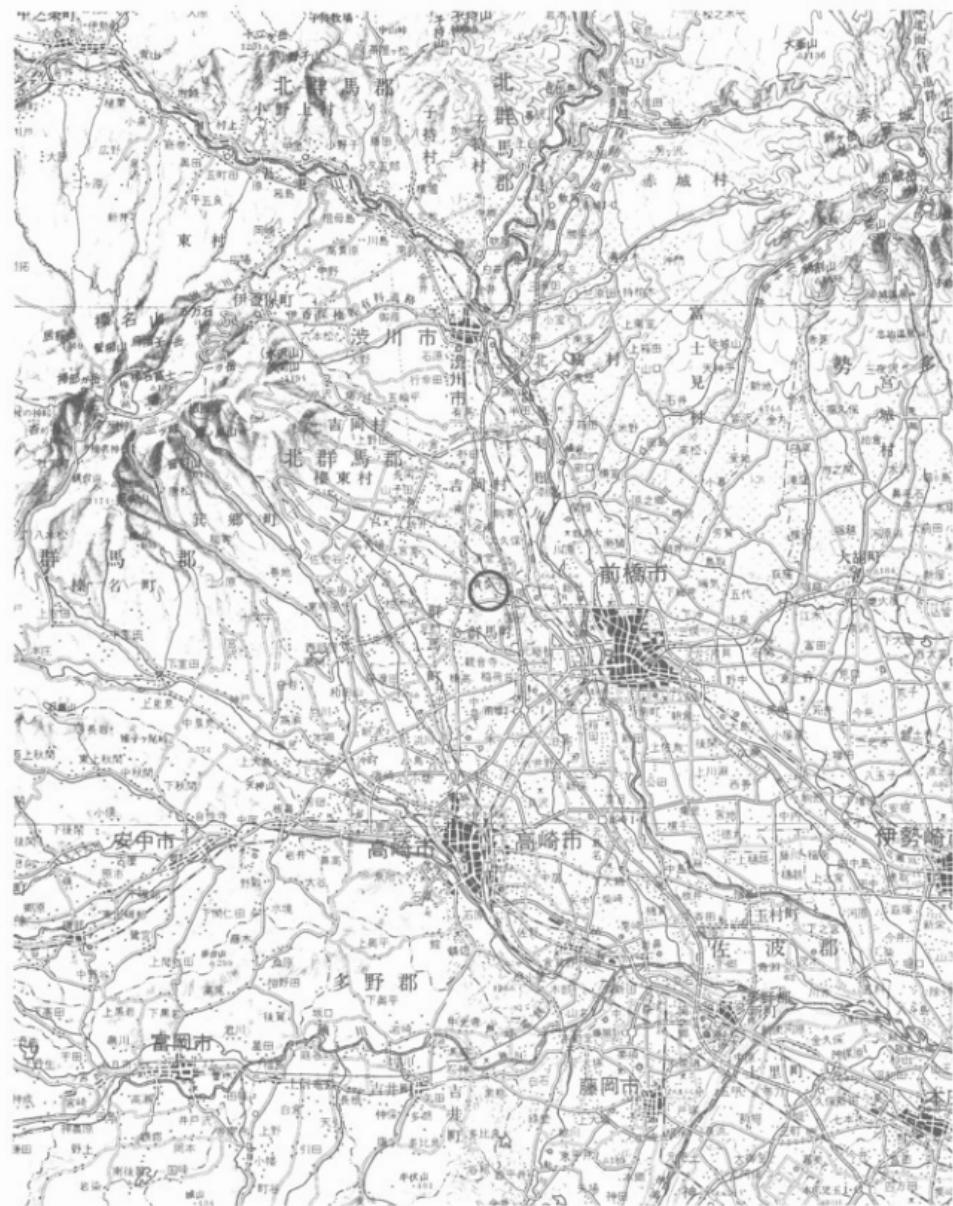
	頁
Fig. 1 熊野谷遺跡の位置	vi
3 熊野谷遺跡周辺図	4
5 試掘調査トレンチ設定図	6
7 熊野谷遺跡標準土層図	8
9 熊野谷遺跡B区全体図	11・12
11 縄文時代の住居址(2)	54
13 縄文時代の住居址、竪穴状遺構	56
15 平安時代の住居址(1)	58
17 平安時代の住居址(3)	60
19 平安時代の住居址(5)	62
21 平安時代の住居址(7)	64
23 平安時代の住居址(9)	66
25 平安時代の住居址(11)	68
27 平安時代の住居址(13)	70
Fig. 2 熊野谷遺跡位置図	2
4 グリッド設定図	5
6 発掘調査経過図	7
8 熊野谷遺跡A・F区全体図	9・10
10 縄文時代の住居址(1)	53
12 縄文時代の住居址(3)	55
14 縄文時代の土坑、集石、焼土	57
16 平安時代の住居址(2)	59
18 平安時代の住居址(4)	61
20 平安時代の住居址(6)	63
22 平安時代の住居址(8)	65
24 平安時代の住居址(10)	67
26 平安時代の住居址(12)	69
28 平安時代の住居址(14)	71

Fig. 29	平安時代の住居址(15).....	72	
31	平安時代の土坑(1).....	74	
33	平安時代の土坑(3).....	76	
35	縄文式土器(1).....	78	
37	縄文式土器(3).....	80	
39	縄文式土器(5).....	82	
41	縄文式土器(7).....	84	
43	縄文式土器(9).....	86	
45	縄文時代の石器(2).....	88	
47	縄文時代の石器(4).....	90	
49	縄文時代の石器(6).....	92	
51	縄文時代の石器(8).....	94	
53	縄文時代の石器(10).....	96	
55	平安時代の遺物(2).....	98	
57	平安時代の遺物(4).....	100	
59	平安時代の遺物(6).....	102	
61	平安時代の遺物(8).....	104	
63	平安時代の遺物(10).....	106	
65	J-1号住居址の遺物分布.....	108	
	Fig. 30	平安時代の掘立柱建物址.....	
	32	平安時代の土坑(2).....	75
	34	平安時代の溝.....	77
	36	縄文式土器(2).....	79
	38	縄文式土器(4).....	81
	40	縄文式土器(6).....	83
	42	縄文式土器(8).....	85
	44	縄文時代の石器(1).....	87
	46	縄文時代の石器(3).....	89
	48	縄文時代の石器(5).....	91
	50	縄文時代の石器(7).....	93
	52	縄文時代の石器(9).....	95
	54	平安時代の遺物(1).....	97
	56	平安時代の遺物(3).....	99
	58	平安時代の遺物(5).....	101
	60	平安時代の遺物(7).....	103
	62	平安時代の遺物(9).....	105
	64	縄文時代包含層の遺物分布.....	107

表

頁	頁				
Tab. 1	包含層出土の縄文式土器一覧.....	18	Tab. 2	縄文時代の石器一覧.....	19
3	縄文時代の石器石材一覧.....	19	4	石器種別石材構成.....	20
5	縄文式土器観察表.....	43~46	6	縄文時代の石器観察表.....	47~49
7	平安時代の遺物観察表.....	50~52			

熊野谷遺跡の位置(丸印)



1:200,000

I 調査に至る経緯

昭和62年10月19日付で本調査地の青梨子住宅団地造成工事に係る面積31,400m²の埋蔵文化財表面調査依頼が、開発主体者である前橋工業団地造成組合管理者清水一郎氏より前橋市教育委員会に提出された。昭和62年10月22日に前橋市教育委員会文化財保護室で表面調査をした結果、本調査地は遺跡地である可能性が高いことが判明した。また併せて、遺跡の現状保存について考慮願う旨も伝達した。しかし、開発が回避できないことと遺跡地の内容が試掘調査を踏まえなければ明白にならないため、協議・調整をおこなった。その結果、用地買収契約が締結される昭和63年度当初より試掘調査と発掘調査を並行して行う期間節約型の方法で実施することになった。また、調査は前橋市教育委員会の内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団が担当することになった。なお、本遺跡の名称は旧地籍の小字名を採用し、熊野谷遺跡とした。

II 遺跡の位置と環境

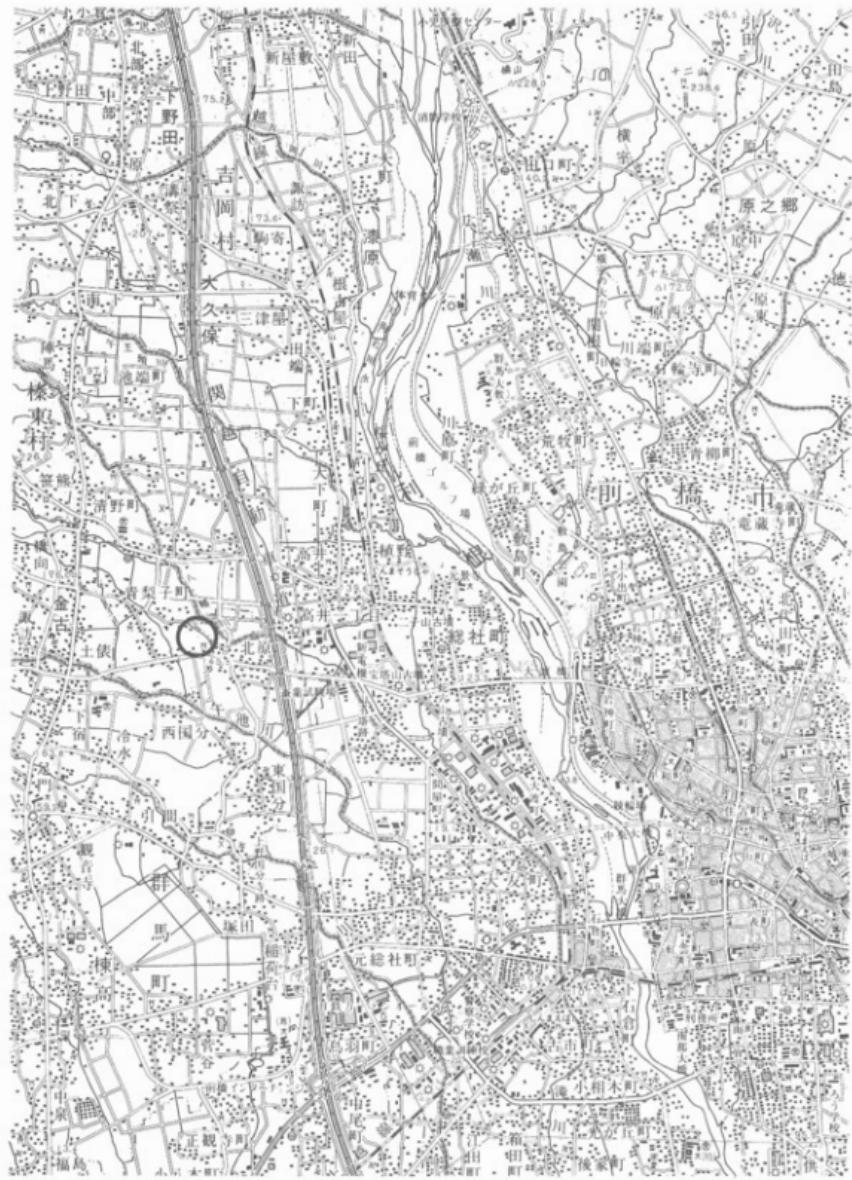
1 遺跡の立地

熊野谷遺跡が所在する前橋市青梨子町1,295番地他は、前橋市の中心市街地から北西へ約6kmの所にある。遺跡は主要地方道前橋・箕郷線に近接する熊野神社の北西にあたる所に位置している。遺跡の西側1.2kmには主要地方道渋川・高崎線が南北に走り、また遺跡からJR上越線群馬総社駅へは約2.5kmの近距離にあり、さらに東側700mには関越自動車道新潟線が通っている。

遺跡の所在する地域は榛名山東南麓のなだらかな斜面上で、標高152mの北西から南東のゆるやかな傾斜地である。この榛名山東部山麓は他の榛名山麓地形と様相が著しく違い、起伏が少なく平坦な地形を呈している。これは、深い放射谷が発達していない広大な相馬ヶ原扇状地が形成されていることに起因している。相馬ヶ原扇状地は凝灰角礫岩の上にのる砂礫層の堆積面で、その後、榛名山に源を発する中小河川による開拓が進み現在に至っている。各河川に分断された台地の幅は600~800m内外であり、熊野谷遺跡はこのうちの八幡川と牛池川にはさまれた台地上にある。本調査地は台地の部分(12,000m²)と谷地の部分(19,000m²)に分かれている。現台地の部分は二次堆積ローム層を乗せる部分と完新世のテフラ堆積後に現地形となった部分で構成され複雑な地形変化を見せている。谷地部分は完新世のテフラの堆積も乱れ、さらに下は扇状地堆積物で構成される。

遺跡の占地する相馬ヶ原扇状地は、約14,000年前に榛名火山の山体崩壊、岩屑流の発生後に扇状地の形成が始まり、約13,000年前頃には扇状地形成が終了して段丘化し始めたものである。それは多くの地点で相馬ヶ原扇状地堆積物の上位にAs-YPが数10cmの褐色風化火山灰をはさんだり、直接に整合して堆積する状態が観察されることによって判明し、扇状地の大部分がこの年代

熊野谷遺跡位置図(九印)



1:50,000 前 橋

に離水・段丘化したと考えられるのである。遺跡の台地部分の地層も表土、As-B・Hr-FPF 1・Hr-FA・As-C・水成上部ローム層、砂礫層となり、これらの事実を物語っている。

現在、遺跡周辺は高燥化した土地であるため、水田には不適であり、桑園や野菜畑を主とした畠として利用されているが、八幡川沿いの低地の部分や、その後の用水路の完成によってその周辺地域にもわずかに水田が開かれている。

2 歴史的環境

今回の調査の結果、遺跡地は縄文時代と平安時代の集落であることが判明した。本地域における縄文時代の様相も解明しつつあるため、それ以前の時代から周辺の状況を見てみたい。

榛名山東南麓斜面上（相馬ヶ原扁状地堆積面）では、現在までに旧石器時代の遺物は発見されていない。この地域では約13,000年前に扁状地形が終了し、離水・段丘化という地形の変遷を繰り返しており、人々が生活するのに不適な場所であったと考えられる。

続く縄文時代には国分僧寺・尼寺中間地域遺跡や産業道路東・西遺跡で検出された前期・中期の集落が筆頭に挙げられ、当地域の縄文文化を考える上で重要な資料といえる。その他に下東西遺跡、清里南部遺跡群、清里・陣場遺跡、中島遺跡、長久保遺跡などがあげられ、時期的には前期から後期初頭といった範囲でおさえられる。

弥生時代の調査例は少なく、中期後半の環濠集落址である清里・庚申塚遺跡と後期の住居が検出された国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、桜ヶ丘遺跡、下東西遺跡等にわずかに散見するだけである。井野川、染谷川流域に比べ格段の差を生ずるのは、本地域が高燥化した土地であることの地形的要因に帰するのであろう。

古墳時代における古墳の分布を見ると周辺には終末期のものが多く見られる。本遺跡の東側約2 kmに位置する總社古墳群には、県内最終末期に位置づけられる宝塔山、蛇穴山古墳等が存在する。また、北方から北西にかけては長久保古墳群や、截石切組石室を含む後期群集墳の南下古墳群が存在する。このように終末期の古墳が多く存在することから、この辺りは奈良時代へ遺跡が続いている可能性の強い地域であると考えられる。特に總社古墳群は、大王的性格の古墳が連続とした継続をもち、その後仏教の波及び山王庵寺が建立される。しかし、古墳が数多く存在するのにもかかわらず、大きな集落は検出されていない。

奈良・平安時代に至ると、上野国府、上野国分二寺等の上野国がこの地に設置され、中核施設の周辺である本地域では多くの遺跡が見られる。遺跡名を列挙すると清里・陣場遺跡、清里南部遺跡群、中島遺跡、下東西遺跡、北原遺跡、国分境遺跡、国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、柿木遺跡、元總社明神遺跡等数多くあげられる。これらの中の大集落の出現は奈良時代から萌芽が見られ、平安時代に至ると爆発的な発展を見るのである。また、多くの遺跡から綠釉陶器、灰釉陶器、硯、墨書き器等の出土が見られ、特殊構造も検出されている。

II 遺跡の位置と環境

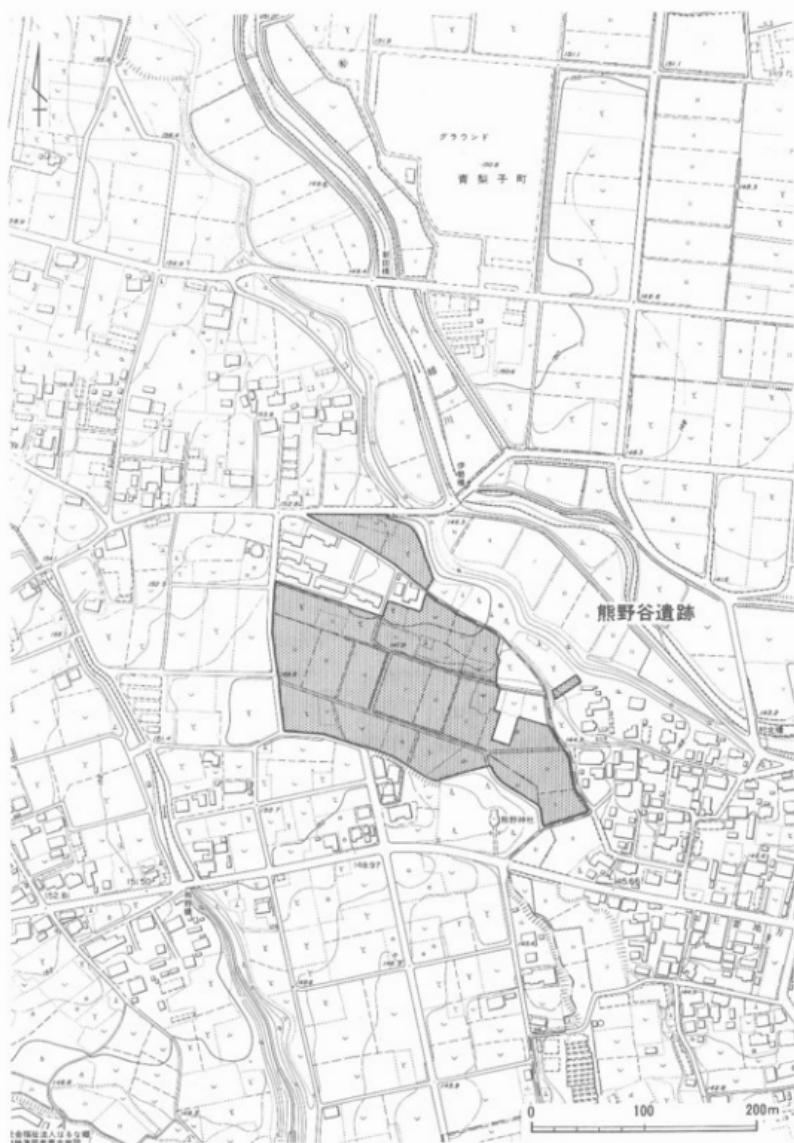


Fig. 3 熊野谷遺跡周辺図

III 調査の経過

1 調査方針

調査実施にあたり、開発面積31,400m²に対して遺跡範囲が明確にされていないため、表面調査の資料を参照しつつ、試掘調査を実施した。そして、試掘調査の結果を直ちに検討し発掘調査へ移行する方法をとった。試掘および発掘調査とも昭和63年11月末までという期間的な制約があつたため試掘トレンチ設定や表土剥ぎには重機（バックフォー0.7m³）を用い時間の節約に努めた。初めに、調査範囲（南北280m、東西280m、面積31,400m²）の全域に、公共座標に基づく植杭を20m方眼で実施し試掘調査用の杭とした。さらに発掘調査では必要に応じて4m方眼の杭を足して行った。調査区の呼称方法は4mピッチで北から南へY1、Y2、Y3…と呼び、西から東へX1、X2、X3…と呼称した。各グリッドの呼称は北西の杭の名称を使用した。X25、Y25の公共座標は第IX系+45.5、-73kmである。また、水準は熊野神社前の公共水準原点に基づき遺跡内にB.M.杭を50m間隔・海拔高0.5m単位で設定し使用した。

試掘調査 20mピッチの方眼杭を利用し、地形を鑑みながら基本的に20m間隔に幅1.3mのトレンチを設定し必要に応じて細トレンチを設定した。深掘りは各トレンチを20m間隔で設定し地形・地層観察に努めた。

発掘調査 遺構の調査は基本的に使用面と掘り方面に分けて2工程で実施した。図面作成は原則的に1/20で平板・簡易造り方測量で実施し、必要に応じて1/10、1/40の縮尺で作成した。

遺物については平面分布図を作成し、

遺物台帳に記録を採りながら収納した。包含層の遺物収納は、グリッド単位で層位毎に行なった。

2 試掘調査

試掘調査は用地買収、農作物収穫等があったため開発区全域を一度にはできなかった。その事と重機搬入路・堆土置き場の確保に考慮しながら、空いている場所をねらって順次実施した。

まず、A区をY3ラインに沿って東西トレンチを入れた結果、Hr-FP



Fig. 4 グリッド設定図

Ⅲ 調査の経過

F 1 の直上に平安時代の住居址が検出された。平安時代の遺構はトレンチ調査の結果、全面的に存在する事が判明した。

また、A区では平安時代遺構の発掘調査で縄文式土器が検出されたため、第2回目の試掘トレンチを設定した。Y 2、Y 4、Y 6、X15、X20ラインに幅1.3mのトレンチを設定し確認調査を実施したが、縄文時代の遺構・遺物の検出は全く認められなかった。

B区については、プレハブ設定場所や一部作物に支障のないX20～28・Y20～26・X40～45・Y28～35の箇所に試掘調査を実施した結果、Hr-FPF 1 の上層に平安時代の集落があり、さらに下面の二次堆積のローム層上に縄文時代の遺物が多数確認され二面調査の必要が生じた。また作物の収穫の遅れもあって、試掘調査から部分的な発掘調査に直ちに切り替えた。

C～E区は沖積地形で、埋没水田の存在が予想されたため、Y16～69とX-3～65ライン上に総延長1,480mのトレンチを設定したが、水田址と目される畦畔・水路・平坦面・水田土壤は検出できなかった。しかし、As-B、Hr-FPF 1、Hr-FA、As-Cの純層堆積は各所に認められ、さらに下部は相馬ケ原扇状地堆積物が厚く堆積していることが判明した。



Fig. 5 試掘調査トレンチ設定図

F区は群馬町大字北原字村北に所在するという管轄外の区域であったが、群馬町教育委員会の承諾を得て本調査團で調査を実施した。試掘調査は全面掘削を行った結果、遺構は全く検出できず、わずかに平安時代の須恵器（Fig. 63-126）と中期縄文式土器が数点検出されたにとどまった。また、群馬町教育委員会と協議の上、本区域部分については熊野谷遺跡とは別の名前を検討し村北遺跡（むらきたいせき）とした。

3 調査経過

4月下旬に打ち合わせを済ませ、各種事務手続きを終了し、5月末日に器材の搬入、調査事務所用のテントの設営、器材の点検を行った。

6月1日より重機により試掘調査を開始した。A区の試掘調査の結果、平安時代の遺構が確認された。直ちにB区、C～E区の試掘調査を計画したが、玉葱と小麦の収穫が済んでいないことや桑の抜根が終了していないため、A区の発掘調査に移行した。また、プレハブ設置用地がなかったため、遺跡内に6月8日に試掘調査を実施した。幸いにも設置予定地の部分には遺構がなく縄文式土器が数点検出されたにとどまったため調査を済ませプレハブ設営に備えた。6月14日にプレハブの設置がなされ、本格的な発掘調査に備え、再度器材の搬入を行った。

B区の調査は作物の収穫も終わった7月13日から、先の試掘を踏まえ表土掘削を開始し、発掘調査を開始した。

C～E区の試掘は7月6日より開始した。この試掘調査が完了する直前から天候の不順の兆しが見え始め調査完了のころにはトレンチ内は水浸しの状態となった。しかし、C～E区の困難な試掘調査を切り抜け、台地上であるB区の調査に移行した。B区の調査と並行しながら10月19日にA区の縄文時代面の試掘を実施し、10月21日にはF区の調査を重機搬入に苦慮しながらも完了できた。11月15日に残りのB区の調査を終了し、総ての調査がここに完了した。11月16日に器材の撤収を行い、文化財保護室に搬入を行って現地調査から遺物整理作業に移行した。調査期間は昭和63年6月1日から昭和63年11月15日

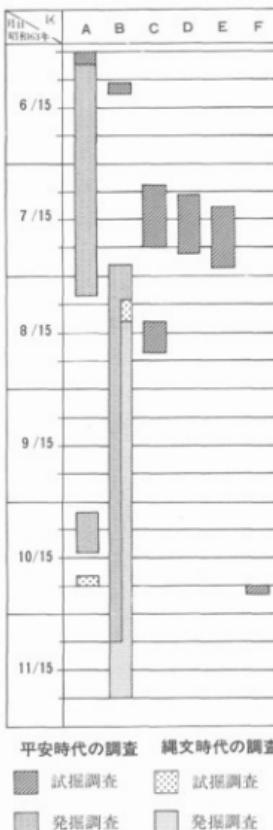


Fig. 6 発掘調査経過図

までの約5.5ヶ月間であった。

なお、調査中の10月5日に市立桃川小学校6年生児童113人が遺跡に社会科見学で、ボイスクアウト高崎八幡原支部の団員が37名、市立第1中学校郷土部28名が見学に訪れた。

IV 層序

遺跡の層序は各地点とも堆積状況に違いはあったものの、基本的にはFig. 7に図示したものである。この図はB区を中心とした模式図であるため、各区の概要について補足して説明したい。

A区は模式図とほぼ同様な堆積をしめすが、As-BがW-6号溝の中に一部認められた。凹地に溜まったものと理解できる。Hr-FPF1、Hr-FA、As-Cの堆積はA区全域から良好に認められた。ただ、A区はHr-FPF1、Hr-FAが堆積する以前は谷地形であったためVI層対比層がやや粘性を帯びていた。離水の時期はB区の縄文時代遺構がのる旧台地より遅れたものと思われる。

B区の北側と西側はA区と同様な層序を示すが、縄文時代の遺構がのる部分にはIV層である黒ボクの中に僅かにAs-Cが点在するだけで、Hr-FPF1、Hr-FAの堆積は認められなかった。特に縄文時代の集落の北側の区域は、縄文時代中期以降の遺物が多量に廃棄されており、当時は谷地形であった事を示している。これらが現在の地形になるのは大量のAs-C、Hr-FPF1、Hr-FAの流入、降下によるものと考えられる。

C~E区は沖積地でありB区との比高が3~4mほどある。As-Bはほぼ全面的にユニットをなし堆積していた。厚さは場所によって異なるが最も厚い所で20cmが測れた。Hr-FPF1はD区の北部においては100cm以上の厚さで流入がみられた。Hr-FA、As-Cもほとんど全域に堆積をなしその下部には相馬ヶ原扇状地形成堆積物が厚くみられ、前橋泥流は5m程度の深掘の範囲では確認できなかった。

F区は耕作土の下はすぐにV層になりテフラはほとんどみとめられなかった。基本的にはB区縄文時代遺構がのる台地と同様な堆積であった。

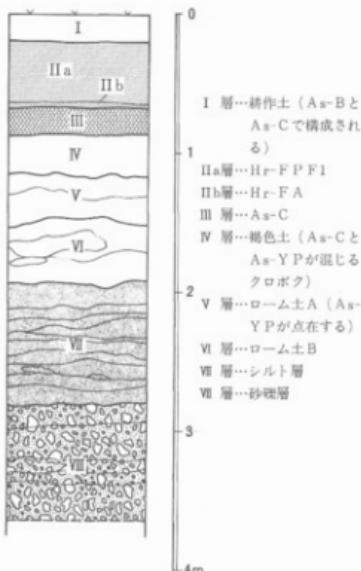


Fig. 7 熊野谷遺跡標準土層図

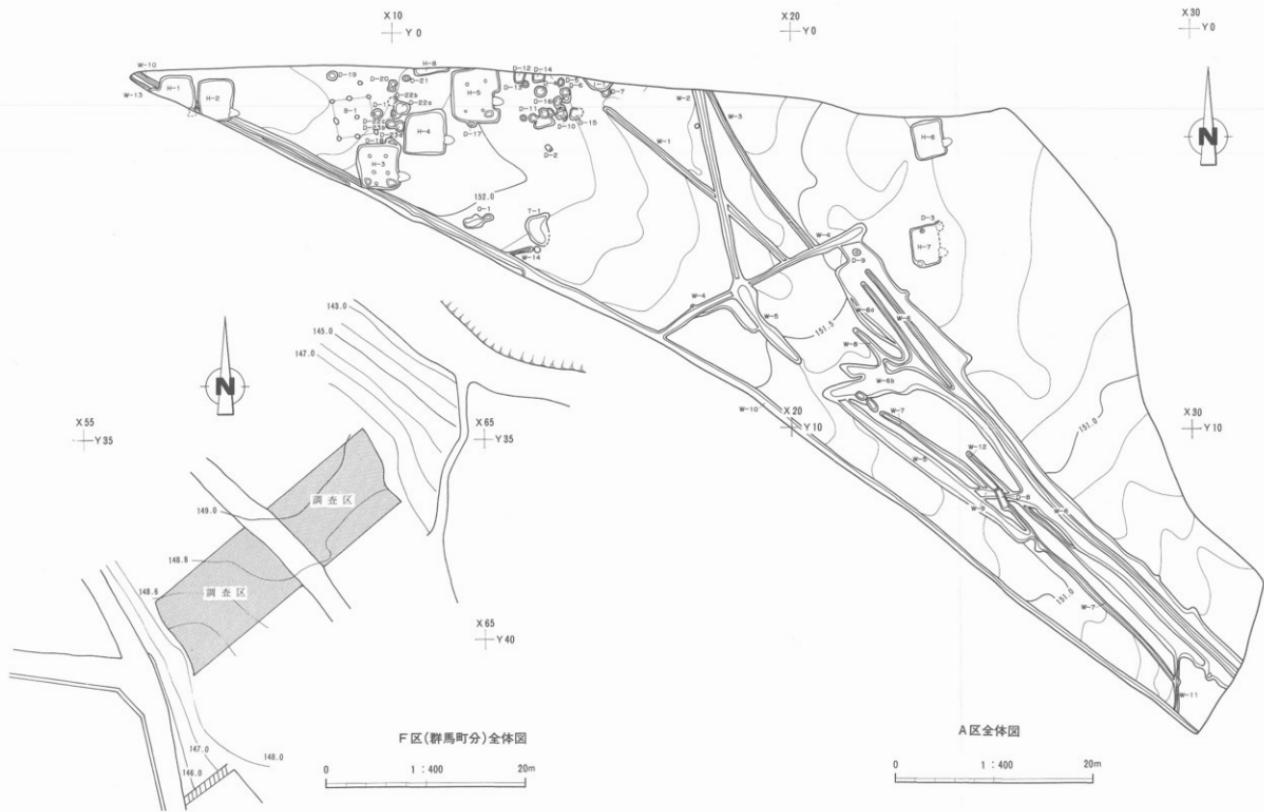


Fig. 8 熊野谷遺跡A・F区全体図

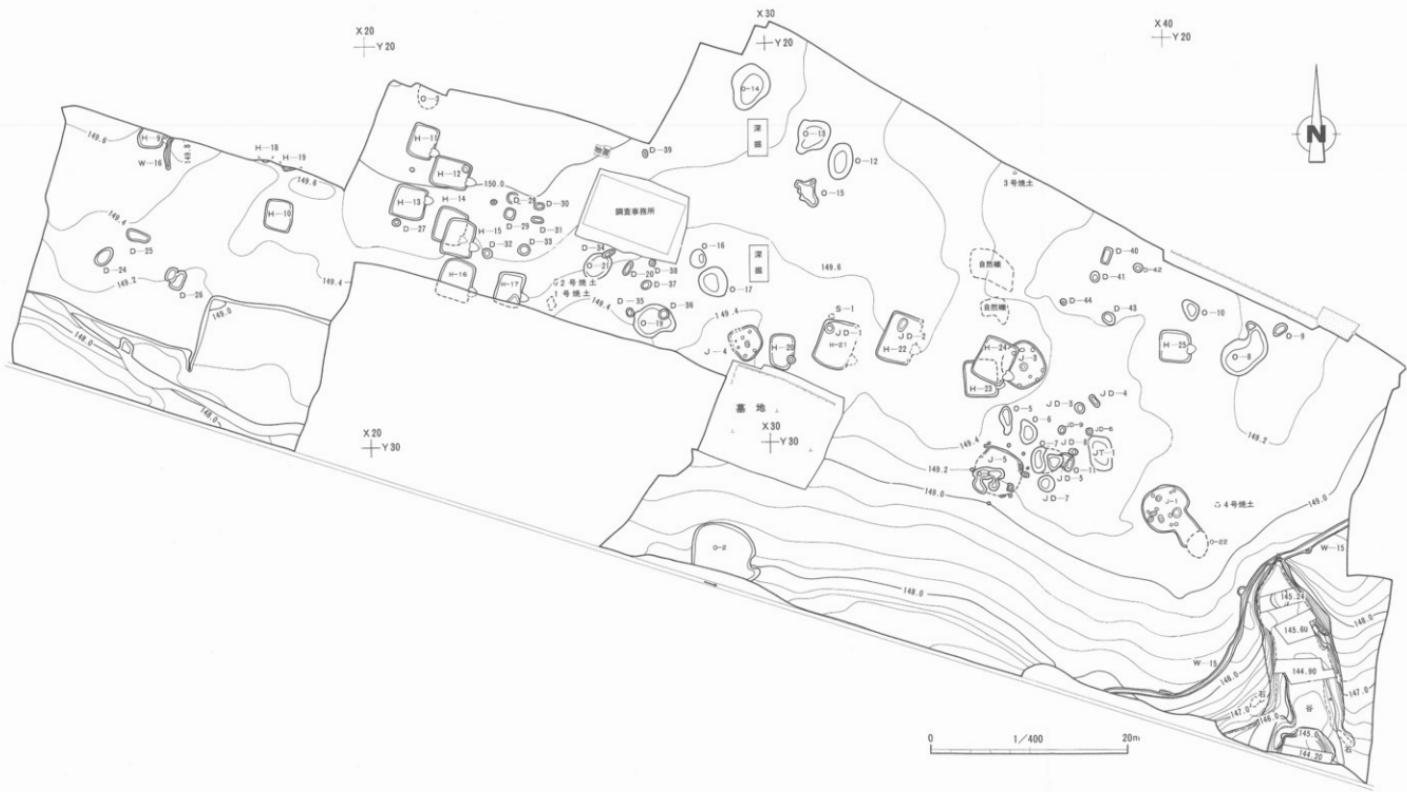


Fig. 9 熊野谷遺跡B区全体図

V 繩文時代の遺構と遺物

繩文時代の遺構・遺物はB区の尾根状に延びる台地からまとまって検出された。竪穴住居址4軒、竪穴状遺構1基、土坑9基、集石1基、焼土跡4ヶ所と包含層によって構成されていた。住居址はJ-4号住居址が加曾利E2式期の所産であり、J-3・5号住居址が加曾利E4式期のものであった。J-1号住居址は下の住居址が廃棄された後、その上に再び遺構が構築された特徴的な重複関係が認められた。時期的には中期末葉の加曾利E4式期から後期初頭の称名寺I式期であり、上下の遺構の時間的な隔たりは大きく感じられなかった。その他の遺構の所産時期は住居址と並行するものといえる。特に土坑からは加曾利E4式期から称名寺I式期の土器が多くみられた。

包含層からは繩文式土器4,236点、石器722点が検出された。土器は早期押型文土器から後期後半安行I式まで断続的に認められた。しかし、量的には中期末葉の加曾利E4式土器が主体を占め、後期初頭の称名寺I式土器が次いでおり、両者を合わせると全体の95%を占めていた。その他の時期の遺物は極めて少なかった。

1 住居址

J-1号住居址

揮 図 Fig. 10・11 写 真 PL. 4・5
位 置 X39・40、Y31・32グリッド。

確認面 全体層序V層上面で確認された。

重複 『上面』の遺構と『下面』の住居址の全面的な重複があり、有機的関係を持ちながら2回にわたって使用されたと考えられる。時間的には下から上の推移がたどれるが、土器の型式での差異はみられない。また、柄鏡形の柄の先端を耕作痕やO-22によって一部破壊される。

形 状 『上面』は人頭大の偏平な円碟を用い、柄鏡形の周碟を持つ遺構であったものと推定される。円碟は当初、六角形に配されたが検出できたのは三辺だけであった。一辺が1.8mを測り、基部から張り出す部分にも碟が分布することから柄鏡形になると考えられる。現存規模は東西(2.00)m、南北(3.83)m

を測る。検出された円碟は総数130点を数え、地元産の粗粒安山岩が65%で、残り35%が利根川の河床から搬入された石材である。しかし、遺構を構成する大形石材の多くは利根川から搬入されたもので、石材の選択・嗜好の結果といえる。また、構成する碟の中には石皿や蜂の巣石の転用もみられ、特に石皿は分割したものが各所に配されていたことが接合により判明した。これらの円碟の60%にあたる84点は加熱を受け剥落やヒビがみられた。これらと接合する加熱により剥落した破片が遺構の周囲から419点出土している。

『下面』は柄鏡形の住居址である。東西4.66m、南北(6.44)mを測る。ただ、先端部は後世の擾乱やO-22による破壊を受けており確認できなかったため、全体の規模は不明。

面 積 『上面』は(17.5)m²以上。『下面』

は(21.5) m²以上。

方 位 『上面』の遺構はN-39°-W。『下面』の住居址はN-45°-W。

床 面 『上面』の床は確認不能であった。しかし、「石匂い」の存在から床面に相当する面が存在したことが想定できる。

『下面』の床は、ローム層・砂層・微砂層と3種類の地層があり組んで地質的に変化する地点であり識別が困難であったが、ほぼ平坦に作出され、柄の部分が長軸1.8×短軸1.2m、深さ0.6mの長方形の掘り込みを持ち、石棒が底面から出土した。確認面からの深さは30cmを測る。

炉 址 『上面』では地床炉と考えられる焼土が、円礫の底面レベルから更に15cm下で長径72×短径51cm、厚さ8cmの範囲の規模で検出された。『下面』では石匂い炉が埋設土器(22)を伴って検出された。掘り方の規模は長径95×短径86cm、深さ25cmを測る。

石匂い 『上面』の遺構の基部に設置。三石で囲繞。内部に口縁部を欠く深鉢(13)を埋設土器として使用。規模は長軸30cm、深さ20cmを測る。

埋 銚 柄の先端部に1個検出された。大きく底部を欠く深鉢(13)を正立状態でもちいる。レベル的に『上面』の遺構に所属すると考えられる。埋設坑の大きさは径56cm、深さ23cmの円形である。

柱 穴 『上面』では砂質土層のため検出困難をきわめ不詳である。『下面』では12個検出された。このうちP₁・P₂・P₃は主柱穴といえる。各柱穴の規模は、P₁・長径36×短径33cm、深さ40cm、P₂・長径26×短径24cm、深さ18cm、P₃・長径58×短径48cm、深

さ73cm、P₄・長径36×短径32cm、深さ38cm、P₅・長径30×短径27cm、深さ20cm、P₆・長径45×短径42cm、深さ17cm、P₇・長径31×短径24cm、深さ16cm、P₈・長径62×短径45cm、深さ16cm、P₉・長径60×短径42cm、深さ31cm、P₁₀・長径49×短径34cm、深さ14cm、P₁₁・長径48×短径40cm、深さ21cm、P₁₂・長径38×短径34cm、深さ26cm。

遺 物 (Fig. 35・36・45・46・52, PL. 13・14・19)

土器は総量としてコンテナに2箱弱出土した。多くは敷石の下部である『下面』から出土したものである。型式的には加曾利E4式が主体を占め、称名寺I式が次いでいる。

石器・石製品は総数356点と極めて多かった。石鎌21、石錐3、楔形石器1、石匙1、削器11、打製石斧2、磨製石斧4、磨石・凹石7、敲石5、石皿2、蜂の巣石11、礫器1、砥石3、石棒1、軽石製品1、石核3、調整痕のある剥片4、使用痕のある剥片18、剥片・碎片171、緑色片岩86、他に自然礫多数出土。

備 考 これらの遺構の所産時期は出土遺物から繩文時代中期加曾利E4式期～後期初頭称名寺I式期と考えられる。出土遺物から『上面』と『下面』の遺構には型式的な変化は認められず、時間的にも隔たりはみられない。『上面』の遺構の性格は配礫を伴うもので、形状、規模、施設内容から敷石住居址の可能性が大きく、周礫遺構の可能性も捨て切れない。多くの礫が加熱を受けている。これらの礫は剥落した破片の分布から配礫後に被熱された事と考えれるが、遺構内から焼土や炭化物が全く検出されていないことから、配礫前に被熱を受けたことも考えられる。

J-2号住居址

現地調査で、本遺構として扱ったものは、平面形、底面形状、柱穴や炉址が存在しないことから、JT-1号竪穴状遺構に名称変更を

J-3号住居址

揮 図 Fig. 12 写 真 PL. 6

位 置 X35・36、Y27・28グリッド。

確認面 全体層序V層上面で確認された。

重 複 H-23・24号住居址に部分的に切られてい。

形 状 長径4.47m、短径4.21mの円形。

面 積 14.9 m² 方 位 N-51°-W

床 面 ほぼ平坦に造られる。確認面からの深さは20cmを測る。

炉 址 石開い炉。掘り方は長軸88×短軸73cm、深さ20cmを測る。

埋 薫 南壁際に深鉢(42)と両耳壺(39)の2個体が別々に埋設土器として使用されていた。

柱 穴 6本の主柱穴を検出。P₁・長径42×短径39cm、深さ76cm、P₂・長径73×短径60cm、深さ85cm、P₃・長径56×短径46cm、深さ82cm、P₄・長径35×短径27cm、深さ37cm、

J-4号住居址

揮 図 Fig. 12 写 真 PL. 6

位 置 X29、Y27グリッド。

確認面 全体層序V層で確認された。

重 複 O-18に切られ、さらに現代の耕作によって一部破壊を受ける。

形 状 円形。径3.38m。

面 積 8.5 m² 方 位 N-1°-W

床 面 V層を掘りこんで、ほぼ平坦に作出される。確認面からの深さは15cmを測る。

炉 坂 石開い炉と埋設土器で構成される。

掘り方は長軸77×短軸65cm、深さ8cmを測る。

行った。従って本報告書ではJ-2号住居址は欠番扱いとなる。

P₁・長径41×短径36cm、深さ83cm、P₂・長径62×短径46cm、深さ90cm。この他に、P₃・長径44×短径38cm、深さ16cm、P₄・長径50×短径48cm、深さ29cm、P₅・長径22×短径18cm、深さ48cmが検出された。

遺 物 (Fig. 37・38・41・46・51、PL. 13・14・19・20)

土器は総量コンテナ1箱弱出土した。称名寺I式土器もみられるが、主体は加曾利E4式土器である。

石器は石鎌2点、楔形石器1、削器14、打製石斧4、磨石・凹石5、敲石1、石皿1、蜂の巣石8、石核1、調整痕のある剥片7、使用痕のある剥片7、剥片・碎片51の合計102点が出土。

備 考 出土遺物から所産時期は縄文時代中期終末加曾利E4式期と考えられる。

柱 穴 6個検出。P₁・長径30×短径27cm、深さ17cm、P₂・長径28×短径22cm、深さ36cm、P₃・長径25×短径22cm、深さ22cm、P₄・長径43×短径36cm、深さ43cm、P₅・長径34×短径25cm、深さ35cm、P₆・長径35×短径25cm、深さ28cm。

遺 物 (Fig. 38・47・49、PL. 13・19・20)

土器は図示できるものは、炉内の1点と他1点だけである。

石器は石鎌1、削器1、敲石1、石皿1、

蜂の巣石4、剥片・碎片4、緑色片岩1、合計13点と少なかった。

J-5号住居址

挿図 Fig. 13 写真 PL. 7

位置 X34~36、Y30~31グリッド。

確認面 全体層序V層で確認された。

重複 O-4 によってほとんど破壊を受けていた。

形状 円形と推定できる。推定規模・長径3.78m、短径2.33m。

面積 推定20.2m² 方位 N-57°-W

床面 破壊が著しいが、残存部分は平坦。

炉址 石開い炉。掘り方は長軸95×短軸80cm、深さ24cmを測る。底面に焼土が検出。

柱穴 12個検出された。各柱穴の規模はP₁・長径44×短径32cm、深さ28cm、P₂・長径42×短径38cm、深さ20cm、P₃・長径27×短径21cm、深さ28cm、P₄・長径37×短径35cm、

備考 出土遺物から本住居址の所産時期は加曾利E2式期と考えられる。

深さ15cm、P₅・長径26×短径27cm、深さ17cm、P₆・長径24×短径17cm、深さ14cm、P₇・長径59×短径47cm、深さ40cm、P₈・径34cm、深さ26cm、P₉・長径31×短径29cm、深さ23cm、P₁₀・長径34×短径31cm、深さ36cm、P₁₁・長径29×短径18cm、深さ22cm、P₁₂・長径35×短径25cm、深さ30cm。

遺物 (Fig. 38・39・47、PL. 15・19・20)

土器は総量コンテナ1箱であった。石器は石鐵2、削器4、打製石斧1、蜂の巣石1、輕石製品1、使用痕のある剥片7、剥片・碎片17、緑色片岩2の合計35点が出土。

備考 出土遺物から本住居址の所産時期は繩文時代中期終末加曾利E4式期と考えられる。

2 壁穴状遺構

JT-1号壁穴状遺構

挿図 Fig. 13 写真 PL. 7

位置 X37~38、Y29~30グリッド。

確認面 全体層序V層で確認された。

形状 楕円形。長径3.52m、短径2.40m

面積 7.0 m² 方位 N-2°-E

底面 立ち上がりは緩やかであるが、底面はほぼ平坦に作出される。確認面からの深さは40cmを測る。

遺物 (Fig. 39-42・43-47・48、PL. 15・20・21)

土器は総量コンテナ1箱出土。石器は石鐵7点、楔形石器1、削器1、打製石斧4、磨石・凹石2、蜂の巣石2、使用痕のある剥片4、剥片・碎片53、緑色片岩5の合計80点。

備考 本遺構の所産時期は中期終末加曾利E4式期と考えられる。

3 土坑

JD-1号土坑 (Fig. 14、PL. 7)

位置 X31、Y27グリッド。

形状 円形。長径219×短径200cm、深さ64

cmを測る。平面形・断面形とも整美された形である。H-21号住居址に上面を切られる。

遺 物 深鉢(66)、軽石製品1、凹石2、蜂の巣石3が出土。

備 考 本遺構の所産時期は中期終末加曾利E4式期と考えられる。

JD-2号土坑 (Fig. 14)

位 置 X33、Y26・27グリッド。

形 状 楕円形。長径160×短径84cm、深さ36cmを測る。H-22号住居址に上面を切られる。

備 考 本遺構は出土遺物は発見されなかつたが覆土から縄文時代の所産と判断した。

JD-3号土坑 (Fig. 14、PL. 7)

位 置 X37、Y29グリッド。

形 状 円形。長径110×短径95cm、深さ82cm。底面は平坦に形成されている。

遺 物 土器(67)は加曾利E4式土器。

備 考 所産時期は中期加曾利E4式期。

JD-4号土坑 (Fig. 14)

位 置 X38、Y28・29グリッド。

形 状 隅円方形。長軸132×短軸65cm、深さ35cmを測る。

遺 物 土器(68)は加曾利E4式土器。

備 考 所産時期は中期加曾利E4式期。

JD-5号土坑 (Fig. 14、PL. 7)

位 置 X36・37、Y30グリッド。

形 状 西半分をO-7、東をO-11によつて破壊されているが、円形と推定できる。長径138×短径83cm、深さ57cm。

遺 物 土器(69~71)は加曾利E4式土器。71は刻み降帯を持つ称名寺I式土器。石器は石鐵1、蜂の巣石2が出土している。

備 考 本遺構の所産時期は中期加曾利E4

式期から後期初頭称名寺I式期に比定できる。

JD-6号土坑 (Fig. 14、PL. 7)

位 置 X37・38、Y29グリッド。

形 状 円形。長径70×短径59cm、深さ42cmを測る。

遺 物 土器(72)は加曾利E4式土器。炭化したトチの実。多くの礫と炭化物が出土したことより、集石土坑であったと思われる。

備 考 所産時期は中期加曾利E4式期に比定。

JD-7号土坑 (Fig. 14、PL. 7)

位 置 X36・37、Y30・31グリッド。

形 状 円形。長径170×短径163cm、深さ68cmを測る。

遺 物 土器(73)は称名寺I式土器。(74)は加曾利E4式土器。石器は蜂の巣石2。

備 考 所産時期は中期加曾利E4式期から後期称名寺I式期に比定。

JD-8号土坑 (Fig. 14)

位 置 X37、Y30グリッド。

形 状 円形。長径76×短径66cm、深さ13cmを測り、断面形は摺鉢状。

遺 物 土器(75・76)は加曾利E4式土器。

石器は削器1が出土している。

備 考 所産時期は中期加曾利E4式期から後期称名寺I式期に比定。

JD-9号土坑 (Fig. 14、PL. 8)

位 置 X37、Y29グリッド。

形 状 円形。長径78×短径73cm、深さ59cm。平坦な底面を持つ。

遺 物 土器(77)は加曾利E4式土器。

備 考 所産時期は中期加曾利E4式期。

4 集 石

S-1号集石 (Fig. 14、PL. 8)

位 置 X31、Y26グリッド。

形 状 粗粒安山岩円礫 3個で構成される。

礫は径50cm程であった。

掘り方 下部を精査したが、認められなかつた。

遺 物 周辺から加曾利E4式土器が出土。

5 焼 土 跡

1号焼土跡 (Fig. 14)

位 置 X24、Y26グリッド。

形 状 不整形。長軸131×短軸57cm、深さ4cmを測る。

遺 物 周囲から堀之内I式土器が出土。

2号焼土跡

位 置 X24、Y26グリッド。

形 状 不整形。

3号焼土跡 (Fig. 14)

位 置 X41、Y31グリッド。

形 状 楕円形。長径64×短径45cm、深さ12cmを測る。

4号焼土跡 (Fig. 14)

位 置 X36、Y23グリッド。

形 状 円形。長径21×短径18cm、深さ5cmを測る。

6 包含層の遺物

土器 (Fig. 40~43、PL. 8・16~18)

繩文時代の包含層は遺構が分布するX30~X41、Y25~Y33区とほぼ同様な範囲にみられた。台地の北側に緩く傾斜する旧谷地形の中に流れ込んだ形で多くの土器が検出された。時期的には早期の押型文土器から後期の安行I式土器まで断続的にみられたが、量的には加曾利E4式土器と称名寺I式土器が95%を占めている。以下、時期別に大きく第1群から第10群土器の10に分類した。第1群土器は押型文系土器群を扱った。3個体の資料である。一つは大きめな山形を持つ個体片、含繊維の楕円の個体片、格子目の破片で構成される。第2群土器は沈線文系土器群の三戸・田戸上層式土器である。それぞれ同一個体になるものと考えられ

Tab. 1 包含層出土の繩文式土器一覧

分 類	点 数	割 合
第1群土器 早期前半 押型文系土器群	26	0.6
第2群土器 早期前半 沈線文系土器群	15	0.4
第3群土器 早期後半 条痕文系土器群	18	0.4
第4群土器 前期前半 織縫繩文系土器群	1	0.0
第5群土器 前期後半 竹管文系土器群	103	2.4
第6群土器 中期前半 騰坂・阿玉台式土器	12	0.3
第7群土器 中期後半		
沈線+繩文	822	
加曾利E式土器	607	
第8群土器 後期初頭		
沈線	118	
微隆起	78	
刻突	13	
条線	62	
刻み隆帯	24	
繩文部	523	
無文部	1,763	
把手・突起	20	4,030 95.1
第9群土器 後期前半 堀之内式土器	3	0.1
第10群土器 後期後半 加曾利B・安行I式土器	28	0.7
合 計	4,236	100%

Tab. 2 繩文時代の石器一覧

区分 器種	J 1	J 3	J 4	J 5	JT 1	土 坑	包含層	合 計
	21	2	1	2	7	1	16	50
石錐	3	0	0	0	0	0	4	7
楔形石器	1	1	0	0	1	0	8	11
石匙	1	0	0	0	0	0	1	2
削器	11	14	1	4	1	1	33	65
打製石斧	2	4	0	1	4	0	29	40
磨製石斧	4	0	0	0	0	0	4	8
磨石・圓石	7	5	0	0	2	2	30	46
敲石	5	1	1	0	1	0	11	19
石皿	2	1	1	0	0	0	6	10
蜂の巣石	11	8	4	1	2	6	20	52
糠石器	1	0	0	0	0	0	5	6
砥石	3	0	0	0	0	0	2	5
石棒	1	0	0	0	0	0	0	1
輕石製品	1	0	0	1	0	1	1	4
石核	3	1	0	0	0	0	3	7
調整痕のある剥片	4	7	0	0	0	0	5	16
使用痕のある剥片	18	7	0	7	4	0	61	97
剥片・碎片	171	51	4	17	53	16	446	758
多面体磨石	0	0	0	0	0	0	1	1
綠色片岩	86	0	1	2	5	0	37	131
合計	356	102	13	35	80	28	722	1,336

る。第3群土器は条痕文系土器群を扱った。繩維を混入し内外面に貝殻条痕文を有し、同一個体片である。繩維の量や焼きから比較的古い部類に属する。第4群土器は1片の黒浜式土器である。第5群土器は竹管文系土器群である諸磯b・c・十三菩提式土器を扱った。この中でも浮線文は数点と少なく、集合沈線や結節浮線文の文様が多くみられた。第6群土器は繩文中期の勝坂式土器と阿玉台式土器を扱った。勝坂式は同一個体と考えられ、阿玉台式は1片である。第7群土器は繩文中期後半の加曾利

Tab. 3 繩文時代の石器石材一覧

石材群 種類	第1群石材				第2群石材				第3群石材				第4群				第5群石材		第6群		その他の 合計	
	A 石 頭	B 子 頭	C 珪 質	D 青 色	E 黑 色	F 白 色	G 黑 色	H 灰 色	I 深 色	J 細 粒	K 文 豪	L 四 縫	M 石 英	N ホ ル	O 鉛 緑	P 緑 色	Q 粗 粒	R 砂	S 輕	T そ の 他	合 計	
石錐	15	2			1	1	31															50
石頭	2		1		2	1	1															7
楔形石器	2	3	2			3	1															11
石匙					1	1																2
削器	6		1	40	3	12		1									1	1				65
打製石斧		3	23	3	2	2	1	1	1						1	1						40
磨製石斧			1				1															8
磨石・圓石														3	1		40	1				46
敲石			1	2		3		1		1	2	2	4	1								19
石皿																	3	7				10
蜂の巣石																			3	53		52
鐵			5				1												1	4		6
鐵石																						1
輕石製品																			1	3		4
石核	3			3																		7
調整痕のある剥片	1			6	1	7		1														16
使用痕のある剥片	34	2	2	1	47	1	6		4													97
多面体磨石																						1
合計	63	7	8	2	130	16	60	2	7	6	2	1	3	2	3	8	106	7	3	11	447	

E式土器を扱った。本遺跡の主体を占め、その中でも加曾利E4式土器が極めて多く他のものはごくわずかである。沈線区画や微隆起区画で文様が構成されるものが主体を占め、条線のものもみられた。続く第8群土器は後期初頭の称名寺I式土器であるが、細部において第7群と分離が図れない。加曾利E4式土器に次いで多いが、量比は格段と落ちると思われる。沈線区画による曲線と充填繩文が文様構成の主体を占めるが、8字状やC字状貼付文を有し微隆起区画内円形刺突文、文様の単位区画の刻み縦帶などの文様は、今後、加曾利E式と称名寺式との関係を解明する上で重要なものであり、関東西北部の特色をなす土器である。第9群土器は後期前半の堀之内I式土器を扱った。第10群

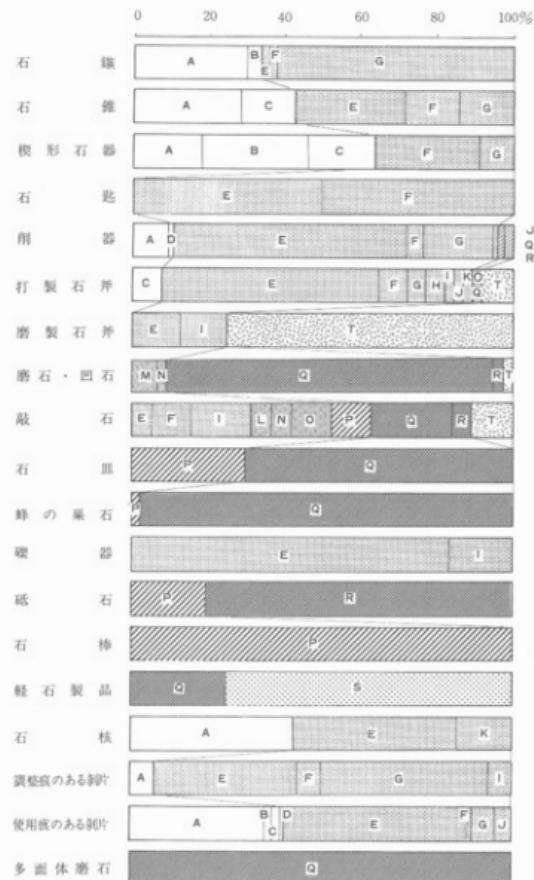
土器は後期の加曾利B式土器の粗製土器と安行I式土器である。

土器群の分布をみると、第1群から第3群は尾根の基部に範囲も小さくまとまって分布する共通性を持つ。時期的に近接するのかもしれない。第5群は尾根の先端と谷地に散在する。第6群は谷地にまとまってみられ、第7・8・10群土器は谷地の斜面に集中をみせる。

凡 例

- 第1群石材 (A~D)
- 第2群石材 (E~K)
- 第3群石材 (L~O)
- 第4群石材 (P)
- 第5群石材 (Q~R)
- 第6群石材 (S)
- そ の 他 (T)

Tab. 4 石器種別石材構成



第7・8群土器の出土状態は、集落から谷地に向かって廃棄された結果といえる。

石器 (Fig. 49~53, PL. 8・20~22)

石器は合計722点検出された。器種でみると、石鎌と蜂の巣石が目立つ。いわゆる中期農耕論の根拠とされた打製石斧が優位を占める石器構成と異なる点が指摘できる。また、打製石斧は上位にくびれを持つ形態が多く、短冊から分銅に移行する時期の典型例といえる。次に石材では関東山地北部産出の緑色片岩が量的にも多く搬入されている点に注目できる。石棒や石皿・砥石・敲石の石製品や石器にも使用されているが、多くは加工の痕跡が認められないことから他の目的が考えられよう。

これらの石材を産地との距離、大きさ、硬さや緻密さ、粘りなどから便宜的に第1から第6群石材に分類した。第1群石材は黒曜石を代表とする緻密な加工に適する石材である。黒曜石や珪質真岩は遠隔地から搬入されたものである。小形の石器に利用されることは産地との移動の距離、産出形状、粘りの弱さが考慮された結果といえよう。第2群石材は黒色頁岩・黒色安山岩を代表格とする県内の一般的石器石材である。中形の加工石器に利用されることは、大きい素材が提供され、粘りがあり、産地が近い結果といえる。ただ、小形の石器にも利用されている。第3群石材としたものは、再加工には向きで円錐のまま利用されるものである。目的に適う形状・大きな素材を河床(利根川)から採取したと考えられる。閃綠岩や石英閃綠岩などの石材である。第4群石材とした緑色片岩も長く利用される石材で、後期以降は石棒などの第2の道具に多用される石材である。産地が多野・秩父地域に限定でき、物流研究に優位な資料である。第5群石材とした粗粒安山岩は赤城山や榛名山を形成している岩石であり、山麓では至るところにみられる。きめが粗く柔らかい石材であり巨大な原材料も入手が可能である。石皿や蜂の巣石に利用されるが時として打製石斧などもみられる。第6群石材としたものは火山から噴出された軽石である。加工がたやすいために様々な石製品として用いられる。

遺物分布は種類別に偏在性はあまりみられず、谷地から多くみられるため、集落から廃棄行為として捨てられた結果といえる。

VI 平安時代の遺構と遺物

調査の結果、平安時代の遺構は堅穴住居址25軒、掘立柱建物址1棟、土坑50基、溝16条が検出された。これらの遺構は基本的にHr-FPF 1とHr-FAの上面で確認され9世紀後半から10世紀前半の所産と考えられる。住居址の分布はA区に8軒、B区に17軒である。特にB区西側にまとまって検出されたことから、現在の厚生住宅下に集落の中心が存在するものと推定できる。土坑はA区に29基、B区に21基であり、このうちA区に確認されたD-8は土葬伸展葬と考えられる墓壙であった。さらに16条確認された溝の中でW-6からはAs-Bの純層の堆積がみられた。

1 住居址

H-1号住居址

揮 図 Fig. 15 写 真 PL. 8

位 置 X 3~5、Y 1・2 グリッド。H-2 の西に位置する。

確認面 全体層序 II 層の面である Hr-FPF 1 層の上で検出された。

重 複 W-10、W-13 と一部重複しており、本住居が先行する。

形 状 調査した範囲は東西(4.50)m、南北(3.38)m。西壁に「張り出し」を持つ横長方形であるが、南側半分は市道のため調査できなかった。

面 積 (13.4)m² 方 位 N-90°-E

埋 土 自然堆積で埋没したと考えられる土層断面であり、基本的には 2 層の暗褐色土が主体をなしている。

H-2号住居址

揮 図 Fig. 15 写 真 PL. 8

位 置 X 5・6、Y 1・2 グリッド。H-1 の東に位置する。

確認面 全体層序 II 層の面である Hr-FPF 1 層の上面で検出された。

重 複 W-10、W-13 と一部重複しており、本住居が先行する。

形 状 東西3.54m、南北4.20m の台形に近い横長方形である。市道のため住居址の南西隅が調査できなかった。

面 積 (13.9)m² 方 位 N-90°-E

埋 土 4 方向から徐々に摺鉢状に堆積している。また、住居中央部最上層に As-B の純層が最大厚20cmで堆積していた。

床 面 II 層から IV 層を掘り込んで地床面と

床 面 II 層から IV 層を掘り込んで、貼り床を施し床面を形成している。凹凸面が少なくほぼ平坦に形成されているが、全体にわたってやわらかかった。確認面からの深さは 29~34cm を測る。

竈 東壁の南に偏在する位置に設置され、本体は壁面より外に設けられる。大部分が調査区域外にあるため、規模は不明。竈前面から焼土が検出された。

掘り方 小凹凸はあるが全体に 10~14cm の厚さで貼り床が施工されていた。

遺 物 図示したものは、須恵蓋(1)、瓦(2)、土鍾(3)である。また、鉄釘 1 点の出土がある。他に、住居中央部から粗粒安山岩の河原石が 10 数点出土している。

している。凹凸が少なく、ほぼ平坦な床面であるが、住居址中央部が周辺部と比べてやや低くなっている。確認面からの深さは 32~41 cm を測る。

竈 東壁の南に偏在した位置に設けられ、主体部を壁外に持つものである。焚口は幅 69 cm、燃焼部長 50cm を測り、粗粒安山岩の右袖石と、支柱が検出された。

掘り方 住居址中央部や東よりに窪みがみられたが、原則としては掘り方を持たない。

遺 物 図示したものは、瓦(4)、須恵楕(5)、須恵台鉢(6)、須恵甕(7)、須恵羽釜(8)である。他に鉄滓 2 点、鉄器 1 点が出土している。竈内から須恵羽釜、須恵甕が検出された。

H-3号住居址

挿図 Fig. 16・17 写真 PL. 8・9
位置 X9・10、Y2・3 グリッド。H-4の南西に位置する。

確認面 全体層序II層の面であるHr-FPF 1層の上面で検出された。

重複 W-10と一部重複しており、本住居が先行する。また、D-18とも重複しているが、前後関係は把握できなかった。

形状 東西4.22m、南北4.80mの横長方形を呈する。

面積 18.2 m² 方位 N-90°-E

埋土 4方向から徐々に自然堆積して埋没したことがうかがわれる土層断面である。最上層は全面にわたって、As-Bの純層が最大厚30cm堆積していた。

床面 II層からV層の最上部にかけて掘り込んで地床面としている。全体的に良く踏み固められており、特に4本の主柱穴を結んだラインの内側は、堅緻な面となっている。中央部北側のP₁とP₂の南に長さ2.6mで幅20cm、深さ2~3cmの『間仕切り溝』が存在している。

竈 東壁中央より1.2m南に偏した位置に付設されている。本体は壁面より外側に設置される。焚口は幅73cm、燃焼部長132cmを

H-4号住居址

挿図 Fig. 17・18 写真 PL. 8・9
位置 X10・11、Y1~3 グリッド。H-3の北東、H-5の南西に位置する。

確認面 全体層序II層で検出。

形状 東西5.48m、南北5.85mの周囲に不整の掘り込みを持つ横長方形を呈する。不整の掘り込みは段差があり、傾斜をもって立ち

測り、粗粒安山岩を主体とした良好な石組を検出できた。なお構築材には砂質凝灰岩も一部用いられていた。

柱穴 住居の対角線からややずれた位置に主柱穴4個が検出された。各柱穴の規模は、P₁・長径35×短径28cm、深さ30cm、P₂・長径35×短径27cm、深さ23cm、P₃・長径33×短径26cm、深さ24cm、P₄・長径34×短径31cm、深さ35cmである。ほかにP₅・長径27×短径22cm、深さ25cmが南壁際に検出された。

貯蔵穴 南東部にP₆・長径103×短径67cm、深さ29cmの楕円形のものが、また、南西部にP₇・長径85×短径65cm、深さ43cmの円形のものが検出された。

掘り方 小さな凹凸はあるが、基本的には貼り床は認められなかった。しかし、2個の床下土坑が検出された。各土坑の規模は、D₁・長径97×短径75cm、深さ29cm、D₂・長径115×短径85cm、深さ9cmでそれぞれ楕円形を呈しており、2個とも白色粘土を底面に2~3cmの厚さで貼付。

遺物 図示したものは、須恵カワラケ(9~12)、黒色土器(13)、須恵甕(14)、灰釉小瓶(15)、瓦(16)である。他に鉄器1点が出土している。

上がる。

面積 24.5 m² 方位 N-90°-E

埋土 Hr-FPF 1、Hr-FA、As-Cを含む黄褐色土が、まとまりを持って堆積しており、周囲に構築された周堤帯から、廃絶後に一時期に流入したものと考えられる。

床面 II層からV層上位にかけて掘り込ん

で地床面としている。全体的に良く踏み固められており、凹凸面が少なく平坦に形成されている。確認面からの深さは43~71cmを測る。

竈 東壁中央より72cm南へ偏った位置にあり、本体は壁外に構築されている。竈壁には砂質凝灰岩の切石8点が補強材としてびっ

H-5号住居址

揮 図 Fig. 19 写 真 PL. 9

位 置 X11・12、Y 0 ~ 2 グリッド。H-4 の北東に位置する。

確認面 全体層序II層面で検出された。

重複 D-17と一部重複しているが、前後関係は把握できなかった。

形 状 東西4.90m、南北5.36mの横長方形であるが、市道のため北壁の一部は調査できなかった。

面 積 (23.5)m² 方 位 N-90°-E

埋 土 4方向から摺鉢状に堆積しており、Hr-FPF1、Hr-FA、As-Cを含む黄褐色土が主体。

床 面 II層とIII層を掘り込んで貼り床を施し床面を形成。凹凸も少なく平坦に形成されており、全面にわたってかなり良く踏み固められている。確認面からの深さは37~46cmを測る。

竈 東壁中央より39cm南へ偏った位置の壁外にあり、両側に「地山掘り残しの棚」をもっている。焚口の幅88cm、燃焼部長95cmで、構築材には砂質凝灰岩の切石が1点用いられていた。

柱 穴 住居四隅のほぼ対角線上に4個の柱穴が検出された。各柱穴の規模は、P₁・長 H-6号住居址

揮 図 Fig. 20 写 真 PL. 9

しりと用いられていた。焚口は幅55cm、燃焼部長124cm、煙道も良好な状態で検出された。

遺 物 図示したものは、土鍤(17)、土師杯(18~20)、黒色土器(21)、須恵皿(22)、灰釉碗(23)、須恵椀(24)、須恵蓋(25)、土師甕(26)である。他には鉄器1点が出土している。

径26×短径22cm、深さ21cm、P₂・長径40×短径30cm、深さ36cm、P₃・径21×深さ29cm、P₄・径21×深さ21cmである。

貯藏穴 住居東南隅、竈右側に検出された。

長径81×短径68cmの楕円形で、深さは最深部で25cmであった。

掘り方 全面に20~30cmの厚さで掘り方が埋められ、床を構築している。また、全部で9個の床下土坑が検出された。各土坑の規模は、D₁・長径165×短径140cm、深さ27cm、D₂・長径90×短径54cm、深さ18cm、D₃・長径118×短径100cm、深さ21cm、D₄・長径53×短径50cm、深さ20cm、D₅・長径167×短径1cm、深さ25cm、D₆・長径130×短径90cm、深さ35cm、D₇・長径130×短径88cm、深さ35cm、D₈・長径78×短径67cm、深さ35cm、D₉・長径37×短径29cm、深さ8cmであった。D₂~D₉はそれぞれ重複関係を持っていた。また、床下土坑からは多くの遺物が検出された。

遺 物 図示したものは鉄釘(27)、土師杯(28~30)、須恵椀(32・34・39)、須恵杯(35)、土師甕(31・33・36・37・40~42)、灰釉碗(38)である。他に鉄釘1点、鉄津1点、鉄器1点が出土している。

位 置 X22・23、Y 2・3 グリッド。

確認面 全体層序II層面であるHr-FPF 1層の上面で検出された。

形 状 東西3.14m、南北3.86mの横長方形である。

面 積 13.1 m² **方 位** N-76°-E

埋 土 自然堆積により埋没したと考えられる土層で大きく2層に分けられる。

床 面 II層・III層を掘り込んで貼り床を施し床面を作出する。床下土坑のため中央部に数cmの段差と窪みが確認された以外は平坦で堅緻な床であった。確認面からの深さは39~46cmを測る。

H-7号住居址

挿 図 Fig. 21

位 置 X22・23、Y4・5グリッド。

確認面 全体層序II層であるHr-FPF 1層の上面で検出された。

重 複 D-3と一部重複しているが、前後関係は不明である。

形 状 東西(3.06)m、南北4.06mの横長方形である。厚生住宅の下水管付設に伴い約1mの幅で住居の南から北に向かって掘削を受け、南壁と東壁の大部分、および竈が破壊されていた。

面 積 (10.2)m² **方 位** N-76°-E

埋 土 Hr-FPF 1、Hr-FAのパミス粒をふくむ褐色土で埋没しており、自然の堆積と思われる。

床 面 II層・III層を掘り込んで貼り床を施し床面を構成している。全体的によく踏み固められており、平坦で堅緻な面となっている。

H-8号住居址

挿 図 Fig. 21

位 置 X1・2、Y-1~1グリッド。H-

竈 東壁の中央より79cm南へ偏した位置の壁外にある。焚口幅68cm、燃焼部長85cmを測り、焼土が充填されていた。

掘り方 貼り床はほぼ全体に10~15cmの厚さで施工されている。住居中央と北壁際に2つの床下土坑が検出された。各土坑の規模は、D₁・長径146×短径77cm、深さ16cm、D₂・長径150×短径111cm、深さ14cmであった。

遺 物 図示したものは、須恵椀(44・45・48・49・51・53)、土師甕(43・47・50・52・54)、カワラケ(46)である。他に綠釉陶器が1点出土している。

確認面からの深さは41~49cmを測る。

竈 破壊されており、調査できなかったが、少量の焼土が検出された。

貯藏穴 南西隅にP₁・長径72×短径52cm、深さ35cmで楕円形を呈す。また、北壁中央部に径30×深さ10cmの円形のP₂が検出され、鉄器が出土した。

掘り方 小さな凹凸はあるが、全体に10~15cmの厚さで貼り床が施工されている。掘り方は周囲を段に残したため、使用面での床面の色が分かれていた。また、住居中央部には、長径193×短径80cm、深さ10cmの不整形の床下土坑D₁が、更に北壁中央部からは長径60×短径47cm、深さ21cmの床下土坑D₂が検出された。

遺 物 図示したものはカワラケ(55)、須恵椀(56)、須恵蓋(57)である。他に鉄器1点が出土している。

5の北西に位置する。

確認面 全体層序II層であるHr-FPF 1層の

上面で検出された。

形 状 ほとんどが調査区域外になるため、調査は全体の約1/7にすぎない。形状も確認できなかったが、横長方形と推定できる。東西にあたる短辺は3.33mであった。

調査面積 (2.9)m² **方 位** N-81°-E

埋 土 白色バミス、Hr-FPF 1、Hr-FAを含む褐色土により埋没している。

床 面 II層とIII層を掘り込んで貼り床を施し床面を形成している。凹凸も少なく平坦に形成されている。確認面からの深さは40~53cmを測る。

竈 調査区域外のため確認できなかった

H-9号住居址

挿 図 Fig. 22

位 置 X14・15、Y21・22グリッド。W-16の西に位置する。

確認面 全体層序V層に相当する面で検出された。

形 状 住居の北半分が調査区域外のため、全体の形状は確認できなかったが、東西(2.4)mの横長方形と推定できる。

面 積 (3.9)m² **方 位** N-81°-E

埋 土 白色バミス、焼土を含む褐色土によ

H-10号住居址

挿 図 Fig. 21

位 置 X17・18、Y23・24グリッド。H-19の南に位置する。

確認面 全体層序V層に相当する面で検出された。

形 状 東西2.67m、南北3.00mの横長方形を呈する。

面 積 7.4 m² **方 位** N-85°-E

埋 土 白色バミス、As-Bを含む黒褐色土

が東壁に付設されたものと推定できる。

貯蔵穴 東南隅にP₁・長径65×短径37cm、深さ8cmのものが検出されたが、一部調査区域外のため完掘できなかった。

掘り方 全面に10~15cmの厚さで貼り床が施工されている。住居中央南壁寄りに長径(95)×短径(30)cm、深さ(21)cmの床下土坑D₁が検出されたが、そのほとんどが調査区域外であり、形状も不明瞭である。また、長径40×短径23cm、深さ10cmのD₂も検出された。

遺 物 図示したものは土師甕(58・60)、須恵杯(59)である。また、掘り方面から鎌1点が出土。

り埋没していた。特に竈付近では焼土、灰を含む埋土が多く認められた。

床 面 V層に相当する面を7~9cm掘り込み地床面としている。

竈 北半分は調査区域外のため確認できなかったが、東壁の南よりに位置していると推定できる。構築材には砂質凝灰岩の切石が数点用いられていた。

遺 物 数点の検出。

により埋められている。

床 面 V層に相当する面を13~21cm掘り込んで地床面としている。

竈 東壁中央より南寄りの壁外に多量の焼土が確認されたが、竈は確認できなかった。焼土の範囲の南端に砂質凝灰岩の切石が数点検出された。

遺 物 土器片の他、鉄釘1点、鉄器1点、モモの果核1点が出土している。

H-11号住居址

挿図 Fig. 22 写真 PL. 10
 位置 X21、Y21・22グリッド。H-12の北西に位置する。

確認面 全体層序Ⅲ層であるAs-C層の上面で検出された。

形狀 東西2.43m、南北3.14mの横長方形を呈する。

面積 7.5 m² 方位 N-71°-E

H-12号住居址

挿図 Fig. 23 写真 PL. 10
 位置 X21・22、Y22・23グリッド。H-11の南東、H-13の北東に位置する。

確認面 全体層序Ⅲ層の上面で検出された。

形狀 東西3.87m、南北2.87mの縦長方形を呈する。

面積 10.3 m² 方位 N-76°-E

床面 確認面からの深さは5~6cmと極めて残りが悪かった。床面は平坦で堅緻面が部分的にみられた。

竈 東壁中央より南へ44cm偏った位置に
H-13号住居址

挿図 Fig. 23 写真 PL. 10
 位置 X20・21、Y23・24グリッド。H-14の西、D-27の北に位置する。

確認面 全体層序Ⅲ層の上面で検出された。

形狀 東西3.44m、南北3.21mのはば正方形を呈する。

面積 10.2 m² 方位 N-78°-E

埋土 As-Cを含む黒褐色土によって埋没している。

床面 確認面からの深さは5~9cmと極め
H-14号住居址

挿図 Fig. 24 写真 PL. 10

床面 確認面からの深さは5~6cmと極めて浅かった。床面はほぼ平坦で堅緻であった。

竈 東壁中央より南へ69cm偏った位置にあり、壁面より外側に付設されている。焚口幅73cm、燃焼部長42cmを測る。また、構築材には砂質凝灰岩の切石が数点用いられていた。
 遺物 図示したものは、須恵羽釜(62・63)、須恵椀(61)である。他に竈内から鉄器1点。

あり、本体は壁外に付設されている。焚口幅56cm、燃焼部長54cmを測る。構築材と支柱には砂質凝灰岩の切石が用いられていた。

貯藏穴 住居北東隅に検出された。直径70cmのほぼ円形を呈する。深さは最深部で13cmであった。砂質凝灰岩製の土製支柱が出土した。

掘り方 確認できなかった。

遺物 図示したものは、須恵杯(64・65・67)、須恵椀(68)、砥石(66)である。他に鉄器1点が出土している。

て残りが悪い。竈前面は堅緻な床がみられた。全体に平坦な床を構成していた。

竈 東壁中央より65cm北へ偏った位置で壁面より外側にある。焚口幅59cm、燃焼部長61cmを測る。また、構築材には砂質凝灰岩の切石が用いられていた。

掘り方 確認できなかった。

遺物 図示したものは、須恵椀(69)1点である。

位置 X21・22、Y23・24グリッド。H-13

の東に位置する。

確認面 全体層序Ⅲ層の上面で検出された。

重複 H-15と重複しており、本住居が先行している。そのため南壁、東壁と竈が切らされている。

形状 東西(2.81)m、南北3.68mの横長方形を呈する。

面積 (5.4)m² **方位** N-69°-E

埋土 As-Cを含む褐色土が、自然堆積したと考えられる状態で住居を埋めていた。

H-15号住居址

挿図 Fig. 24 **写真** PL. 10

位置 X21・22、Y24・25グリッド。H-16の北、D-32の西に位置する。

確認面 全体層序Ⅲ層の面で検出された。

重複 H-14の中央部分より南東を切っている。

形状 東西3.00m、南北3.66mの横長方形を呈する。

面積 10.2 m² **方位** N-78°-E

埋土 自然堆積によって埋没したと考えられる土層断面である。

床面 Ⅲ層を掘り込んで貼り床をして床面を形成している。全体的に平坦に形成され、堅緻な面となっている。確認面からの深さは12~22cmを測る。

H-16号住居址

挿図 Fig. 23 **写真** PL. 10

位置 X21・22、Y25・26グリッド。H-15の南に位置する。

確認面 全体層序Ⅲ層の面で検出された。

形状 南側がすでに土取りのため掘削を受けており、完掘できなかったが、東西3.28m、南北(2.51)mの横長方形と推定できる。

床面 Ⅲ層を掘り込んで貼り床を行い床面を造っている。凹凸面が少なく、全体的に良く踏み固められており、平坦な面となっている。確認面からの深さは15~20cmを測る。

竈 H-15により破壊されていた。

掘り方 長径145×短径90cm、深さ19cmの不整形の床下土坑D₁が検出された。

遺物 図示したものは、須恵杯(72)、須恵楕(70)、土師杯(71)である。

竈 東壁中央より南へ51cm偏った位置の壁外にある。焚口幅67cm、燃焼部長65cmを測る。支柱は砂質凝灰岩で作られており、構築材にも砂質凝灰岩が数点用いられていた。

掘り方 小さな凹凸はあるが、全体に2~3cmの厚さで貼り床が施工される。またさらに、3個の床下土坑が検出された。各土坑の規模は、D₁・長径65×短径46cm、深さ17cm、D₂・長径119×短径87cm、深さ25cm、D₃・長径50×短径47cm、深さ9cmでそれぞれ椭円形を呈していた。

遺物 図示したものは、灰釉皿(76)、須恵楕(75)、須恵杯(73・74)である。他に鉄釘2点が出土。

調査面積 8.0 m² **方位** N-76°-E

埋土 As-Cを含む褐色土によって埋没している。

床面 Ⅲ層を掘り込んで貼り床を施し床面としている。凹凸が少ない平坦で堅緻な面である。確認面からの深さは16~20cmを測る。

竈 東壁中央より南へ偏った位置の壁外

にあるが、約1/2が存在しないため、全容は明らかでない。燃焼部長60cmを測る。また、竈内には多量の焼土が分布していた。

掘り方 2個の床下土坑が検出された。D₁は長径160×短径83cm、深さ20cmの楕円形であった。D₂については、完掘することがで
H-17号住居址

挿図 Fig. 25 写真 PL. 10

位置 X23、Y25・26グリッド。H-16の東に位置する。

確認面 全体層序Ⅲ層の上面で検出された。

形状 東西2.86m、南北については住居南側の土取りのため存在しないが、3.3m前後の横長方形であると推定できる。

面積 (8.4)m² **方位** N-80°-E

埋土 As-Cを含む褐色土によって埋没している。

床面 Ⅲ層を掘り込み貼り床して床面としている。全面にわたって堅緻な面となっている。確認面からの深さは15~20cmを測る。

竈 東壁中央より南へ偏した壁の外側に
H-18号住居址

挿図 Fig. 25

位置 X17、Y22グリッド。H-19の西に位置する。

確認面 全体層序V層に相当する面で検出さ

H-19号住居址

挿図 Fig. 25

位置 X17・18、Y22・23グリッド。H-10の北に位置する。

確認面 全体層序V層の面で検出された。

H-20号住居址

挿図 Fig. 26 写真 PL. 10

位置 X30、Y27・28グリッド。H-21の

きなかったが、長径178cm、深さ21cmの楕円形である。

遺物 図示したものは、須恵杯(78・80)、須恵楓(79)、鉄釘(77)である。この他に覆土から鉄釘1点が出土した。

位置する。焚口幅74cm、燃焼部長70cmを測り、構築材には砂質凝灰岩が数点用いられていた。
貯藏穴 住居東南部、竈右側に検出された。長径107×短径73cmの楕円形で、深さは最深部で36cmであった。

掘り方 3個の床下土坑が検出された。各土坑の規模は、D₁・長径100×短径88cm、深さ27cm、D₂・長径88×短径70cm、深さ15cm、D₃・長径112×短径80cm、深さ21cmであった。

遺物 図示したものは、灰釉台長壺(84)、灰釉楓(90)、灰釉皿(82)、土師壺(88・91)、土師杯(85・86)、須恵楓(81・87・89)、須恵杯(83)である。この他に鉄釘1点が出土。

れた。

形状 本住居のほとんどが調査区域外であるため、焼土を伴う竈の一部がわずかに検出されたのみであった。

形状 本住居の大部分が調査区域外にあたるため、住居西南隅と考えられる所が一部検出されたにとどまった。

西、J-4の東に位置する。

確認面 全体層序Ⅲ層の面で検出された。

形 状 東西2.43m、南北3.44mの横長方形を呈する。

面 積 7.7 m² 方 位 N-82°-E

埋 土 ローム粒子が混じる褐色土の上に、As-Cを含む暗褐色土が堆積している。

床 面 III層からVI層にかけて掘り込み、小さな凹凸を貼り床し床面を作っている。ほぼ平坦に形成されているが、全体に軟らかい感じであった。確認面からの深さは20~31cmをH-21号住居址

挿 図 Fig. 26 写 真 PL. 10

位 置 X31・32、Y26~28グリッド。H-20の東、H-22の西に位置する。

確認面 全体層序IV層の面で検出された。

重 複 住居北西隅にJD-1と重複し、本住居が新しい。

形 状 住居東壁に沿った耕作のため東壁の大部分と竈が破壊されているが、東西(3.59)m、南北5.02mの横長方形である。

面 積 (16.2)m² 方 位 N-73°-E

埋 土 As-Cをわずかに含む暗褐色土によって埋没している。

床 面 IV層からVI層にかけて掘り込み、さらにその上面に貼り床をして床面としている。全体的に良く踏み固められており、平坦な面を形成している。確認面からの深さは22~35cmを測る。

H-22号住居址

挿 図 Fig. 27

位 置 X32・33、Y26~28グリッド。H-21の東に位置する。

確認面 全体層序IV層の面で検出された。

重 複 住居中央よりやや北に偏った位置でJD-2と重複し、本住居が新しい。

測る。

竈 東壁中央より53cm南へ偏った位置の壁外にある。焚口幅75cm、燃焼部長73cmを測る。

掘り方 竈前面に径90×深さ13cmのほぼ円形に近い床下土坑D₁が検出された。

遺 物 小破片のため図上復元できるものはなかった。また、炭化果核1点が出土。

竈 耕作により破壊され、わずかに煙道の先端が確認できた。

周 溝 北壁と東壁の北半分、および南壁の西半分にかけて検出された。幅30cm、深さ4~10cmを測る。

貯蔵穴 住居東南隅、竈右側にP₁・長径106×短径55cm、深さ22cmが貯蔵穴である。さらに長径23×短径15cm、深さ20cmのP₂が検出された。

掘り方 全面に15~20cmの厚さで掘り方が埋められ床を構築している。掘り方底面は小さな凹凸の他に、中央部からわずかに北東に偏った位置がやや掘りくぼめられている。

遺 物 図示したものは、土師杯(92・93・95)、須恵杯(94)、須恵碗(96)、土師壺(97)である。この他に青銅製品1点、綠釉陶器1点、鉄器1点の出土がある。

形 状 耕作によって住居の東壁と竈が破壊されているが、東西3.34m、南北5.05mの横長方形である。

面 積 15.8 m² 方 位 N-66°-E

埋 土 白色バミスやHr-FPF 1等が混入する褐色土によって埋没している。

床面 IV層からVI層にかけて掘り込み、その上面の小さな凹凸を埋めて、ほぼ平坦な堅緻な床面を形成している。耕作による擾乱が一部入っている。確認面からの深さは23~26cmである。

竈 東壁中央より71cm南へ偏った位置にある。耕作のため約半分が破壊されている。構築材には砂質凝灰岩の切石が17点、安山岩が3点用いられていた。

H-23号住居址

挿図 Fig. 28・29 **写真** PL. 10
位置 X34・35、Y28グリッド。J-3の西、J-5の北に位置する。

確認面 全体層序IV層の面で検出された。

重複 住居中央から北東隅にかけてH-24によって切られている。

形状 H-24と一部重複しているが、東西3.42m、南北3.73mの正方形と推定できる。

面積 (7.5)m² **方位** N-90°-E

埋土 自然堆積で埋没したと思われる土層断面である。白色バミスをわずかに含む。

床面 IV層からVI層にかけて掘り込み、さらに小さな凹凸を貼り床して床面を形成して
H-24号住居址

挿図 Fig. 28・29 **写真** PL. 10
位置 X35・36、Y27・28グリッド。J-5の北に位置する。

確認面 全体層序IV層の面で検出。

重複 住居北東でJ-3と重複し本住居が新しい。また、H-23を切っている。

形状 南北4.54m、東西3.67mの横長方形を呈する。

面積 15.6 m² **方位** N-63°-E

埋土 黒土のブロックが若干認められたが、

掘り方 2個の床下土坑が検出された。各土坑の規模は、D₁・長径146×短径126cm、深さ36cmで灰白色の粘土が貼ってあった。また、D₂・長径126×短径91cm、深さ8cmで灰茶色の粘土が貼ってあった。

遺物 図示したものは、土師小台甕(99)、土師甕(102)、須恵杯(101)、鉄釘(100)であり、鉄釘が他に1点出土している。

いる。全面にわたって踏み固められていた。確認面からの深さは9~29cmを測る。

竈 重複のため一部切られていたが、推定東壁中央より82cm南へ偏った位置の壁外にあった。燃焼部長93cmを測る。

貯藏穴 住居南東隅、竈右側に検出された。長径65×短径45cmの梢円形を呈し、深さ15cmであった。

掘り方 床下土坑D₁を確認。規模は長軸143×短軸80cm、深さ9cmを測り、底面に灰白色の粘土が薄く貼ってあった。

遺物 破片の出土はみられたが図示できたものは、須恵瓶(103)の1点だけである。

白色バミスを混じる褐色土が自然堆積したと考えられる土層断面である。

床面 IVからVI層にかけて掘り込み、その上面のわずかな凹凸を貼り床し床面としている。良く踏み固められており、平坦な面であった。確認面からの高さは30~45cmを測る。

竈 東壁中央より96cm南へ偏った位置の壁外に設置される。焚口幅76cm、燃焼部長70cmを測り、両袖と支柱には砂質凝灰岩の切石が構築材として使用されていた。

掘り方 中央部で2個の床下土坑が検出された。各土坑の規模は、D₁・径104cmの円形を呈し、深さは14cmで、白色粘土が底面に厚さ3~4cmで貼られていた。D₂・径42cmの円

H-25号住居址

揮 図 Fig. 29 写 真 PL. 10

位 置 X39・40、Y27・28グリッド。

確認面 全体層序II層の面で検出された。

形 状 一辺3.4mの隅円正方形を呈する。壁は傾斜を持って立ち上がる。

面 積 10.4 m² **方 位** N-86°-E

埋 土 Hr-FA、As-C等を含む黄褐色土が自然堆積したと考えられる土層断面である。

床 面 IIからIV層にかけて掘り込み、さらにその上面に4~5cmの貼り床をして床面を形成している。良く踏み固められており、堅緻な面となっている。確認面からの深さは29~32cmを測る。

形を呈し、深さ25cmであった。

遺 物 図示できたものは、土師杯(104)、土師小台甕(109)、須恵杯(106・108)、須恵碗(107)、須恵コップ(105)である。

竈 東壁中央より15cm南へ偏した位置の壁外にある。焚口幅72cm、燃焼部長77cmを測り、両袖石と支柱には砂質凝灰岩の切石が用いられていた。この他にも砂質凝灰岩の切石が3点用いられていた。

貯藏穴 住居東南隅、竈右側で検出された。長径80×短径42cmの梢円形で、深さ18cmであった。

掘り方 小さな凹凸を埋めて平坦な床面を形成している。

遺 物 図示できたものは、土師甕(114・115)、須恵蓋(111・112)、須恵杯(110)、須恵碗(113)である。

2 掘立柱建物址

B-1号建物址 (Fig. 30、PL. 11)

位 置 X8・9、Y1・2グリッド。H-3の北に位置する。

形 状 約14.0m²の床面積をもつ、2間×2間の総柱の建物である。柱穴の平面形態は円・

梢円形である。柱穴の深さは30~56cm、各柱穴底の比高もほぼ一定である。柱間は東-西で約1.2m、南-北で1.3mを測る。

3 土 坑

D-1号土坑 (Fig. 31、PL. 11)

位 置 X9、Y1・2グリッド。

形 状 円形。長径92×短径84cm、深さ38cmを測る。底面は平坦であった。

D-2号土坑 (Fig. 31)

位 置 X13・14、Y2・3グリッド。

形 状 不整形。長軸165×短軸155cm、深さ

86cmを測る。平坦な底面。

D-3号土坑 (Fig. 31)

位 置 X23、Y4・5グリッド。

形 状 隅円方形。H-7号住居址と重複しているため規模は不明瞭であるが、推定長軸100×短軸50cm、深さ46cm。平坦な底面。

D-4号土坑 (Fig. 31, PL. 11)

位 置 X13、Y1 グリッド。

形 状 円形。長径98×短径88cm、深さ58cmを測る。底面は平坦であった。

D-5号土坑 (Fig. 31)

位 置 X14、Y1 グリッド。

形 状 不整形。長軸87×短軸64cm、深さ15cmを測る。断面形は緩やかな摺鉢状を呈する。

D-6a号土坑 (Fig. 31)

位 置 X14、Y1 グリッド。

形 状 楕円形。長径79×短径70cm、深さ20cmを測る。底面は平坦であった。

D-6b号土坑 (Fig. 31)

位 置 X14、Y1 グリッド。

形 状 楕円形。長径102×短径63cm、深さ11cmを測る。D-6a号土坑と重複する。

D-7号土坑 (Fig. 31)

位 置 X15、Y1 グリッド。

形 状 角円方形。北側をI-1によって切られているために形状は定かではないが、長軸101×短軸75cm、深さ61cmと推定できる。

D-8号土坑 (Fig. 31, PL. 11)

位 置 X25、Y11・12グリッド。

形 状 長軸235×短軸70cmの長方形を呈し、深さ89cmを測る。平坦な底面を持つ。

遺 物 灰釉碗(116)と須恵碗(117)が1点ずつ完形で出土した。また、鉄製の刀子が1点、鉄釘(118~120)が数点出土している。また、底面には粗粒安山岩の円礫が4点が配されており、棺を置く台石と推定できる。以上のことから、平安時代の土塙墓と考えられる。

D-9号土坑 (Fig. 31)

位 置 X21、Y5 グリッド。W-6の中に位置する。

形 状 楕円形。長径136×短径119cm、深さ30cmを測る。底面は凹凸が多い。

D-10号土坑 (Fig. 31, PL. 11)

位 置 X14、Y1・2 グリッド。

形 状 円形。長径110×短径105cm、深さ72cmを測る。底面は平坦であった。

遺 物 出土点数は多かったが図示できるものはない。

D-11号土坑 (Fig. 31, PL. 11)

位 置 X13、Y1・2 グリッド。

形 状 楕円形。長径124×短径118cm、深さ78cmを測る。底面に一段下がった円形の掘り込みを有する。

遺 物 出土点数は多かったが復元できるものはなかった。

D-12号土坑 (Fig. 31)

位 置 X13、Y1 グリッド。

形 状 楕円形であるが北側の一部が調査区域外であるため完掘できなかった。規模は、長径104×短径86cm、深さ25cmと推定できる。底面は平坦であった。

D-13号土坑 (Fig. 31)

位 置 X13、Y1 グリッド。

形 状 柱穴状の小円形土坑。長径74×短径58cm、深さ25cmを測る。

D-14号土坑 (Fig. 31)

位 置 X13、Y1 グリッド。

形 状 不整形。北側が調査区域外であるため形状は明らかでないが、長軸120×短軸70cm、深さ48cmと推定できる。底面は平坦。

D-15号土坑 (Fig. 31)

位 置 X14、Y1・2 グリッド。

形 状 楕円形。長径115×短径97cm、深さ48cmを測る。東壁をイモ穴によって切られて

いる。底面は平坦であった。

D-16号土坑 (Fig. 31、PL. 11)

位 置 X14、Y1 グリッド。

形 状 円形。長径85×短径76cm、深さ32cmを測る。底面は平坦であった。

D-17号土坑 (Fig. 31)

位 置 X11・12、Y2 グリッド。

形 状 円形。北半分をH-5号住居址と重複する。規模は、径90×深さ29cmと推定できる。平坦な底面であった。

D-18号土坑 (Fig. 32)

位 置 X9・10、Y2 グリッド。

形 状 楕円形。南半分をH-3号住居址と重複する。規模は、長径87×短径56cm、深さ25cmと推定できる。底面は平坦。

D-19号土坑 (Fig. 32、PL. 11)

位 置 X8、Y1 グリッド。

形 状 楕円形。長径89×短径76cm、深さ22cmを測る。断面形は摺鉢状を呈する。

D-20 a号土坑 (Fig. 32、PL. 12)

位 置 X9・10、Y1 グリッド。

形 状 円形。長径73×短径70cm、深さ31cmを測る。壁は緩やかな傾斜を持ち、底面は平坦であった。

D-20 b号土坑 (Fig. 32、PL. 12)

位 置 X9・10、Y1 グリッド。

形 状 円形。長径70×短径65cm、深さ12cmを測る。D-20 a号土坑と重複する。

D-21号土坑 (Fig. 32)

位 置 X10、Y1 グリッド。

形 状 円形。長径61×短径58cm、深さ30cmを測る。底面は平坦であった。

D-22 a号土坑 (Fig. 32、PL. 12)

位 置 X10、Y1・2 グリッド。

形 状 楕円形。長径153×短径133cm、深さ33cmを測る。底面は平坦。

D-22 b号土坑 (Fig. 32、PL. 12)

位 置 X9・10、Y1 グリッド。

形 状 D-22 aとの重複や、西側をイモ穴に切られているために不明瞭であるが、長径90×短径55cm、深さ37cmの円形と推定できる。

D-22 c号土坑 (Fig. 32、PL. 12)

位 置 X9・10、Y1・2 グリッド。

形 状 D-22 aと重複しているが、径87cm、深さ25cmの円形と推定できる。

D-23 a号土坑 (Fig. 32、PL. 12)

位 置 X10、Y2 グリッド。

形 状 楕円形。長径102×短径95cm、深さ24cmを測る。底面は平坦であった。

D-23 b号土坑 (Fig. 32、PL. 12)

位 置 X9・10、Y2 グリッド。

形 状 径85×深さ34cmの円形と推定できる。D-23 a号土坑と重複する。

D-24号土坑 (Fig. 32)

位 置 X13、Y24・25 グリッド。

形 状 楕円形。長径200×短径155cm、深さ8cmを測る。断面形は緩やかな摺鉢状。

D-25号土坑 (Fig. 32)

位 置 X13・14、Y24 グリッド。

形 状 不整形。長軸233×短軸123cm、深さ9cmを測る。断面形は緩やかな摺鉢状。

D-26号土坑 (Fig. 32)

位 置 X14・15、Y25・26 グリッド。

形 状 不整形。長軸235×短軸135cm、深さ29cmを測る。土坑北東部の底面に、一段下がった長径130×短径100cmの楕円形の掘り込みを有する。

D-27号土坑 (Fig. 32)

位 置 X20、Y24グリッド。

形 状 円形。長径85×短径77cm、深さ17cmを測る。底面は平坦であった。

D-28号土坑 (Fig. 32)

位 置 X23、Y23グリッド。

形 状 円形。長径100×短径95cm、深さ9cmを測る。

D-29号土坑 (Fig. 32)

位 置 X23、Y24グリッド。

形 状 円形。長径102×短径98cm、深さ15cmを測る。

D-30号土坑 (Fig. 32)

位 置 X24、Y23・24グリッド。

形 状 楕円形。長径86×短径70cm、深さ60cmを測る。底面は平坦。

D-31号土坑 (Fig. 32)

位 置 X24、Y24グリッド。

形 状 楕円形。長径118×短径55cm、深さ31cmを測る。

D-32号土坑 (Fig. 32)

位 置 X22・23、Y25グリッド。

形 状 円形。長径98×短径87cm、深さ9cmを測る。底面は平坦であった。

遺 物 布目瓦が1点出土した。

D-33号土坑 (Fig. 32)

位 置 X23・24、Y24・25グリッド。

形 状 円形。長径111×短径106cm、深さ14cmを測る。

D-34号土坑 (Fig. 33, PL. 12)

位 置 X25・26、Y25グリッド。

形 状 楕円形。長径131×短径52cm、深さ85cmを測る。底面に一段下がった円形の掘り込みを有する。

遺 物 土師甕(121)が1点出土した。

D-35号土坑 (Fig. 33)

位 置 X26、Y26グリッド。

形 状 楕円形。長径85×短径70cm、深さ7cmを測る。断面形は緩やかな摺鉢状を呈する。

D-36号土坑 (Fig. 33)

位 置 X27、Y26グリッド。

形 状 円形。長径105×短径100cm、深さ17cmを測る。

D-37号土坑 (Fig. 33)

位 置 X26・27、Y25・26グリッド。

形 状 円形。長径95×短径90cm、深さ5cmを測る。

D-38号土坑 (Fig. 33)

位 置 X27、Y25グリッド。

形 状 円形。長径75×短径71cm、深さ19cmを測る。

D-39号土坑 (Fig. 33)

位 置 X26・27、Y22グリッド。

形 状 楕円形。長径65×短径54cm、深さ29cmを測る。北隅に一段下がった円形の掘り込みがある。

D-40号土坑 (Fig. 33)

位 置 X38、Y25グリッド。

形 状 台形。長軸180×短軸80cm、深さ10cmを測る。断面形は中央に小さな窪みが認められる。

D-41号土坑 (Fig. 33)

位 置 X38、Y25・26グリッド。

形 状 円形。長径96×短径95cm、深さ32cmを測る。平坦な底面を形成している。

D-42号土坑 (Fig. 33)

位 置 X39、Y25グリッド。

形 状 円形。長径95×短径93cm、深さ24cm

を測る。底面は平坦。

D-43号土坑 (Fig. 33)

位 置 X38、Y26・27グリッド。

形 状 円形。長径117×短径112cm、深さ18cmを測る。

4 溝

W-1号溝 (Fig. 34)

位 置 X15~19、Y 1 ~ 5 ライン

形 状 北西から南東に向かい比高16cmを有する。全体的に幅70×深さ5cm前後である。断面形は緩やかに立ち上がる。

W-2号溝 (Fig. 34)

位 置 X17~18、Y 1 ~ 6 ライン

形 状 北から南に向かい比高4cmを有する。全面に幅90×深さ30cm前後である。断面形は逆台形であった。

遺 物 須恵杯(122)が出土。

W-3号溝 (Fig. 34)

位 置 X17~20、Y 1 ~ 5 ライン

形 状 北西から南東に向かい比高14cmを有する。全体に幅40×深さ10cm前後である。断面形は浅いため不明な部分が多い。

W-4号溝

位 置 X16~21、Y 4 ~ 7 ライン

形 状 西から東に42cmの比高を持ってのびる。全体的に幅90cm、深さは西側30cm、東側50cmである。断面形は逆台形であった。

W-5号溝 (Fig. 34)

位 置 X18~25、Y 6 ~ 12 ライン

形 状 北西端は深さ80cmの落ち込みから徐々に浅くなり、再び溝が北西から南東にのびる。比高40cm、平均的に幅170×深さ15cmである。断面形はなだらかに立ち上がる。

D-44号土坑 (Fig. 33)

位 置 X37、Y26グリッド。

形 状 柱穴状の円形小土坑。長径63×短径54cm、深さ37cmを測る。

W-6号溝 (Fig. 34、PL. 12)

位 置 X20~31、Y 5 ~ 16 ライン

形 状 始まりはいくつかの溝を集めており、それらも一括してW-6とした。北西から南東に向かい比高130cmを有する。北側で幅240×深さ20cm、南側で幅300×深さ60cmである。断面形は二段になり、壁は直線的に立ち上がる。

遺 物 土師杯(124)、カワラケ(123)の他、破片が多数出土。

W-7号溝 (Fig. 34、PL. 12)

位 置 X22~29、Y 9 ~ 16 ライン

形 状 北西から南東に向かい比高12cmを有する。北側で幅60×深さ15cm、南側で幅40×深さ10cmである。D-8と重複関係を持つ。断面形はなだらかに立ち上がる。

W-8号溝

位 置 X21~22、Y 7 ~ 8 ライン

形 状 北西から南東に45cmの比高を持ってのびる。北側で幅40cmを測り徐々に深くなり、南側で幅170×深さ44cm。断面形はU字形。

W-9号溝 (Fig. 34)

位 置 X24~25、Y11 ライン

形 状 西から東に28cmの比高を持ってのびる。西側で幅60×深さ17cm、東側で幅70×深さ22cmである。断面形は逆台形。D-8と重複関係を持つ。

W-10号溝 (Fig. 34、PL. 12)

位置 X 3 ~ 30、Y 1 ~ 17 ライン

形状 北西から南東に市道に沿ってのび、
比高 155cm 有する。平均的に幅 60 × 深さ 40cm
前後である。断面形は逆台形。

遺物 須恵楕(125)が出土。

W-11号溝

位置 X 29、Y 15 ~ 17 ライン

形状 北から南へなだらかにのびる。全体
に幅 50 × 深さ 10cm で、断面形は U 字形である。

W-12号溝

位置 X 24 ~ 27、Y 10 ~ 13 ライン

形状 北西から南東に向かい比高 40cm を有
する。全体的に幅 60 × 深さ 5cm を測る。断面
形はなだらかに立ち上がる。

W-13号溝 (PL. 12)

位置 X 3 ~ 8、Y 1 ~ 3 ライン

形状 北西から南東に 12cm の比高を持って
市道に沿ってのび、途中で市道によって切ら

れている。南半分は調査区域外であるため、

幅、深さは計測不可能。断面形は U 字形。

遺物 土師器片、須恵器片が多数出土。

W-14号溝

位置 X 12 ~ 13、Y 5 ライン

形状 東から西に 2cm の比高を持ってのび
る。平均に幅 30 × 深さ 10cm で断面形は U 字形。

W-15号溝 (Fig. 34、PL. 12)

位置 X 38 ~ 44、Y 32 ~ 36 ライン

形状 北東から南西に向かい比高 27cm を有
し S 字状にのびる。全体的に幅 50cm で、深さ
は東側で 80cm、西側で 30cm である。断面形は
逆台形を呈する。

W-16号溝

位置 X 14 ~ 15、Y 22 ~ 23 ライン

形状 北から南へ 15cm の比高を持ってのび
る。北側で幅 25 × 深さ 10cm、南側で幅 35 × 深
さ 20cm である。断面形は U 字形。覆土には As-C
の純層の堆積が見られた。

VII その他の遺構と遺物

1 落ち込み

落ち込みは合計 22 基検出され、O-1 から O-22 と名称をつけた。O-3 から O-22 の形成時
期は平安時代以前と考えられる。更に、O-9 は埋土に As-C の純層が見られることから、古墳時
代前期のものであると推定できる。O-4・7・11・18・22 は縄文時代の遺構を切っており、更
に平安時代の遺構に切られている。また、O-4~8・10~14・17・18・22 の覆土中には、縄文
式土器が多くみられた。このことからこれらの落ち込みは、縄文時代中期以降の時期からさほど
遠くない時期を想定できる。また、その成因は土層の堆積状態から風倒木痕と考えられる。

2 壓穴状遺構

A 区内で 1 基検出され T-1 と名称をつけた。X 13、Y 4・5 グリッドに位置し、形状は不整形、
規模は東西 215 × 南北 310cm、深さ 70cm を測る。覆土から平安時代の遺物が検出されたことや、

Hr-FPF 1、Hr-FAの面で確認されたことから、時期は平安時代と推定できる。

3 谷 (PL. 2)

B区南東隅に検出された。北西から南東に向かい比高3.6cmを有する。北側で幅6×深さ2.8m、南側で幅7.8×深さ1.3mを測る。埋土にAs-Bの純層が堆積していたことや、最下層にHr-FAやHr-FPF 1が見られたことから、6世紀以前にすでに形成されていたものと考えられる。また、覆土内からは平安時代の土師・須恵器片が検出された。地質的に砂層とローム層が分離する地点であるため、その亀裂に湧水が生じ、先端部分に伏流水が集まった痕跡があり、流水によって亀裂は大きくなり堆積が進んで行ったものと考えられる。

VII 成果と問題点

調査の結果を地区毎にみるとA区からは平安時代の遺構・遺物が比較的まとまって検出された。B区からは縄文時代の遺構・遺物と平安時代の遺構・遺物が多数検出され、本遺跡の主体をなす地区といえる。現在の水田が営まれていたC～E区は試掘調査の結果、遺構・遺物の検出はできなかったため、耕地としての利用は保水や導水の関係で平安時代以降になってからと考えられる。また、群馬町地内に所在するF区からは縄文式土器や平安時代の須恵器が出土したにもかかわらず、遺構等の検出はできなかった。この区域は遺物の発見から村北遺跡と名称が付され、今後これららの遺物の所属した遺構が周辺から検出されるものと期待される。

地質学的な見地からは、関東ローム層の形成がみられず、基盤に相馬ヶ原層状地形成層が主体をなしていた。その最上部にわずかに二次堆積の砂質ローム土が疊んで存在していた。この層の中に13,000年前の降下軽石であるAs-YP（浅間山起源）が点在していたため、本遺跡周辺の離水する時代は完新世に入つてからといえよう。検出された最古の縄文式土器が約8,500年前の押型文土器である点からも蓋然性の高いことといえる。また、As-SP（浅間山起源）と相前後して堆積をみせる陣場岩屑層も本遺跡では検出されず、本遺跡の北に隣接して流れる八幡川の以北に分布することを再度確認することができた。

完新世のテフラは4世紀中葉に降下したAs-C（浅間山起源）が純層の状態でA～E区のはば全域で確認され、6世紀初頭に降下したHr-FA、Hr-FPF 1（榛名山起源）も数枚の層理をなした良好な状態で同様に全域から認められた。また、C～E区、B区の一部では1,108年（天仁元年）に降下したAs-B（浅間山起源）の純層が認められた。

縄文時代

A・B区の調査で検出された遺構・遺物の中で、最古の遺物は縄文時代早期押型文土器である。続く早期の沈線文系土器である三戸・田戸上層式土器や条痕文系土器も少數発見された。また、

縄文時代前期の諸磯b・c・十三菩提式土器や、中期勝坂・阿玉台式土器も少量ながら発見された。遺跡の主体となる土器型式は、中期加曾利E4式土器と後期称名寺I式土器である。わずかに後期堀之内I・加曾利B・安行I式土器も検出されている。また遺構は、住居址4軒、竪穴状遺構1基、土坑9基、集石1基、焼土4ヶ所が検出されており、所産時期は中期後半の加曾利E2・4式土器と後期初頭の称名寺I式土器を伴っていることから、その時期が当たられる。縄文時代の遺物は土器のほか多数の石器、石製品などが出土した。

検出された住居址のうちJ-4号住居址は加曾利E2式土器の時期の所産であり、他の3軒の住居址からは中期末葉ないし後期初頭の土器が多数みつかっている。時期的にも短期間に利用されたものといえる。

特に縄文時代住居址の中でJ-1号住居址と呼んだものは、一軒の家が二度にわたって使用されたものであった。形は柄鏡形住居址と呼ばれるもので、円形に張り出しがつくものである。まず当初、柄鏡形住居址が造られ使用される。これが廃絶され埋まるか埋まり切ってからか、また意識的に廃絶されたか、自然的に埋没したかは判断材料に乏しいが、この住居址の上に柄鏡形の敷石状の配石が施された。人頭大の偏平な円礫を六角形に配列したもので半分が残されていた。円礫の出土状態は中心に向かって傾斜を持つものが多く、礫のレベルより下に地床炉と考えられるものが確認されたことから、想像をたくましくすると当時の家が埋まる過程で配石がなされたことも考えられる。また礫の大部分は加熱された状態であり、加熱の場所や行為そのものも詳細に解明されなければならないが、後期の信仰的色彩のなかに包括される行為といえる。円礫の多くは容易に近くから入手できる輝石安山岩の使用よりも、利根川河床から搬入された石英閃緑岩などの奥利根地方産出の礫が主体となっていた。このようにやや遠方の石材を選択して用いるという特徴は、単に技術的な側面だけでなく文化交流を考える上で、今後積極的に解明されなければならない。以上のように多くの知見がこの住居址からは得られたが、県内をはじめとしてこういった重複事例を見聞しないため、今後資料の追加を待ってこれらの事実を究明していくなければならない。

縄文式土器のなかで早期の押型文土器や沈線文土器の検出は、本遺跡周辺の初源事例を週らせたものと評価できるが、今後周辺遺跡の調査事例が増加するに従い、さらに詳細を極めることといえる。中期終末の土器は沈線文様区画のものと微隆起文様区画のものがあり、それぞれ縄文や条線が充填される2者に大別されるが、後期になるに従い沈線区画が優勢になり、微隆起区画は劣勢となる。この中でC字や8字状の貼付を有し、微隆起帶内の上下に円形刺突を持つグループや、文様の単位区画に刻み隆帯をもつグループの存在が指摘できる。これらは後期初頭の北関東西北部的特徴といえる土器で今後、称名寺式土器の在り方から言及すべきものといえる。

遺物のなかで軽石で作られた石製品が3点ほど住居址、土坑などから出土した。従来、浮子などとしてとらえられていたが、調整加工からみて浮子や砥石とは考えられない。想像を逞しくするならば素文の岩版と考えられる。市内端気遺跡群などや赤城村三原田遺跡などでもこの時期の

遺物として散見できるものである。今後、用途・機能を解明するとともに、岩版の発生や変遷と併せて究明されなければならない。

また、緑色片岩が131点出土している。時期的にも中期末葉から後期初頭の時期に比定できる。石棒・石皿・砥石などに加工されたものも散見する多くは疊の状態であり、加工痕跡もみられない。これらの石材の原産地は多野山地や秩父地方に求められる。当然、彼の地から本遺跡に持ち運ばれたものと断定でき、中期末葉から祭祀的な遺物が増加するなかでの出来事であるため、用途をめぐって解明しなければならない課題といえる。

D-6号土坑の底面から1点であるが炭化したトチと思われる種子の出土がみられた。このことは集落に近接した円形の土坑の多くが、貯蔵穴の機能を果たしたものと考えられる。

平安時代

平安時代の遺構は住居址が25軒、掘立柱建物址1棟、土坑50基、溝16条が発見された。遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器が多数出土し、綠釉陶器・青銅製品・鉄釘・鐵鎌・土鍤・砥石・瓦がわずかにみられた。年代的には9世紀後半から10世紀前半にかけてのものが主体を占めている。

このうち特筆すべきものとしてH-5号住居址と呼んだものは、棚が竈の両脇につくものであった。市内では青柳寄居遺跡などでみつかっているが両袖になるものはない。また、H-3・22・23・24号住居址の4軒から、6基の底面に薄く粘土を貼った床下土坑が検出された。市内西堀遺跡に類例があるが、西堀遺跡例は鬼高期であることから、こういった施工方法は6世紀から10世紀と時代的にも長く存続したことがいえよう。今後、床下土坑の解明にあたって看過できない事例となろう。

また、多くの住居址の竈には構築材料として砂質凝灰岩の切石がみられた。現時点で染谷川沿岸に切り出し場がみつかっており、そこから供給されたことが考えられる。

D-8号土坑からは棺を置く台石や棺桶をとめた多くの鉄釘・供献の灰釉陶器と須恵器の2点がみつかった。焼き物から所産時期は10世紀の前半が考えられ、土坑の大きさから土葬で伸展葬と思われ葬制を研究する上で重要な事例となった。

W-10号溝は現区画の道路と平行して確認された。出土品は絶て平安時代に帰属することからこの溝の時期も平安時代とされる。このことから現区画の道路の付設の時期も溝の存在からかなり古くまでさかのぼるものといえる。

参考文献

- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1984 「端氷遺跡群Ⅱ」
- 前橋教育委員会 1987 「西堀遺跡」
- 群馬県 1988 「群馬県史 資料編1 原始古代1 旧石器・縄文」 群馬県史編さん室
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1984 「青柳寄居遺跡」
- 群馬県教育委員会・財团法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987 「下東西遺跡」
- 新井房夫 1971 「前橋市史」 第1巻「自然」

付編 熊野谷遺跡の地形と地質

早田 勉 (パリノ・サーヴェイ株式会社)

1. 地形・地質の概要

熊野谷遺跡は、相馬ヶ原扇状地の扇端部に位置している。遺跡付近の平らな地形を造っている地層は、扇状地性の砂礫層である。遺跡内の深掘りトレンチでは、この地層の一部を観察することができた。扇状地性堆積物は、厚さ50cm以上で、砂礫や砂の互層からなっている(図1)。堆積物中の礫の最大径は数cmである。またこの堆積物中には、風化の進んだ黄色軽石(最大粒径13mm)や褐色スコリア(最大径17mm)も認められる。これらの水成堆積物の上位には、厚さ83cmの黄色の砂質土壤が堆積している。この土壤の中には、層理の発達した流水の堆積物もレンズ状に認められる。

褐色の砂質土壤の上位には、黒色火山灰土(黒ボク土)の堆積が認められる。筆者の観察した地点では、少なくとも黒ボク土中に2枚の示標テフラが認められた。下位のテフラは、厚さ8cmの黄灰色の降下軽石層で、軽石の最大径は21mmである。本テフラは、層相から4世紀中ごろに浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 新井, 1979)に対比される。上位のテフラは、多くの層からなるテフラで、層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名-二ッ岳火山灰(FA, 新井, 1979, 坂口, 1986)に対比される。

2. 砂礫層の堆積年代

一般に相馬ヶ原扇状地の扇顶部から扇央部にかけての地域では、扇状地を構成する砂礫層の直上付近に、約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間-板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田ほか, 1984)が認められることが多い(早田, 未公表資料)。しかし熊野谷遺跡においては、As-YPの堆積は認めることはできなかった。流水などにより、砂礫層を覆っていたAs-YPが侵食されてしまった可能性がある。

さて総社付近の利根川右岸では、利根川の側方侵食により前橋台地とその周辺の地形を構成する地層の露出が良好で詳しく観察することができる。総社桜が丘では、As-YPを覆う黒色腐植質土壤の上位、As-Cの下位に厚さ約5mの層理の発達した砂礫層の堆積が認められる。この砂礫層は、総社町三丁目付近でも厚さ3m以上で分布しており、総社の市街地がのる台地を構成していると考えられる。おそらく堆積時期は、層位からみて完新世の前半から中ごろにかけての時期で

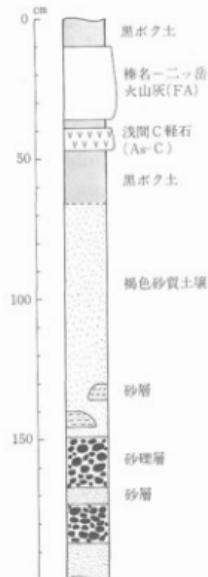


図1 熊野谷遺跡の総合地質柱状図

あろう。この砂礫の地形発達史上的性格については不明な点も多いが、熊野谷遺跡付近の台地を構成する堆積物の一部がこの砂礫層に対比される可能性も考えられる。周辺の地形学的な調査を行った上で、詳細な報告が行われることが望ましい。

3. 黒ボク土中のテフラ

熊野谷遺跡で認められるFAは下位よりKu1からKu13のユニットに区分できる(図2)。最近、早田(1988, 印刷中)はFAの噴火に伴う火山災害のプロセスを明らかにする観点から、FAを株名-渋川テフラ層(Hr-S)とよび、メンバー単位の区分を行っている。ここでは将来行われると考えられるユニット(メンバーより細かい区分)単位の区分を行った上で、メンバーに対比することを試みる。

Ku1は比較的大規模な水蒸気爆発に由来する降下火山灰(S-1)に、Ku2は小規模な水蒸気爆発に由来する降下火山灰(S-4)に、Ku3-4は渋川市中筋遺跡の中筋ムラに決定的なダメージを与えた火碎流堆積物(S-5)にそれぞれ対比される可能性が大きい。またKu5は降下火山灰(S-6)に、Ku6は降下火山灰(S-7)に、Ku7はごく小規模な水蒸気爆発に由来する降下火山灰(S-9)に、Ku8-10は火碎流堆積物(S-10)に、そしてKu11は降下火山灰(S-11)にそれぞれ対比されると考えられる。

さてKu12は、非常に淘汰の良い(粒径の良く揃った)粗い砂層である。またその上位のKu13は、粗粒の白色軽石(最大径130mm)のブロックを含む固結した不淘汰な堆積物である。軽石は角のとれたものが多い。これらの堆積物の連続から、一連の堆積物は、泥流堆積物の可能性が大きいと考えられる。この泥流は下位の堆積物の2次堆積物である可能性も大きいが、株名山東麓の滝沢川沿いに分布する桃灰色の火碎流堆積物(S-12)が流走中に泥流に変化し、熊野谷遺跡付近にまで及んだ可能性も考えられる。熊野谷遺跡の調査では、FAや泥流で埋没した遺構は発見されていないが、周辺に被災遺構が存在している可能性も充分考えられる。

文献

- 新井信夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀層Ⅳ、群馬大学紀要、自然科学編、10、1-79。
 新井信夫(1979)関東地方北西部の第四紀層Ⅳ、群馬大学紀要、自然科学編、10、1-79。
 史考古学ジャーナル、157、41-52。
 史田 洋・新井信夫・小山耕夫・邊島邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学
 -考古学研究と関連するテフラのカタログ-、古文化財編集委員会編
 「古文化に関する保存科学と人文学」、自然科学研究社、985-928。
 版口 一(1986)株名山-ヒガシ原ノア・PP層下の土師器と須恵器、「荒砥北原遺跡」、
 群馬県教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団、103-119。
 早田 勉(1988)中筋遺跡のテフラと火山灰災害、
 中筋遺跡第2次発掘調査概要報告書、35-41。

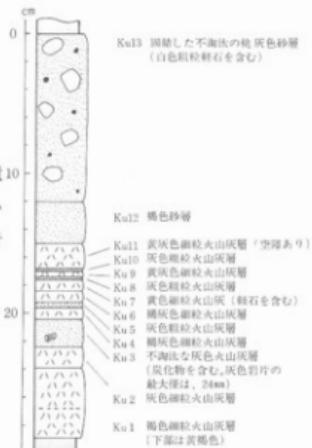


図2 熊野谷遺跡におけるFAの層序

Tab. 5 繩文式土器観察表

番号	出土位置	①物 上 ②機 成 ③色 調 ④残 存	文 様 要 素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備 考
1	J-1	①中粒良好3②にい櫻③口縁部	微隆起・幾文8字状貼付・幾文LR	J-1号住居址の土器は第7群上器・加曾利E4式土器と第8群土器・称名寺1式土器に分かれれる。	称名寺I
2	J-1	①細粒良好3明黄褐3口縁部	微隆起・幾文RL	加曾利E4式土器は文様から第1類・沈綫区画+加曾利E4	
3	J-1	①細粒良好3黄褐色3口縁部	刺突・微隆起・幾文RL	加曾利E4式土器は文様から第1類・沈綫区画+加曾利E4	
4	J-1	①粗粒(石英)良好3明黄褐3口縁部	沈鋸・円形刺突・幾文LR	幾文(2・6・10・13)と第2類・微隆起区画+幾文(2・6・10・13)と第3類・高さ(11)のグループに	加曾利E4
5	J-1	①中粒(石英)良好3②にい櫻③把手	微隆起・幾文LR	細別できる。3の刺みは称名寺式の刺突に比べると	加曾利E4
6	J-1	①細粒(白色粘土)②細良3櫻3口縁部	微隆起・周文LR	やや粗粒で区画がなされてない。7の土器は幾文	加曾利E4
7	J-1	①中粒(白色粘土)②良好3櫻3口縁部	微隆起・櫛・幾文LR	が開閉において縫に1単位だけ施文されるもので類似	加曾利E4
8	J-1	①細粒(白色粘土)にい櫻3把手	無文部	例は開閉北の地域には見当たらず、近畿・東海地方	加曾利E4
9	J-1	①粗粒(石英)良好3明黄褐3口縁部	微隆起・幾文RL	の土器に影響を受けたものと考えられる。13の文様	加曾利E4
10	J-1	①細粒良好3櫻3口縁部	沈鋸・幾文RL	は「上面」の造構に理縫として使用され、口径38.2cm、	加曾利E4
11	J-1	①粗粒(白色粘土)良好3櫻3口縁部	条線(6~7本歯)	現存高37.0cmの大型の埋設である。文様は口縁部	加曾利E4
12	J-1	①粗粒(白色粘土)良好3櫻3口縁部	沈鋸・彌術刺目・幾文RL	は口縁部に称名寺I	
13	J-1	①粗粒(白色粘土)良好3櫻3口縁部	沈鋸・幾文LR	1条線を巡らす、刺部の刺線は4単位で構出される。	加曾利E4
14	J-1	①細粒(白色粘土)良好3櫻3口縁部	沈鋸・幾文LR	る。21は「下面」の住居址の伊体土器であり、隕石	称名寺I
15	J-1	①細粒良好3櫻3口縁部	沈鋸・幾文LR	起文の単位は不明である。底径14.9cm、現存高17.1cm。	称名寺I
16	J-1	①粗粒(白色粘土)良好3明黄褐3口縁部	沈鋸・幾文LR	称名寺I	
17	J-1	①細粒(黒雲母)良好3櫻3口縁部	沈鋸・幾文LR	称名寺I式土器は文様から第1類・円形刺突(1・4・20)、第2類・刺目・彌術(12・172)と第3類・	称名寺I
18	J-1	①細粒良好3櫻3口縁部	沈鋸・幾文LR	刺突(1・4・20)と第4類・刺目(12・172)と第5類・	称名寺I
19	J-1	①粗粒(白色粘土)良好3櫻3口縁部	沈鋸・幾文RL	沈鋸・幾文(14~19・23)、第4・5類・条線に組合せ	称名寺I
20	J-1	①粗粒良好3②にい櫻3口縁部	微隆起・沈鋸・幾文LR・刺突	される。第1瓶や第2瓶には8字状やC字状貼付がみられる。1・20は好形。2014 4 単位の大波状口縁をなし	加曾利E4
21	J-1	①中粒良好3櫻3底部	無文	推定口径36.7cm、現存高37.0cm、垂下する小さな	加曾利E4
22	J-1	①粗粒良好3櫻3底部	微隆起	字の1単位の沈鋸区画にも円形刺突が施文。市内小	
23	J-1	①粗粒(白色粘土)良好3口縁部	沈鋸・幾文LR	神明道跡群の埋設土器に極似。21は「上面」の造構	加曾利E4
24	J-3	①粗粒(白色粘土)良好3明黄褐3口縫部	微隆起・幾文RL	の石窓中の埋設土器。無文部であるが底径0.8cm、	加曾利E4
25	J-3	①粗粒(黒雲母)良好3黃褐3口縫部	微隆起・幾文RL	現存高3.0cm。23は4単位の大波状口縫で口径36.5cm、現存高36.0cm。	加曾利E4
26	J-3	①粗粒(黒雲母)良好3にい櫻3口縫部	沈鋸・幾文LR	称名寺I	
27	J-3	①粗粒良好3にい櫻3口縫部	沈鋸・幾文LR	J-3号住居址は第7群・加曾利E4式土器を主	加曾利E4
28	J-3	①中粒(白色粘土)良好3櫻3口縫部	沈鋸・幾文LR	体とする。第1類・沈鋸区画+幾文(26・27・28・42)、第2類・微隆起区画+幾文(34・25・32・33)、	加曾利E4
29	J-3	①粗粒(白色粘土)良好3明黄褐3口縫部	微隆起・櫛・刺突	第3類・彌術(38・39)に大きく分けられる。29・30の刺突は称名寺式のものと異なり区画を用いていない。33は縫帶上に幾文が施文される。38は台面、	加曾利E4
30	J-3	①粗粒(白色粘土)良好3明黄褐3櫻3突起	微隆起・刺突	38・39は幾文を持つ両耳壺である。38は沈鋸区画、	加曾利E4
31	J-3	①粗粒(白色粘土)良好3黄褐3口縫部	沈鋸(縫狀)	39は埋設して文様は微隆起区画の幾文が施文される。口徑21.2cm、高さ33.4cm、底膨張後穿孔孔。	加曾利E4
32	J-3	①粗粒(白色粘土)良好3にい櫻3口縫部	微隆起・幾文LR	42も埋設で、9單位構成、口徑23.0cm、高さ33.0cm、底径6.5cm。31は沈鋸で縫状形の構成をとる。	加曾利E4
33	J-3	①中粒(白色粘土)良好3浅黄3口縫部	縫帶・幾文LR	称名寺I式土器は30・35・36・40・41である。35はC字状貼付と円形刺突がみられ、35は刺目・彌術で、	加曾利E4
34	J-3	①粗粒(石英)良好3明黄褐3把手	縫帶・幾文RL	36・40・41は沈鋸+幾文であるが、40は加曾利E4式に近似か。	加曾利E4
35	J-3	①中粒(白色粘土)良好3黄褐3口縫部	沈鋸・幾文LR・彌術刺目	J-4号住居址の43は伊体土器で口縫部と底部を欠損する。彌術刺目22.5cm、現存高11.2cmで縫帶による文様は4単位構成。44も口縫部と底部を大きく欠損。彌術刺目最大径29.0cm、現存高27.5cm、3本1組単位の沈鋸で文様が描出される。東北地方の大波状口縫部と関係を有する。	加曾利E4
36	J-3	①中粒(白色粘土)良好3櫻3口縫部	沈鋸・幾文LR		加曾利E4
37	J-3	①中粒(白色粘土)良好3櫻3口縫部	無文部		加曾利E4
38	J-3	①粗粒(黑色粘土)良好3櫻3口縫部	沈鋸・幾文(6本歯)		加曾利E4
39	J-3	①粗粒良好3櫻3口縫部	微隆起・彌術(7本歯)		加曾利E4
40	J-3	①粗粒(石英)良好3浅黄3櫻3口縫部	沈鋸・幾文LR		加曾利E4
41	J-3	①粗粒(良石)良好3明黄褐3口縫部	沈鋸・幾文LR		加曾利E4
42	J-3	①粗粒(黑色粘土)良好3櫻3口縫部	沈鋸・幾文RL		加曾利E4
43	J-4	①粗粒良好3黃3口縫部	縫帶・幾文RL		加曾利E2
44	J-4	①粗粒(黑色粘土)良好3口縫部	沈鋸・幾文RL		加曾利E2
45	J-5	①粗粒良好3にい櫻3土製円盤	無文		
46	J-5	①粗粒(白色粘土)良好3櫻3にい櫻3口縫部	沈鋸・幾文RL		
47	J-5	①粗粒(白色粘土)良好3櫻3口縫部	沈鋸・幾文LR		
48	J-5	①粗粒(白色粘土)良好3にい櫻3口縫部	微隆起・幾文RL		
49	J-5	①粗粒(黒雲母)良好3櫻3口縫部	沈鋸・幾文LR		
50	J-5	①中粒(白色粘土)良好3黃3口縫部	無文部		

番号	出土位置	①胎 ②土 ③陶 成 ④色 ⑤調 理 程 序 存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備考
51	J-5	①粗粒(白色粘土)②良好③黄褐色④口縁部	微隆起・沈縫・繩文RL	J-5号住居址は加賀利E4式土器が主体を占める。第1類・沈縫区画+繩文(46・47・52・53)、第2類・微隆起区画+繩文(48・49・51・55)、第3類・条縫(54)に大きく分けられる。47や51は底頂部がつままれ厚壁する。51は微隆起と沈縫を併用して文様区画をなす。54は沈縫区画の集団であり、接合部に刺みを入れる工夫がなされる。48・49・53の繩文に引状構成がみられる。50は無文部である。	加賀利E4
52	J-5	①細粒(白色粘土)②良好③縫④口縁部	沈縫・繩文RL	加賀利E4	
53	J-5	①粗粒(白色粘土)②良好③縫④口縁部	沈縫・繩文RL	加賀利E4	
54	J-5	①細粒②良好③縫④口縁部	沈縫・条縫(5本縫)	加賀利E4	
55	J-5	①細粒(白色粘土)②良好③縫④口縁部	微隆起・繩文RL	称名寺1	
56	JT-1	①中粒(白色粘土)②良好③縫④口縁部	沈縫・繩文RL	加賀利E4	
57	JT-1	①中粒(白色粘土)②良好③縫④口縁部	陳帶・繩文RL	加賀利E3	
58	JT-1	①中粒(白色粘土)②良好③縫④口縁部	微隆起	加賀利E4	
59	JT-1	①粗粒(白色粘土)②良好好疎によい縫④口縁部	微隆起・繩文L	加賀利E4	
60	JT-1	①粗粒(白色粘土)②良好好疎によい縫④口縁部	微隆起・沈縫・繩文RL	加賀利E4	
61	JT-1	①中粒(白色粘土)②良好好疎によい縫④口縫部	沈縫・繩文LR	称名寺1	
62	JT-1	①細粒(白色粘土)②良好③明黄褐④口縫部	条縫部	加賀利E4	
63	JT-1	①細粒(白色粘土)②良好③明黄褐④把手	微隆起・繩文LR	加賀利E4	
64	JT-1	①中粒(白色粘土)②良好③明黄褐④口縫部	沈縫・沈縫・繩文LR	加賀利E4	
65	JT-1	①中粒(白色粘土)②良好③明黄褐④口縫部	沈縫・繩文LR	加賀利E4	
66	JD-1	①細粒②良好③縫④1/4	微隆起・沈縫・繩文LR	称名寺1 式土器は61・172である。刺み巻帯の172は1-1と後縫開闊を持つ土器である。	加賀利E4
67	JD-3	①粗粒(白色粘土)②良好好疎によい縫黄褐色剖面	沈縫・繩文L	加賀利E4	
68	JD-4	①粗粒(白色粘土)②良好好疎黄褐色剖面	微隆起・繩文RL	66から77は土坑出土の土器である。66はJD-1号土坑、微隆起と沈縫区画で文様が形成される深鉢である。繩文は单脚斜行繩文LJと無縫繩文LJが施文される。口径23.0cm、残高4.8cm、椎状把手は1単位と思われる。71はJD-1号土坑、8字状點付と垂下する脚み巻帯をもつ土器である。帶字不明。	加賀利E4
69	JD-4	①粗粒(白土)②良好好疎口縁部	沈縫・繩文LR	76から77は土坑出土の土器である。66はJD-1号土坑、微隆起と沈縫区画で文様が形成される深鉢である。繩文は单脚斜行繩文LJと無縫繩文LJが施文される。口径23.0cm、残高4.8cm、椎状把手は1単位と思われる。71はJD-1号土坑、8字状點付と垂下する脚み巻帯をもつ土器である。帶字不明。	加賀利E4
70	JD-5	①中粒(栗茎目)②良好③黄褐色④口縫部	微隆起・繩文RL	加賀利E4	
71	JD-5	①細粒(栗茎目)②良好好疎によい黄褐色把手	沈縫・萬葉LJ-8字状點付・巻帯切込み	称名寺1	
72	JD-6	①細粒(栗茎目)②良好好疎口底部	沈縫・繩文	76は1号土坑から出土した箇内之1式土器である。内面にも沈縫と縫部に細かい刺みが付される。	加賀利E4
73	JD-7	①細粒(栗茎目)③縫④口縫部	沈縫・繩文LR	79-87は1号土器である。撲型土器をまとめた。和洋合流としての妙は多量に含有するが、凹凸と旋上、他成で、焼きの良さない青黄褐色の横円型文と焼きの良い赤褐色の山形、格子目押型文の2グループに分ける。79-87は格子目押型文。80-82は横円型文であり、同一個体片で織縫が僅かに混入される感がある。口径17.7cm、原体の長さは28mmで口縫部は横縫施文。器底の縫部は平らに加工される。83-87は山形押型文の同一個体片であり横縫帶状に糸目がくずれた山形が施文される。	称名寺1
74	JD-7	①細粒②良好③縫④口縫部	微隆起・繩文LR	88-96は2号土器である。沈縫土器をまとめた。88-97は同一個体片と思われる糸目が沈縫で文様が構成される。88-94は2個体に分離される可能性もあるが土粒・色調から同一個体片と考えられる。2本同時沈縫は基本としながら貝殻撒線を用いた区画内を先兆施文している。器底内部には細かな刻みが連続して施されるという特徴を有する。92と93は脚部文様である。	加賀利E4
75	JD-8	①細粒(白色粘土)②良好③灰黄④口縫部	微隆起・沈縫・繩文	98-100は第4群土器で、貝殻条痕文土器をまとめた。3片とも同一個体片であろう。縫部は少量で焼きも良好である。比較的古手の系叢文土器に遺物分布領域が共通することから第2群土器である田戸上層式土器に併存する可能性がある。	加賀利E4
76	JD-8	①細粒(黒雲母)②良好③によい縫④口縫部	沈縫・繩文LR	加賀利E4	
77	JD-9	①細粒(白色粘土)②良好好疎明黄褐色口縫部	沈縫・繩文LR	加賀利E4	
78	1号土坑	①細粒(白土)③によい黄褐色④口縫部	沈縫・繩文LJ-8字状點付	縫之内1	
79	JT-1	①細粒②良好③明黄褐④口縫部	格子目押型文	押型文土器	
80	X40Y30	①粗粒(白色粘土)②良好好疎口縫部	格円押型文	押型文土器	
81	X40Y30	①粗粒(縫)②不齊によい縫④口縫部	格円押型文	押型文土器	
82	J-1	①粗粒(縫)②不良③黄褐色口縫部	格円押型文	押型文土器	
83	X34Y27	①細粒(縫)②良好好疎明黄褐色口縫部	山形押型文	押型文土器	
84	X34Y28	①細粒②良好③明赤褐④口縫部	山形押型文	押型文土器	
85	X34Y26	①細粒②良好③縫④口縫部	山形押型文	押型文土器	
86	X34Y29	①細粒(長石)②良好③によい縫④口縫部	山形押型文	押型文土器	
87	X34Y27	①細粒(黒雲母)②良好③によい縫④口縫部	山形押型文	押型文土器	
88	X35Y28	①粗粒(白色粘土)②良好好疎明黄褐色口縫部	沈縫・貝殻撒線	田戸上層	
89	X32Y29	①細粒②良好③明黄④口縫部	沈縫・貝殻撒線	田戸上層	
90	X32Y28	①細粒(縫)②不齊によい縫④口縫部	沈縫・貝殻撒線	田戸上層	
91	X33Y29	①細粒②良好③によい縫④口縫部	沈縫・貝殻撒線	田戸上層	
92	X33Y28	①粗粒(白色粘土)②良好③によい黄褐色口縫部	沈縫	田戸上層	
93	X34Y27	①細粒(白色粘土)②良好③明黄褐色口縫部	沈縫	田戸上層	
94	X33Y28	①細粒②良好③によい黄褐色口縫部	沈縫・貝殻撒線	田戸上層	
95	X32Y28	①中粒(長石)②良好③によい黄褐色口縫部	格子目沈縫	三戸	
96	X33Y28	①粗粒②良好好疎口縫部	格子目沈縫	三戸	
97	X33Y28	①中粒(長石)②良好③灰白口縫部	格子目沈縫	三戸	
98	X33Y29	①粗粒(縫)②良好好疎黄褐色口縫部	内外貝殻条縫	条痕文土器	
99	X33Y29	①粗粒(縫)②良好③縫④口縫部	内外貝殻条縫	条痕文土器	
100	X32Y28	①粗粒(縫)②良好好疎口縫部	内外貝殻条縫	条痕文土器	

番号	出土位置	①地 ②標 ③成 ④色 ⑤調 ⑥模 ⑦存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備考
101	X38Y26	①粗粒(白色鉱物)②良好③明赤褐色④口縁部	浮線文・縞文LR	101～112までは第5群土器である。竹管文土器をまとめた。101は地文に縞文を有し浮線文が貼付される。102と103は集合沈縫と耳たぶ状の貼付がなされる。104～106・107は有跡浮線文、108は有跡沈縫文が施文される。108～110は集合沈縫が施文される。	諸職b 諸職c 諸職c
102	JT-1他	①粗粒②良好③明赤褐色④口縁部	集合沈縫・ギタン状貼付	104・105	十三番提
103	J-1	①粗粒②良好③明黄褐色④口縁部	集合沈縫・ギタン状貼付	106	十三番提
104	X40Y30	①中粒(白色鉱物)②良好③橙④口縁部	有跡浮線文・ギタン状貼付	107	十三番提
105	X38Y27	①粗粒(長石)②良好③明赤褐色④口縁部	有跡沈縫	108	十三番提
106	X39Y30	①粗粒②良好③明赤褐色④口縁部	有跡浮線文	109	十三番提
107	X40Y30	①粗粒②良好③橙④脚部	有跡浮線文	110	十三番提
108	J-4	①粗粒(白色鉱物)②良好③灰黃褐色④口縁部	集合沈縫	111	十三番提
109	J-1	①中粒(黒雲母)②不良③橙④口縁部	集合沈縫	112	十三番提
110	谷	①中粒(白色鉱物)②良好③灰褐色④脚部	集合沈縫	113	十三番提
111	X35Y25	①粗粒(長石)②良好③赤④口縁部	沈縫・三角刺・縞文LR	114	十三番提
112	X41Y31	①細粒(黒雲母)②良好③赤④口縁部	縞文LR	113	十三番提
113	X37Y27	①粗粒(白色鉱物)②良好③灰褐色④脚部	縞帶・刺み	114	十三番提
114	J-3	①粗粒(金星石)②良好③にい 黄褐色④脚部	有跡沈縫・刺み	115	十三番提
115	J-3	①粗粒(黒雲母)②極良③橙④脚部	沈縫・刺突・縞文RL	116	十三番提
116	X37Y26	①粗粒(黒雲母)②良好③にい 黄褐色④脚部	沈縫・縞文RL	117	十三番提
117	X40Y27	①粗粒(白色鉱物)②極良③橙④脚部	沈縫・刺突	118	十三番提
118	X38Y26	①粗粒(白色鉱物)②不良③橙④口縁部	沈縫	119	十三番提
119	X38Y28	①粗粒②良好③にい 橙④口縁部	沈縫・縞文LR	120	十三番提
120	X37Y26	①粗粒②良好③赤④土製円盤	沈縫・縞文RL	121	十三番提
121	X33Y28	①中粒(白色鉱物)②良好③赤④脚部	沈縫・縞文RL	122	十三番提
122	X30Y25	①粗粒(白色鉱物)②極良③橙④口縁部	微隆起	123	十三番提
123	J-3	①粗粒(黒雲母)②良好③橙④口縁部	沈縫・縞文・刺突	124	十三番提
124	X41Y28	①粗粒(白色鉱物)②良好③橙④口縁部	微隆起・縞文RL	125	十三番提
125	X32Y26	①粗粒(長石)②不良③赤④口縁部	微隆起・縞文多角LR	126	十三番提
126	X32Y27	①粗粒(長石)②不良③赤④口縁部	微隆起・縞文RL	127	十三番提
127	X37Y27	①粗粒②良好③赤④口縁部	微隆起・縞文R	128	十三番提
128	X39Y26	①中粒(白色鉱物)②良好③赤④口縁部	微隆起・縞文LR	129	十三番提
129	X38Y29	①粗粒(黒雲母)②良好③橙④脚部	微隆起・縞文RL	130	十三番提
130	X37Y28	①中粒(黒雲母)②良好③にい 植生④脚部	微隆起・縞文RL	131	十三番提
131	X38Y25	①粗粒(白色鉱物)②良好③灰褐色④口縁部	微隆起・縞文I	132	十三番提
132	X38Y27	①中粒(黒雲母)②良好③橙④口縁部	微隆起・縞文	133	十三番提
133	X39Y28	①粗粒(長石)②良好③赤④脚部	微隆起・縞文RL	134	十三番提
134	X38Y31	①細粒(白色鉱物)②良好③にい 植生④脚部	沈縫・縞文LR	135	十三番提
135	X37Y28	①中粒(白色鉱物)②良好③明赤褐色④口縁部	沈縫・縞文RL	136	十三番提
136	X38Y29	①粗粒(白色鉱物)②良好③にい 黄褐色④口縁部	沈縫・縞文	137	十三番提
137	X38Y26	①粗粒(黒雲母)②良好③赤④脚部	沈縫・縞文	138	十三番提
138	X38Y25	①中粒(黒雲母)②良好③明赤褐色④脚部	微隆起・縗	139	十三番提
139	X37Y27	①細粒②極良③浅黄褐色④脚部	沈縫・縞文RL	140	十三番提
140	JT-1	①粗粒(白色鉱物)②良好③明赤褐色④口縁部	沈縫・縞文	141	十三番提
141	X38Y29	①粗粒(長石)②良好③にい 黄褐色④口縁部	微隆起・縞文RL	142	十三番提
142	X38Y27	①中粒(白色鉱物)②良好③赤④脚部	微隆起・沈縫・段多条縞文RL	143	十三番提
143	X37Y25	①粗粒(黒雲母)②良好③にい 植生④脚部	微隆起・沈縫・縞文RL	144	十三番提
144	X38Y27	①粗粒(白色鉱物)②良好③赤④口縁部	微隆起・縗・縞・沈縫・縞文LR	145	十三番提
145	X34Y26他	①粗粒(石英)②良好③深青④口縁部	微隆起・縞文RL	146	十三番提
146	X38Y27	①粗粒(黒雲母)②良好③明黄褐色④口縁部	沈縫・縞文LR・陳密刺み	147	十三番提
147	X38Y29	①粗粒(黒雲母)②良好③にい 植生④口縁部	沈縫・縞文RL	148	十三番提
148	X39Y25	①粗粒(白色鉱物)②良好③赤④口縁部	沈縫・縞文	149	十三番提
149	谷	①粗粒(白色鉱物)②良好③にい 植生④脚部	沈縫・縞文RL	150	十三番提
150	X39Y28	①中粒(黒雲母)②良好③赤④脚部	沈縫・縞文RL		

番号	出土位置	①胎 土 ②燒 成 ③色 調 ④残 存	文 種 要 素	文様構成・文様施文・器形の特徴	備 考
151	X30Y34	①粗粒(黒墨)②良好③にい黄(金)口縫部	沈綸・闊文LR		称名寺 I
152	X30Y29他	①中粒(白色鉱物)②良好③灰黄④口縫部	沈綸・闊文LR	146から176は第8群土器の称名寺I式土器である。	称名寺 I
153	X30Y29	①粗粒(白色鉱物)②良好③明黄(金)口縫部	沈綸・闊文LR	第1類、円形刺突(159・164・165・174・176)、第2類・刺み隆起(146・160・161・166～168・171・173)、第3類(147～155・157・158・170)、第4類・条縞(160～162)。第1類や第2類にはC字状貼付	称名寺 I
154	谷	①細粒(黒墨)②良好③にい白(金)口縫部	沈綸・闊文LR	や8字状貼付が付される。163には8字状貼付	称名寺 I
155	X30Y17他	①粗粒(白墨)②良好③灰黄④口縫部	沈綸・闊文LR	にはC字状貼付が付されるが、肩部の文様構成が不明である。第4類は文様模様や文様要素から第1類から第3類と同時性を考えて置きたい。	称名寺 I
156	谷	①粗粒(石英)②良好③にい白(金)口縫部	沈綸		称名寺 I
157	X30Y29	①粗粒(白色鉱物)②良好③明黄④口縫部	沈綸・闊文LR		称名寺 I
158	X30Y24	①粗粒(黒墨)②良好③リーパー黃(金)口縫部	沈綸・闊文		称名寺 I
159	X30Y27	①粗粒(黒墨)②良好③にい白(金)口縫部	沈綸・闊文RL・刺突		称名寺 I
160	X30Y29	①中粒(黒墨)②良好③白(金)刺突部	沈綸・条縞(7本面)・隆起刺突		称名寺 I
161	X30Y24	①細粒(石英)②良好③にい白(金)口縫部	沈綸・条縞(7本面)・隆起刺突		称名寺 I
162	X30Y17他	①中粒(白色鉱物)②良好③白(金)口縫部	沈綸・条縞(7本面)		称名寺 I
163	X40Y24	①粗粒(石英)②良好③橙(金)突起	微隆起・闊文LR・沈綸-C字状貼付		称名寺 I
164	X30Y23	①粗粒(黒墨)②良好③灰黄④突起	微隆起・沈綸・闊文・刺突		称名寺 I
165	谷	①中粒(石英)②良好③白(金)口縫部	微隆起・刺突・闊文LR		称名寺 I
166	X30Y27	①粗粒(白色鉱物)②良好③黄(金)把手	沈綸・闊文LR・帶刺突	156は第9群土器である蹴之内式土器。文様模様から称名寺I式直後の位置付けが考えられる。	称名寺 I
167	X27Y24	①中粒(白色鉱物)②良好③明黄(金)口縫部	沈綸・闊文LR・条縞刺突		称名寺 I
168	X30Y23	①中粒(白色鉱物)②良好③明黄(金)口縫部	沈綸・闊文RL・条縞刺突		称名寺 I
169	X30Y23	①粗粒(白墨)②良好③把手	沈綸・闊文LR・条縞刺突		称名寺 I
170	X30Y23	①粗粒(白色鉱物)②良好③灰黄(金)突起	沈綸		称名寺 I
171	X30Y29	①中粒(白色鉱物)②良好③良黄(金)口縫部	条縞刺突・沈綸・闊文L		称名寺 I
172	J-1-J7-1	①粗粒(黒墨)②良好③にい白(金)口縫部	沈綸・闊文LR・条縞刺突		称名寺 I
173	X30Y24	①粗粒(白色鉱物)②良好③白(金)把手	沈綸・闊文LR・帶刺突		称名寺 I
174	X30Y25	①中粒(白色鉱物)②良好③黑(金)把手	微隆起・闊文LR・刺突		称名寺 I
175	X40Y26	①粗粒(石英)②良好③白(金)突起	沈綸・闊文		称名寺 I
176	X30Y25	①粗粒(白色鉱物)②良好③把手	微隆起・闊文LR・刺突-C字状貼付		称名寺 I

注) 表の記載は以下の基準で行った。

① 胎土は粗粒(0.9mm以下)、中粒(1.0mm～1.9mm)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載。

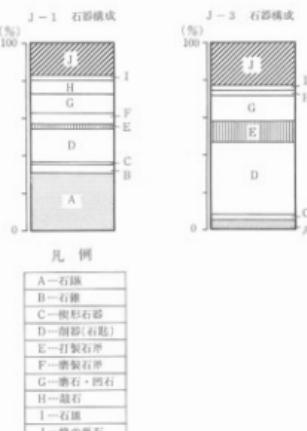
② 燒成は極良・良好・不良の3段階評価。

③ 色調は土器外表面で観察し、色名は新版標準土色粘(小山・竹脇1976)によった。

④ 残存は復元模型に沿って記載。大きさは残存横径()、復元横径()で示した。その他の小片については所属部位を記載した。

Tab. 6 石器観察表

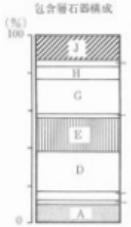
番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石	材	形状・調整加工の特徴
1	J-1	石 鋸	(0.9)(1.3)(0.5)(0.4)				黒	曜 石	J-1号住居址の石器は1~43・53~126を示した。これらの石器構成をみると石器が30.9%、鱗の葉石16.2%と多く、それに比較して打製石斧が2.9%と少ないという特徴がみられる。1~21が石器である。
2	J-1	石 鋸	(1.2)(1.1)(0.3)(0.3)				黒	色 安 山 岩	1~21は基部を欠損する。それ以外は基盤式で占められる。平底式に近いえりぐのは浅いものと深いものに変化がみられる。また7は先端部にえりぐのはいる特徴を有する。石器は22から34である。22~23は基部
3	J-1	石 鋸	(2.0)(2.2)(0.3)(0.3)				黒	曜 石	が丁寧な調整を仕上げられる。34は基部の調整はほとんどされない。
4	J-1	石 鋸	1.5 1.1 0.4	0.7			黒	色 安 山 岩	25は楕円形石器である。26は打製石斧である。27は磨器であり両面から刃部が形成されており、敲石としても用いられる。28~29は磨石である。
5	J-1	石 鋸	1.7 1.2 0.4	0.8			黒	曜 石	30は序に似た解石製品である。両面とも研磨により平滑化がなされ、側面の研磨もゆきとどき接続をなしている。31は磨石と凹石が同用される。磨石は両面とも使用される。32~34は磨製石斧である。32は刃部の研磨
6	J-1	石 鋸	2.3 (1.2) 0.4 (0.5)				黒	曜 石	は行方なく基部は敲打のままである。33はJ-1とビリッド出土のものが接合し、加熱を受け赤化している。34は殴打痕で構成され刃部に僅か擦痕があるだけである。35は緑色片岩製の石器で加熱により赤化している。材質と製品が有機的関連を持つ石器である。39は母岩とも呼べる石核で加熱を受けている。利根川河床から採取されたもので「上面」の遺物の配石として転用されている。40~42は鱗の葉石である。いずれも加熱によって赤化している。43は加熱を受け4片が接合した石盤である。分割して「上面」の遺物に転用している。53は緑色片岩製の石盤である。126は磨石で両面が使用されている。
7	J-1	石 鋸	(1.4)(1.7)(0.3)(0.4)				黒	曜 石	
8	J-1	石 鋸	2.0 (1.8) 0.5 (1.2)				黒	色 安 山 岩	
9	J-1	石 鋸	2.2 1.5 0.4	0.9			黒	色 安 山 岩	
10	J-1	石 鋸	2.2 (1.6) 0.4 (1.2)				黒	色 安 山 岩	
11	J-1	石 鋸	2.3 (1.6) 0.3 (0.9)				黒	色 安 山 岩	
12	J-1	石 鋸	2.6 (1.6) 0.3 (1.0)				黒	色 安 山 岩	
13	J-1	石 鋸	(2.4)(2.3) 0.6 (1.8)				黒	色 安 山 岩	
14	J-1	石 鋸	1.7 1.7 0.4	0.7			黒	色 安 山 岩	
15	J-1	石 鋸	1.8 1.6 0.4 (1.5)				黒	色 安 山 岩	
16	J-1	石 鋸	2.4 2.0 0.6 (3.1)				黒	色 安 山 岩	
17	J-1	石 鋸	(2.2)(1.5) 0.4 (1.3)				黒	色 安 山 岩	
18	J-1	石 鋸	(1.7)(1.6) 0.4 (0.9)				黒	色 安 山 岩	
19	J-1	石 鋸	(3.0)(2.0) 0.5 (2.3)				黒	色 安 山 岩	
20	J-1	石 鋸	3.3 (2.1) 0.5 (2.9)				黒	色 安 山 岩	
21	J-1	石 鋸	(4.0)(2.7) 0.5 (2.4)				黒	色 安 山 岩	
22	J-1	石 鋸	2.3 1.4 1.0	2.4			黒	曜 石	
23	J-1	石 鋸	(2.2) 2.5 1.0 (2.4)				黒	曜 石	
24	J-1	石 鋸	6.3 2.5 1.0 9.1				黒	色 真 岩	
25	J-1	楕 形 石 器	3.4 2.2 0.9	6.9			チ キ ャ ト		
26	J-1	石 匹	5.2 6.1 1.3	25.2			頁	若	
27	J-1	磨 器・取 石	18.2 12.5 4.0	1310.0			東 賀 安 山 岩		
28	J-1	敲 石	8.4 4.0 3.2	172.4			真 貝 安 山 岩		
29	J-1	敲 石	13.7 3.1 2.7	173.2			緑 色 片 岩		
30	J-1	輕 石 製 品	9.4 6.6 1.6	120.3			粗 粒 安 山 岩		
31	J-1	磨 石・凹 石	10.4 7.7 4.9 (605.0)				粗 粒 安 山 岩		
32	J-1	磨 石 製 品	12.9 5.8 2.4	300.0			安 賀 玄 武 岩		
33	J-1他	磨 石 斧	(10.8)(5.2) 2.5 (165.5)				安 賀 玄 武 岩		
34	J-1	磨 石 剣	12.3 7.1 4.0	520.0			凝灰岩質砂岩		
35	J-1	石 横	(15.8)(4.2) 3.9 (460.0)				緑 色 片 岩		
36	J-1	石 地	(8.1)(4.2)(1.3)	66.9			砂 岩		
37	J-1	石 地	(9.0)(5.1)(0.6)	20.2			砂 岩		
38	J-1	石 地	(7.8)(7.2)(1.0)	55.3			砂 岩		
39	J-1	石 槌	21.4 21.3 9.3	7360.0			文 象 真 岩		
40	J-1	鱗 の 黒 石	21.6 13.9 9.8	(2920.0)			粗 粒 安 山 岩		
41	J-1	鱗 の 黒 石	29.7 26.9 13.7	(1970.0)			粗 粒 安 山 岩		
42	J-1	鱗 の 黒 石	18.1 13.5 6.8	1770.0			粗 粒 安 山 岩		
43	J-1	石 盤	31.5 27.7 5.3	6950.0			粗 粒 安 山 岩		
44	J-3	石 鋸	2.5 1.8 0.5	1.9			黒	色 安 山 岩	J-3号住居址は44から52・54~57・119である。打製石斧が11%、鱗の葉石が22%と高比率を占める。44~45は凹基式石鋸である。45は平底式に近いがやや凹んでいる。46は楕円形石器である。47~48・49は削器であり刃部の削りを用いている。50は石核である。51は凹石・磨石であり磨石は両面使用である。52は敲石で先端部を使用している。54から57は鱗の葉石であり加熱によって赤化がみられる。57は鱗の葉石で打製石斧である。
45	J-3	石 鋸	3.9 (2.4) 0.5 (5.3)				黒	色 安 山 岩	
46	J-3	楕 形 石 器	4.0 1.5 1.0	4.9			黒	曜 石	
47	J-3	削 器	5.1 7.9 0.9	31.3			黒	色 真 岩	
48	J-3	削 器	9.3 5.9 1.3	68.9			頁	岩	
49	J-3	削 器	10.2 4.2 2.2	89.8			黒	色 真 岩	
50	J-3	石 板	11.0 7.6 3.9	320.0			黒	色 真 岩	



番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石 材	形状・調査加工の特徴	
51	J-3	凹 石・磨 石	(8.9)	8.2	5.1	(550.0)	粗粒 安山岩	J-4号住居址の石器構成は貧弱であった。峰の巣石が50%と多い他の特徴は見られない。	
52	J-3	敲 石	9.3	6.9	7.5	635.0	安山岩質凝灰岩	58は凹基式石縫である。59は削器であり、極長の削刃を用いている。	
53	J-1	石 盆	(13.0)(16.0)(4.6)	(1000.0)			緑 色 片 岩	60は敲石で複数面の使用が見られる。但是片面が石頭で裏面を峰の巣石に両用して使用される。62は峰の巣石である。104も裏面の削片を用いた削器である。裏面から細かい調整が施され、僅かに表面からの調整もみられる。	
54	J-3	峰 の 巢 石	23.8	21.1	15.7	7820.0	粗粒 安山岩	J-4	石器構成
55	J-3	峰 の 巢 石	(25.2)(18.6)(12.3)	(6345.0)			粗粒 安山岩	J-5	石器構成
56	J-3	峰 の 巢 石	21.2	14.0	9.3	2170.0	粗粒 安山岩		
57	J-3	峰 の 巢 石	20.3	14.6	10.0	2650.0	粗粒 安山岩		
58	J-4	石 縫	2.0	1.4	0.3	0.7	チャート		
59	J-4	削 器	7.5	4.6	2.0	64.7	黒 色 頁 岩		
60	J-4	敲 石	9.6	8.2	8.1	740.0	粗粒 安山岩		
61	J-4	峰の巣石・石盆	(14.1)(18.2)(10.7)	(3320.0)			粗粒 安山岩		
62	J-4	峰 の 巢 石	17.2	17.4	10.7	3650.0	粗粒 安山岩		
63	J-5	石 縫	(2.9)	1.5	0.4	1.4	頁 岩		
64	J-5	石 縫	2.1	2.2	0.5	(2.7)	黒 色 安山岩		
65	J-5	輕石 製品	7.5	5.6	2.1	(39.8)	輕石		
66	J-5	打製石斧	13.6	6.2	2.1	220.0	文象斑岩(?)		
67	JT-1	石 縫	(1.4)(1.3)(0.4)	(0.5)			無 單 石	J-5号住居址の石器構成は極めて貧弱であった。63は凸基有茎石縫である。64は石縫としてとらえたが未製品であることも考えられる。65は浮子形が類似する輕石製品である。両面とも丁寧に平滑化がなされ側面の研磨も行き届いている。下端部を僅くに欠損する。66は打製石斧である。基部が尖錐状に作出され凹みが基部側に付けられる。短圆形から分離形に移行する形をなすものと位置付けられる。	
68	JT-1	石 縫	(2.0)(1.4)(0.3)	(0.9)			黑色 安山岩		
69	JT-1	石 縫	(1.9)(1.7)(0.6)	(1.3)			黑色 安山岩		
70	JT-1	石 縫	(2.6)(2.2)(0.5)	(1.7)			黑色 安山岩		
71	JT-1	石 縫	3.6	2.3	1.1	6.8	黑色 安山岩		
72	JT-1	石 縫	3.4 (2.2)	0.6 (4.4)			黑色 安山岩		
73	JT-1	削 器	2.8	2.0	0.9	4.1	黒 單 石		
74	JT-1	横 形 石 器	4.4	3.1	1.0	15.2	黑色 安山岩		
75	JT-1	打 製 石 斧	(2.0)(3.0)(0.9)	(11.6)			黑色 安山岩		
76	JT-1	打 製 石 斧	(7.0)(5.1)(2.2)	(77.7)			頁 岩		
77	JT-1	打 製 石 斧	(10.4)(4.6)	2.3 (145.1)			頁 岩		
78	JT-1	打 製 石 斧	(4.0)(6.0)	2.1 (68.1)			珪 質 頁 岩		
79	JT-1	凹 石	13.5	9.0	7.9	760.0	粗粒 安山岩		
80	JT-1	凹 石・巣石	(7.3)(7.9)(4.4)	(340.0)			粗粒 安山岩		
81	JT-1	峰 の 巢 石	16.7	18.9	13.1	2900.0	粗粒 安山岩		
82	JT-1	峰 の 巢 石	(19.0)(14.0)	9.5(1970.0)			粗粒 安山岩		
83	JD-1	輕石 製品	15.6 (9.6)	3.5 (450.0)			輕石		
84	JD-1	峰 の 巢 石	(29.0)(26.6)(16.5)	(10600.0)			粗粒 安山岩		
85	X40Y28	石 縫	1.4	1.4	0.3	0.6	黑色 安山岩		
86	X31Y22	石 縫	1.6	1.2	0.2	0.4	黒 單 石		
87	X40Y25	石 縫	(1.9)	1.6	0.3 (0.8)	0.8	黑色 安山岩		
88	X37Y27	石 縫	2.7	2.0	0.4	1.6	チャート		
89	X38Y30	石 縫	3.3	1.3	0.6	1.7	黒 質 頁 岩		
90	X38Y29	石 縫	2.2	1.8	0.6	2.1	黒 單 石		
91	X38Y29	石 縫	3.1	2.3	0.5	3.7	黑色 安山岩		
92	X37Y29	横 形 石 器	3.7	2.5	0.7	8.4	黑色 安山岩		
93	H-22	横 形 石 器	2.9	2.4	0.8	4.7	珪 質 頁 岩		
94	X38Y29	横 形 石 器	2.9	2.1	1.3	8.4	黑色 安山岩		
95	X35Y24	横 形 石 器	2.9	2.1	0.8	5.2	珪 質 頁 岩		
96	X38Y24	横 形 石 器	2.7	1.8	0.8	3.4	黒 單 石		
97	X38Y25	横 形 石 器	3.4	2.0	0.9	5.3	チャート		
98	X38Y29	横 形 石 器	4.3	3.3	1.2	15.5	黑色 安山岩		
99	X38Y29	石 縫	3.2	1.8	0.6	2.5	珪 質 頁 岩		
100	X38Y26	石 縫	4.7	3.0	0.7	8.1	頁 岩		

番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石材	形状・調整加工の特徴
101	X3TY23	石 鋸	5.2	3.0	0.7	8.1	黒色頁岩	85からは鶴文包含層出土の石器である。85～89は石鋸である。85～87は凹基無茎式であり、88は平基無茎式である。89は凸基有茎式である。
102	X39Y28	石 鋸	2.4	1.7	0.4	1.2	黒色安山岩	92～96は橢形石鋸である。99から101は石鋸である。99から101は形態が共通する横長の削片を素材にして刃部が作出される。102は基部の彫形もなされる。103は粗削の石鋸である。105は打製石斧の刃部であり使用痕が観察にみられた。欠損部は再生調整がなされ削器に転用されたか。
103	X34Y26	石 鋸	5.4	5.8	0.7	18.3	黒・色 頁岩	106～118、120は打製石斧である。形態別にみると1類・短形(106・113)、2類・基部側に凹部が付される形(106・110～112・114・115・120)、3類・分彫形(116・117)、4類・片刃形(107・118)、5類・彫石斧(109)に分けられる。1～3類の変化は1～3の順で慶應遺存すると考えられ、4類は鶴文時代早層から前期の所産と考えられる形態である。この中で113は粗粒安山岩で製作された打製石斧である。117は大形である点から特殊用途な打製石斧であることも考えられる。111・115・120には使用痕があらわれた。113は加熱され赤化している。121・122・124・125は磨石・凹石と、123・127は砥石と両用される。126は磨石として両面使用される。128は早層から前期の多面形石器である。129は小形の彫刻石斧であり、刃部の長い範囲が磨かれている。130・132は砾石である。133～142は鶴の巣石である。133・134は石鋸と両用する鶴の巣石である。133はJ-4の61と接合し完形になる。133・136～139・141・142は加熱・赤化を受けている。
104	J-5	削 器	6.5	3.7	0.9	17.7	頁岩	
105	X32Y26	打 製 石 斧	4.6	5.4	1.3	43.2	黒・色 頁岩	
106	X38Y28	打 製 石 斧	8.0	(4.3)	0.9	(24.1)	黒色頁岩	
107	X33Y24	打 製 石 斧	(8.2)	5.7	3.1	(136.6)	黒色頁岩	
108	X38Y26	打 製 石 斧	(6.2)	4.6	1.7	(61.9)	灰色安山岩	
109	X39Y29	打 製 石 斧	9.6	4.3	2.8	160.5	凝灰岩質砂岩	
110	表 探	打 製 石 斧	(11.5)	5.4	2.2	(122.5)	輝 級 岩	
111	X37Y29	打 製 石 斧	11.9	5.6	2.4	183.9	灰色安山岩	
112	X37Y26	打 製 石 斧	(10.1)	4.0	1.8	(64.3)	硬質頁岩	
113	X38Y25	打 製 石 斧	12.6	5.1	2.2	157.5	粗粒安山岩	
114	X37Y25	打 製 石 斧	13.1	6.1	2.5	220.0	黒・色 頁岩	
115	X37Y28	打 製 石 斧	10.5	6.7	2.8	240.0	粗粒安山岩	
116	X39Y26他	打 製 石 斧	11.7	9.2	1.7	170.7	黒色頁岩	
117	X38Y26	打 製 石 斧	19.4	14.1	5.8	1380.0	黒色頁岩	
118	X32Y26	打 製 石 斧	9.9	6.4	2.3	185.2	黒色頁岩	
119	J-3	打 製 石 斧	(14.0)	(8.5)	(3.2)	(360.0)	黒色頁岩	
120	X34Y26	打 製 石 斧	13.1	6.2	1.8	(147.3)	黒色頁岩	
121	X41Y30	磨 石・凹 石	10.0	6.5	3.6	355.0	粗粒安山岩	
122	X36Y34	磨 石・凹 石	13.4	9.8	4.6	850.0	粗粒安山岩	
123	X33Y29	磨 石・最 石	10.7	8.7	3.6	530.0	粗粒安山岩	
124	X39Y30	磨 石・凹 石	10.9	8.9	5.2	670.0	粗粒安山岩	
125	X39Y29	磨 石・凹 石	12.1	7.8	3.8	590.0	石英閃綠岩	
126	J-1	磨 石	12.9	8.3	4.7	770.5	粗粒安山岩	
127	X38Y29	磨 石・敲 石	13.8	9.4	4.0	870.0	石英閃綠岩	
128	H-21	多 面 体 磨 石	12.3	5.9	5.6	480.0	粗粒安山岩	
129	X29Y26	錐 石 製 品	(5.9)	(6.5)	(1.8)	(47.9)	鶴 石	
130	X39Y29	彫 製 石 斧	7.3	4.8	3.5	155.6	黒色頁岩	
131	X38Y28	錐 石	9.4	2.6	2.2	185.9	黒色頁岩	
132	X29Y31	錐 石	25.6	4.7	3.5	600.0	緑色片岩	
133	X36Y23	錐 の 嵌石・石 鋸	(16.1)	(26.7)	(11.0)	(2100.0)	粗粒安山岩	
134	X39Y28	石頭・錐の巣石	(23.3)	(13.0)	(5.2)	(1655.0)	緑色片岩	
135	X38Y27	錐 の 嵌石	(13.0)	(11.2)	(5.8)	(745.0)	粗粒安山岩	
136	X41Y31	錐 の 嵌石	19.8	25.4	12.7	3710.0	粗粒安山岩	
137	X29Y31	錐 の 嵌石	23.0	20.2	8.8	3220.0	粗粒安山岩	
138	X39Y28	錐 の 嵌石	(12.4)	(14.0)	(9.2)	(1500.0)	粗粒安山岩	
139	O-7	錐 の 嵌石	18.4	16.8	(11.7)	(2400.0)	粗粒安山岩	
140	X36Y25	錐 の 嵌石	21.2	17.0	13.5	4930.0	粗粒安山岩	
141	X38Y25	錐 の 嵌石	(22.0)	(19.9)	(13.8)	(6200.0)	粗粒安山岩	
142	X35Y25	錐 の 嵌石	40.8	22.4	31.0	25600.0	粗粒安山岩	

註)表の記載で、大きさについての単位はcm、gであり、現存値は()で示した。



Tab. 7 平安時代遺物觀察表

番号	出土位置	器 形	大 S S 口径・器高	①胎土 ②燒成 ③色調 ④残存 (17.6) (3.1)	成・單形方法		備 考
					口 線・脚 部	底 面	
1	H-1	須 恵 盖	— —	①粗粒②良好③灰白④1/6 (17.6) (3.1)	短く直立。縫縫。	内外面に施釉。	
2	H-1	瓦	— —	①中粒②良好③淡橙			
3	H-1	土 鍋	<長 4.0 幅 1.4 厚 1.5>	①粗粒②良好③橙④完形			
4	H-2	瓦	— —	①中粒②良好③黄灰			
5	H-2	須恵瓶(皿)	— — (2.8)	①粗粒②良好③淡青灰④1/5 (22.8) (5.7)	縫縫。	右回転鋸削り。	
6	H-2	須 恵 合 盆	— —	①粗粒②良好③淡青灰④1/2	やや外反。縫縫。	回転糸切削。	高台欠損。
7	H-2	土 鍋 裏	(35.4) (14.3)	①粗粒②良好③明赤褐④1/3	弱い「コ」の字状口縁。		脚部鋸削り。
8	H-2	須 恵 羽 笠	(36.1) (18.3)	①粗粒②良好③橙④1/6	大きく内凹。鋸削り。		
9	H-3	須 恵 杯	(9.0) 1.3	①中粒②不良③灰④1/5	直線的に外傾。縫縫。	右回転糸切削。	
10	H-3	カ ラ ケ	(9.0) 2.3	①中粒②良好③明黃褐④1/2	やや外反。縫縫。	右回転糸切削。	内面黒色処理。スス付着。
11	H-3	カ ラ ケ	8.8 2.1	①粗粒②良好③淡黄褐④2/3	直線的に外傾。縫縫。	右回転糸切削。	
12	H-3	カ ラ ケ	(8.9) 2.1	①粗粒②不良③によい黄褐④1/3	直線的に外傾。縫縫。	右回転糸切削。	
13	H-3	黒 色 土 器	12.4 4.0	①粗粒②墨黒③橙④1/2	短く外反。縫縫。	右回転糸切削。	内面黒色処理。
14	H-3	須 恵 蓋	(33.0) (21.0)	①粗粒②不良③によい赤褐④1/5	「K」の字状。鋸削り。		
15	H-3	灰 土 小 瓶	— — (7.2)	①粗粒②墨黒③灰④1/3	縫縫。	右回転糸切削。	外面に施釉。
16	H-3	瓦	— —	①中粒②良好③によい橙			
17	H-4	土 鍋	<長 4.4 幅 1.9 厚 1.5>	①粗粒②良好③橙④完形			
18	H-4	土 鍋 杯	(11.2) 3.0	①粗粒②良好③によい赤褐④1/3	横削で。撫で。	鋸削り。	
19	H-4	土 鍋 杯	(12.0) 3.2	①粗粒②良好③橙④1/3	横削で。撫で。	鋸削り。	
20	H-4	土 鍋 杯	(12.6) 3.1	①粗粒②良好③橙④2/3	横削で。撫で。	鋸削り。	
21	H-4	黒 色 土 器	(13.5) 2.6	①中粒②良好③暗青灰④1/2	直線的に外傾。縫縫。	右回転糸切削。	内面とともに黒色処理。
22	H-4	須 恵 蓋	15.5 2.7	①粗粒②良好③赤褐④1/3	強く外反。縫縫。	右回転糸切削。	
23	H-4	灰 土 小 瓶	(14.4) 6.0	①粗粒②良好③オーブン灰④1/4	端部強く外反。縫縫。	右回転糸切削。	
24	H-4	須 恵 蓋	(15.0) 5.5	①中粒②良好③灰黃紫④1/2	短く外反。縫縫。	右回転糸切削。	
25	H-4	須 恵 蓋	(19.0) (4.1)	①粗粒②良好③白灰④1/5	強く内凹。縫縫。		
26	H-4	土 鍋 裏	19.8 (25.0)	①粗粒②良好③墨青灰赤褐色ほぼ完形	弱い「コ」の字状口縁。		脚部鋸削り。
27	H-5	不 明	<投 8.9 幅 1.6 厚 1.2>	④完形			鉄打?
28	H-5	土 鍋 杯	(11.0) 3.7	①粗粒②墨黒③明黃褐④1/3	棒状工具による深い溝。縫縫。	鋸削り。	
29	H-5	土 鍋 杯	(11.8) 3.4	①粗粒②良好③暗褐色④1/4	横削で。鋸削り。	鋸削り。	
30	H-5	土 鍋 杯	(13.0) 3.5	①中粒②墨黒③橙④1/4	横削で。指押さえ。	鋸削り。	
31	H-5	土 鍋 裏	(19.0) (9.9)	①粗粒②良好③墨黒④1/4	「コ」の字口縁。横削で。		脚部鋸削り。
32	H-5	須 恵 蓋	14.2 4.7	①中粒②良好③灰白④完形	やや外反。縫縫。		高台後付け。
33	H-5	土 鍋 裏	22.0 (37.0)	①粗粒②良好③墨黒④1/2	「K」の字状口縁。鋸削り。		
34	H-5	須 恵 蓋	13.6 5.1	①粗粒②良好③灰白④完形	やや外反。縫縫。	右回転糸切削。	
35	H-5	須 恵 杯	14.0 3.6	①中粒②良好③灰白④1/2	やや外反。縫縫。	右回転糸切削。	底部肥厚。
36	H-5	土 鍋 裏	(18.0) (8.0)	①粗粒②墨黒③暗褐色④1/6	「K」の字状口縁。横削で。		脚部鋸削り。
37	H-5	土 鍋 裏	20.2 27.1	①粗粒②良好③橙④1/5	「K」の字状口縁。指押さえ。	鋸削り。	脚部鋸削り。
38	H-5	灰 土 小 瓶	(14.5) 5.0	①粗粒②墨黒③灰白④1/4	端部強く外反。縫縫。	右回転糸切削。	
39	H-5	須 恵 蓋	— — (4.5)	①中粒②良好③灰白④1/2	縫縫。	右回転糸切削。	脚部鋸削り。
40	H-5	土 鍋 裏	20.0 (32.0)	①粗粒②墨黒③橙④1/4	「K」の字口縁。鋸削り。		脚部鋸削り。
41	H-5	土 鍋 裏	(18.0) (13.4)	①粗粒②良好③橙④1/4	「K」の字状口縁。横削で。		脚部鋸削り。
42	H-5	土 鍋 裏	19.7 26.4	①粗粒②良好③橙④ほぼ完形	弱い「コ」の字状口縁。	鋸削り。	脚部鋸削り。
43	H-6	土 鍋 裏	(18.7) (16.1)	①粗粒②良好③墨～暗褐色④1/4	弱い「コ」の字状。横削で。		脚部鋸削り。
44	H-6	須 恵 棺	(14.2) (5.1)	①粗粒②良好③墨④1/3	やや外反。縫縫。	右回転糸切削。	炭化物付着。有明具。
45	H-6	須 恵 棺	— — (3.4)	①中粒②良好③青灰灰④1/4	縫縫。	回転糸切削。	
46	H-6	カ ラ ケ	10.6 2.2	①粗粒②良好③青灰黄②/3	やや外反。縫縫。	右回転糸切削。	
47	H-6	土 鍋 裏	(19.0) (13.5)	①粗粒②良好③橙④1/3	弱い「コ」の字状口縁。		脚部鋸削り。
48	H-6	須 恵 棺	15.0 (5.2)	①粗粒②良好③青灰灰④ほぼ完形	やや外反。縫縫。	右回転糸切削。	高台欠損。皮化物付着。
49	H-6	須 恵 棺	(15.2) (4.1)	①中粒②良好③墨～灰白②/3	縫縫。	右回転糸切削。	高台欠損。
50	H-6	土 鍋 裏	19.8 (17.0)	①粗粒②良好③墨～灰白④1/4	弱い「コ」の字状。横削で。		脚部鋸削り。

番号	出土位置	器 形	大 き さ 口径・器高	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整 形 方 法		備 考
					口 線・肩 部	底 部	
51	H-6	須 恵 杯	15.7 5.3	①中粒芯良好②灰白芯形	やや外反。縦撚。	回転糸切痕。	
52	H-6	土 師 斧	(18.6) (17.1)	①粗粒芯良好黒～褐色②/4	「く」の字状。横撚で。削り。		上半1/2弱残
53	H-6	須 恵 杯	(17.0) 6.0	①粗粒芯良好②灰白芯②/2	端部薄く外反。縦撚。		
54	H-6	土 師 斧	(19.4) (14.4)	①粗粒芯良好③によい赤褐色②/3	弱い「コ」の字口線。横撚り。		
55	H-7	須 恵 盆	(9.6) 2.2	①中粒芯良好②黄褐色②/3	直線的に外傾。縦撚。	右回転糸切痕。	
56	H-7	須 恵 高台杯	— (2.3)	①粗粒芯良好③淡褐色底のみ。	縦撚。	右回転糸切痕。	高台後付け。再燒成?
57	H-7	須 恵 盆	(17.2) (1.7)	①中粒芯良好②青灰色②/10	縦撚。	右回転糸切痕。	
58	H-8	土 師 斧	(17.9) (9.4)	①中粒芯良好②褐色②/6	「コ」の字口線。削り。		炭化物付着。
59	H-8	須 恵 杯	(13.4) 3.7	①中粒芯良好②灰白芯②/3	端部や外反。縦撚。		
60	H-8	土 師 露 袋	(11.0) (10.0)	①粗粒芯良好③淡褐色②/3	緩く外凸。横撚で。		脚部擦り。
61	H-11	須 恵 杯	12.8 5.2	①粗粒芯不良②灰黃④/6	端部厚し外反。縦撚。	回転糸切痕。	高台後付け。
62	H-11	須 恵 羽 刃	(22.0) (18.1)	①中粒芯良好②黃褐色②/16	削り。		上部1/8弱残。
63	H-11	須 恵 羽 刃	(22.0) (18.6)	①中粒芯良好②暗褐色～黒褐色②/2			窓内。
64	H-12	須 恵 杯	(12.4) 3.8	①中粒芯良好③によい黄褐色③/4	端部外反。縦撚。	回転糸切痕調整。	
65	H-12	須 恵 杯	(15.5) (4.1)	①粗粒芯良好③黄褐色②/7	やや外反。縦撚。		窓内。
66	H-12	砾 石	≤長 8.2 幅 6.2 厚 2.1	④鉄石。欠損。			
67	H-12	須 恵 杯	(11.8) 4.9	①中粒芯良好②褐色②/4	縦撚。	回転糸切痕調整。	
68	H-12	須 恵 杯	(13.0) 4.5	①中粒芯良好②淡褐色②/3	短く外反。縦撚。	右回転糸切痕。	高台後付け。
69	H-13	須 恵 高台杯	— (3.4)	①中粒芯良好②黄褐色②/5	縦撚。	内面に號記号有り。	窓内。高台後付け。
70	H-14	須 恵 杯	(14.7) (4.5)	①粗粒芯良好②灰白芯②/2	直線的に外傾。縦撚。		
71	H-14	土 師 杯	(10.1) (3.8)	①中粒芯良好②暗～黒褐色②/4	やや立ち。横撚で。	不定方向削り。	内面に炭化物付着。
72	H-14	須 恵 杯	(13.4) 4.1	①中粒芯良好③によい黄褐色②/3	短く外反。縦撚。	回転糸切痕。	底部内側が黒色
73	H-15	須 恵 杯	(13.0) 4.5	①粗粒芯良好②灰白芯②/6	やや外反。縦撚。	回転糸切痕調整。	
74	H-15	須 恵 杯	(12.0) 3.9	①中粒芯良好③橙②/4	やや外反。縦撚。	回転糸切痕調整。	
75	H-15	須 恵 杯	(15.2) 4.6	①中粒芯良好②淡褐色②/4	強く外反。縦撚。	左回転糸切痕。	高台後付け→縦撚調整。
76	H-15	灰 軟 鉛	(15.4) 3.5	①粗粒芯良好②灰白芯②/4	短く外反。縦撚。	回転糸切痕調整。	
77	H-16	鉄 鉛	≤長 8.2 幅 2.5 厚 2.0	④ 完形			
78	H-16	須 恵 杯	(14.1) 4.4	①粗粒芯不良②灰白芯②/4	端部厚し外反。縦撚。	右回転糸切痕。	
79	H-16	須 恵 杯	14.2 5.4	①粗粒芯良好②灰白芯②/3	短く外反。縦撚。	回転糸切痕調整。	炭化物付着。
80	H-16	須 恵 杯	— (2.1)	①中粒芯良好②暗褐色底部のみ		回転糸切痕。	
81	H-17	須 恵 杯	— (3.1)	①粗粒芯不良③淡黃色②/2	縦撚。	右回転糸切痕。	
82	H-17	灰 黑 斧	(12.6) 2.8	①粗粒芯良好③淡黃色②/4	強く外反。縦撚。		
83	H-17	須 恵 杯	(13.0) 3.6	①中粒芯良好③によい黄褐色②/4	短く外反。縦撚。	右回転糸切痕。	底部歪む。
84	H-17	灰 壱 台 壇	— (9.0)	①粗粒芯良好②黄褐色②/3	縦撚。		
85	H-17	土 師 杯	(14.0) (1.7)	①粗粒芯良好③暗褐色②/6	横撚で。指押さえ。	削り。	
86	H-17	土 師 杯	(14.1) 2.0	①中粒芯良好②暗褐色②/4	直立。横撚で。握て。	不定方向削り。	
87	H-17	須 恵 杯	(15.0) 5.2	①中粒芯良好②明オーリーク灰褐色②/3	やや立ち。縦撚。	回転糸切痕調整。	
88	H-17	土 師 斧	(20.0) (8.0)	①粗粒芯良好③橙②/6	弱い「コ」の字口線。横撚で。		脚部擦り。
89	H-17	須 恵 杯	(18.0) 6.7	①中粒芯良好②によい褐色②/2	やや外反。縦撚。	右回転糸切痕。	
90	H-17	灰 軟 鉛	16.6 5.4	①粗粒芯良好③明褐色②/4	短く外反。縦撚。	回転糸切痕。	内外面に擦耗。
91	H-17	土 師 斧	19.5 (12.8)	①粗粒芯良好③橙②/2	「コ」の字口線。横撚で。		
92	H-21	土 師 杯	(12.4) 3.4	①粗粒芯良好③によい赤褐色②/2	横撚で。握て。	削り。	黒茎母を多く含む。
93	H-21	土 師 杯	(11.4) 3.2	①粗粒芯良好③暗褐色②/3	横撚で。削り。		側部に2本の沈沒有り。
94	H-21	須 恵 杯	11.8 3.3	①粗粒芯良好②灰白芯②/2	直線的に外傾。縦撚。		
95	H-21	土 師 杯	(12.5) 3.4	①粗粒芯良好③橙②/4	横撚で。握て。	削り。	
96	H-21	須 恵 杯	(16.5) (5.3)	①中粒芯良好②オーリーク灰褐色②/4	短く立ち。縦撚。	右回転糸切痕。	側面の模造か?
97	H-21	土 師 斧	(20.0) (7.6)	①中粒芯良好②黄褐色②/10	「コ」の字口線。横撚で。		側部削り。
98	H-22	須 恵 杯	(14.2) 4.1	①粗粒芯良好②灰白芯②/4	端部や外反。縦撚。	右回転糸切痕。	
99	H-22	土 師 小台壇	— (3.6)	①粗粒芯良好③暗褐色②/2	横撚で。		柱状部は若干膨らむ。
100	H-22	鉄 鉛	≤長 8.8 幅 1.6 厚 0.7	④ 完形			

番号	出土位置	器 形	大きさ 口径・底高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整 形 方 法		備 考
					口縁・脚部	底 面	
101	H-22	須 意 楪	(12.6) 3.6	①粗粒②良好③灰白④1/2	短く外反。縦縫。	回転糸切削。	
102	H-22	土 筒 壺	(20.4)(12.1)	①中粒②良好③橙～黒褐④1/8	「コ」の字口縁。横撫で。		脚部削り。
103	H-23	須 意 楪	15.5 6.2	①粗粒②良好③褐④3/4	肥厚し短く外反。縦縫。	右回転糸切削。	
104	H-24	土 筒 杯	(11.6)(3.4)	①中粒②良好③橙～暗褐色④1/4	横撫で。箇削り。	箇削り。	
105	H-24	須意コップ	7.8 7.3	①細粒②極度灰白③1/2	やや外反。縦縫。	右回転糸切削。	
106	H-24	須 意 杯	12.7 2.9	①細粒②良好③灰白④ほぼ完形	縦縫。	右回転糸切削。	
107	H-24	須 意 楪	10.3 5.8	①細粒②良好③灰白④1/4	短く直立。縦縫。	回転糸切削調整。	
108	H-24	須 意 杯	11.6 4.1	①粗粒②良好③明褐色④3/4	縦縫。	右回転糸切削。	
109	H-24	土器小合せ	(12.4)(5.2)	①粗粒②良好③褐色④口縁1/4	「コ」の字口縁の前段階。		脚部塗抹で、箇削り。
110	H-25	須 意 杯	(12.6) 3.6	①中粒②良好③青灰④1/3	端部短く外反。縦縫。	右回転糸切削。	
111	H-25	須 意 盖	(17.1)(1.5)	①中粒②良好③灰白④1/10	縦縫。		
112	H-25	須 意 盖	17.7 3.7	①粗粒②良好③灰④ほぼ完形	縦縫。		
113	H-25	須 意 楪	16.1 6.5	①粗粒②良好③灰白④完形	直線的に外傾。縦縫。	右回転糸切削。	
114	H-25	土 筒 壺	(19.8)(8.5)	①中粒②良好③橙④1/10	「コ」の字口縁。横撫で。		口部に1条の沈線。 調節削り。
115	H-25	土 筒 壺	(21.2)(7.0)	①粗粒②良好③橙④1/10	「コ」の字口縁。指押さえ。		
116	D- 8	灰 黑 楪	15.7 5.5	①細粒②極度灰白③完形	やや外反。縦縫。	回転糸切削。	内外面灰胎浸しがけ。
117	D- 8	須 意 楪	14.0 5.2	①粗粒②不良③灰白④完形	強く外反。縦縫。	右回転糸切削。	
118	D- 8	铁 刃 <長6.7 幅1.7 厚0.7>		④完形			
119	D- 8	铁 刃 <長7.3 幅1.0 厚0.7>		④完形			
120	D- 8	铁 刃 <長6.7 幅1.7 厚0.8>		④完形			
121	D-34	土 筒 壺	19.4 (19.0)	①粗粒②良好③橙④1/2	「コ」の字口縁。横撫で。		脚部削り。
122	W- 2	須 意 杯	(11.6)(4.0)	①粗粒②梅良3明黄褐④1/3	やや外反。縦縫。	回転糸切削。	口部に化粧物付着。
123	W- 6	カワタケ (6.4) 1.9		①細粒②良好③橙④1/3	短く直立。縦縫。	回転糸切削調整。	口部に化粧物付着。
124	W- 6	土 筒 杯	(11.2) 3.5	①粗粒②不良③にい黄褐④1/3	横撫で。指で。	箇削り。	
125	W-10	須 意 杯	(14.6)(3.9)	①細粒②極度灰白③1/6	短く外反。縦縫。		
126	F 区	須 意 盖	17.5 4.2	①中粒②良好③灰黄④完形	短く直立。縦縫。		形が歪んでいる。

註) 1. 須意器・黒色土器については以下の基準による。

須 意 器=縦縫成型。焼成焼成のものも含めた。

黒色土器=縦縫成型。人生态像擦きを施し、施洗後炭素の吸着を内面や外面に施したもの。

2. ①胎土は粗粒(0.9mm以下)、中粒(1.0mm~1.9mm)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載。

② 焼成は極良、良好、不良の3段階評価。

③ 色調は土器外表面を観察し、色名は新版標準土色粘(小山・竹原1976)によった。

④ 大きさについての単位はcmであり、現存値は()で示した。

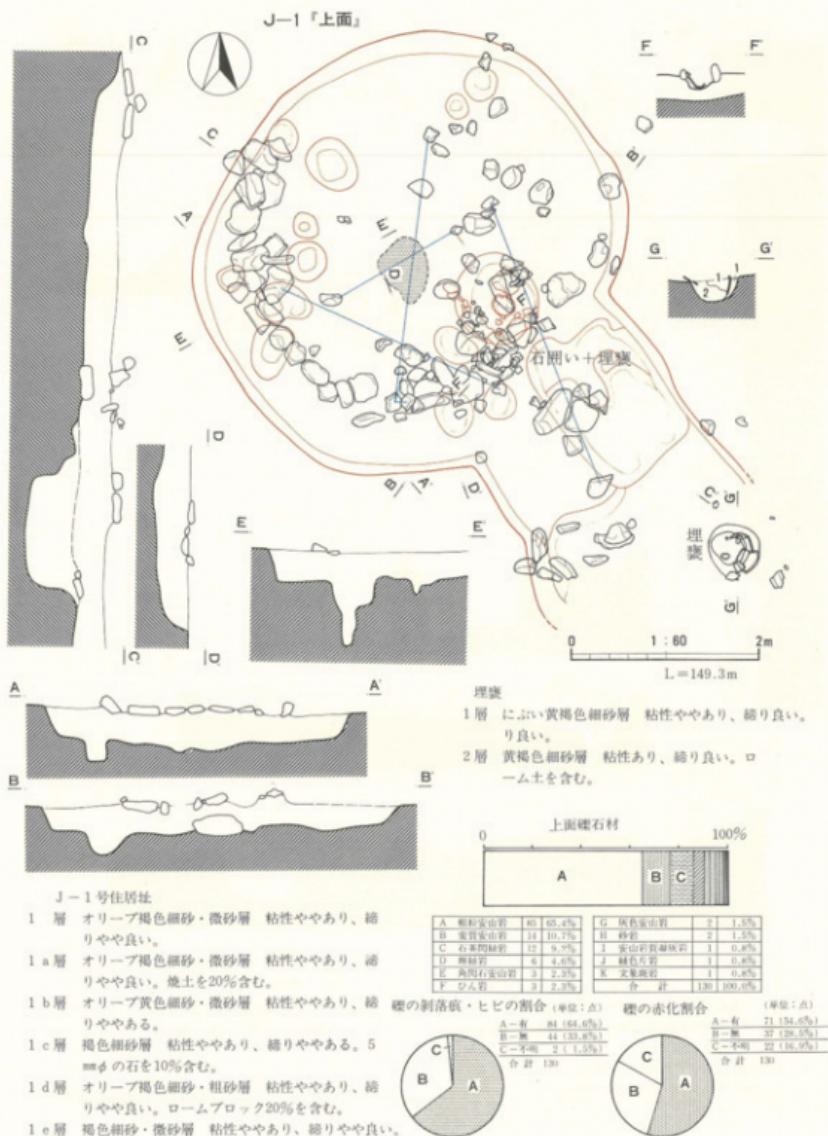
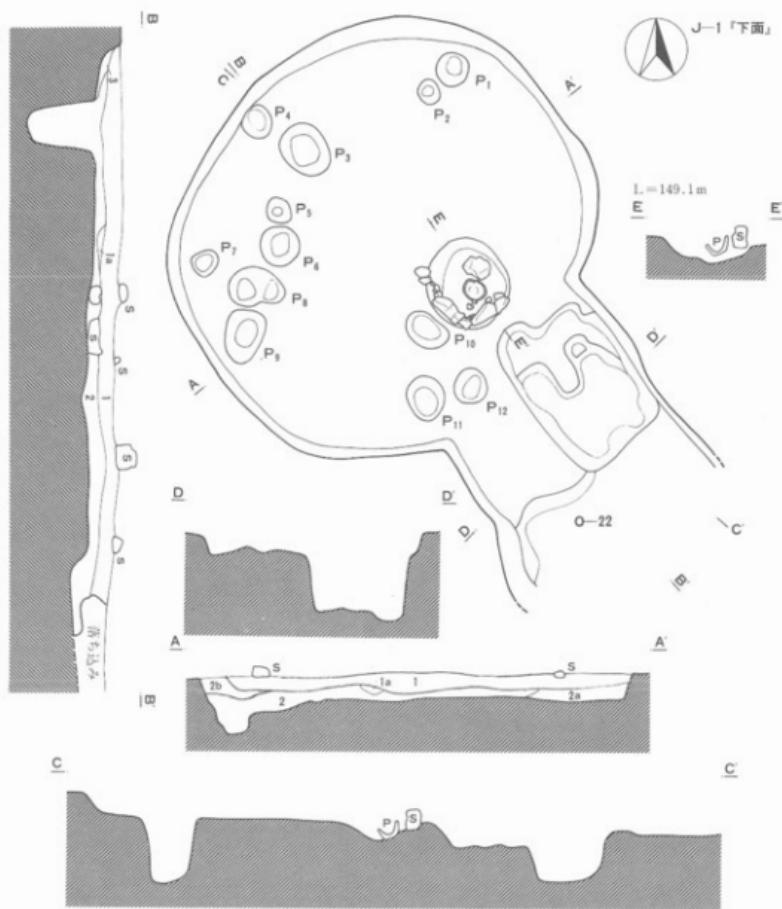


Fig. 10 繩文時代の住居址 (1)



- 2 層 オリーブ褐色細砂・微砂層 粘性あり。
 2 a 層 黄褐色細砂・微砂層 粘性あり、織りやや良い。
 　V層混入80%以上。バミス20%含む。
 2 b 層 暗灰黄色粗砂・細砂層 粘性ややあり、織り強
 　くバミス10%含む。
 2 c 層 暗オリーブ褐色細砂・微砂層 粘性ややあり、
 　織りやや良い。バミス5%含む。

- 2 d 層 オリーブ褐色粗砂・細砂層 粘性・織りともに
 　弱い。埋混入20%。
 3 層 オリーブ色細砂・微砂層 粘性ややあり、織り
 　やや良い。V層混入80%以上。

1 : 80 2m

L = 149.4m

Fig. 11 繩文時代の住居址(2)

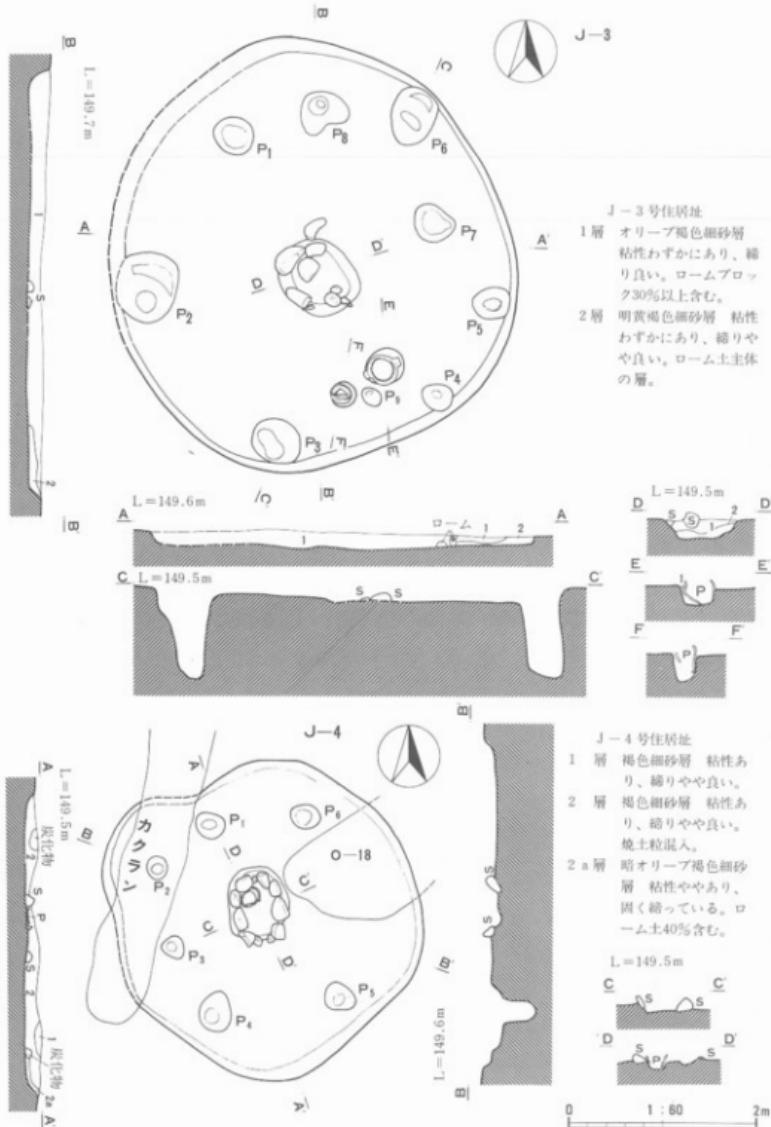


Fig. 12 繩文時代の住居址(3)

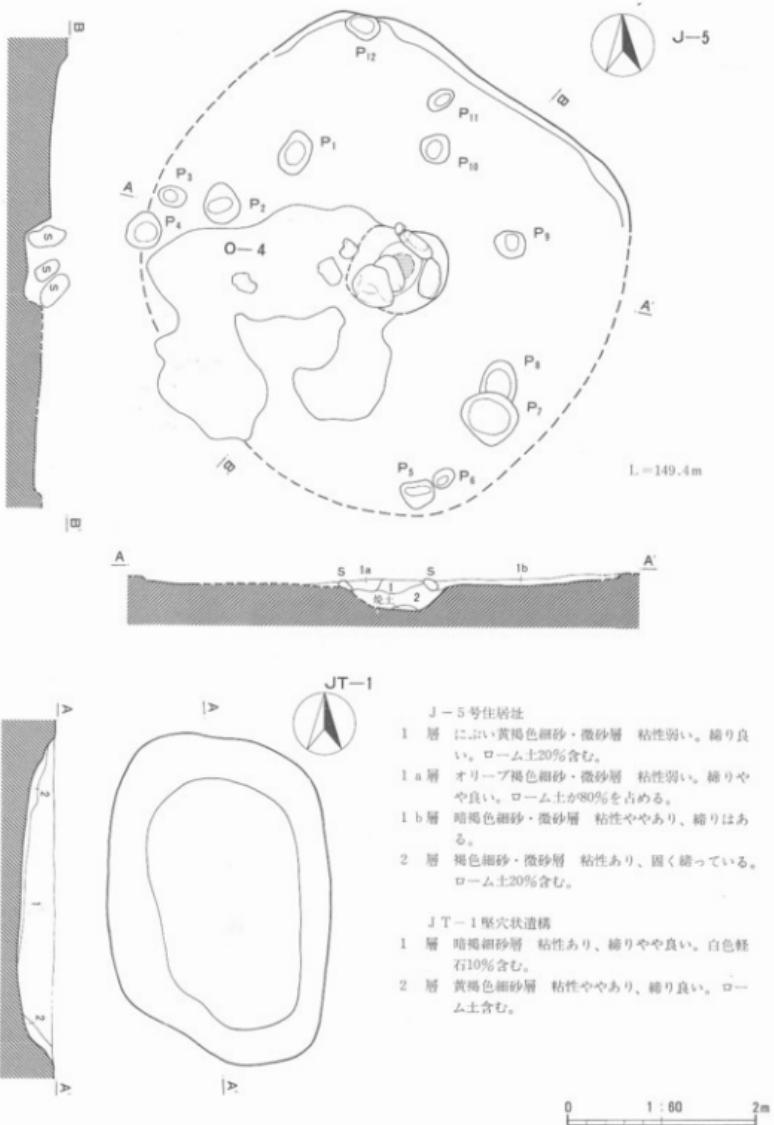
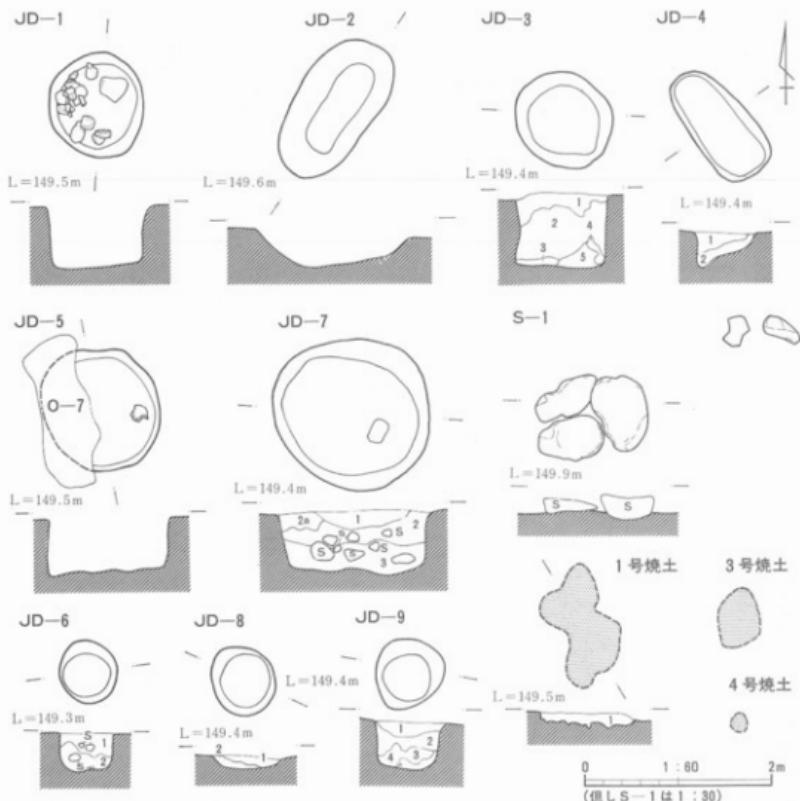


Fig. 13 繩文時代の住居址、竪穴状遺構 (4)



JD-3号土坑

- 1 層 オリーブ褐色粗砂・礫層 粘性なし。固く結る。
- 2 層 オリーブ褐色粗砂・礫層 粘性なし。固く結る。
- 3 層 黄褐色粗砂・礫層 粘性強く、縮り強い。ローム土主体。
- 4 層 黄褐色砂層 粘性なし。固く結っている。
- 5 層 オリーブ褐色粗砂層 粘性なし。固く結る。

JD-4号土坑

- 1 層 オリーブ褐色細砂・粗砂層 粘性なし。固く結る。
- 2 層 黄褐色細砂・粗砂層 地山の砂質ローム土多く混入。

JD-7号土坑

- 1 層 黄褐色細砂層 粘性弱い。縮りやや良い。
- 2 層 暗褐色細砂層 粘性ややあり、縮りやや良い。
- 2a層 褐色細砂層 粘性ややあり、縮りやや良い。
- 3 層 黑褐色細砂層 粘性ややあり、縮りやや良い。

JD-6号土坑

- 1 層 褐色粗砂・礫層 粘性なし。固く結る。ローム土30%含む。
- 2 層 暗褐色粗砂・礫層 粘性なし。固く結る。

JD-8号土坑

- 1 層 褐色粗砂・礫層 粘性なし。固く結る。ローム土30%含む。
- 2 層 黄褐色粗砂・礫層 粘性なし。ローム土主体の層。

JD-9号土坑

- 1 層 褐色粗砂・礫層 粘性なし。ローム土40%含める。
- 2 層 オリーブ褐色粗砂・礫層 ローム土主体の層。
- 3 層 褐色粗砂・礫層 固く結る。ローム土20%含める。
- 4 層 黄褐色粗砂・礫層 粘性なし。ローム土主体の層。

1号焼土

- 1 層 褐色土層 As-CとAs-YPが混じるクロボク土。

Fig. 14 繩文時代の土坑、集石、焼土

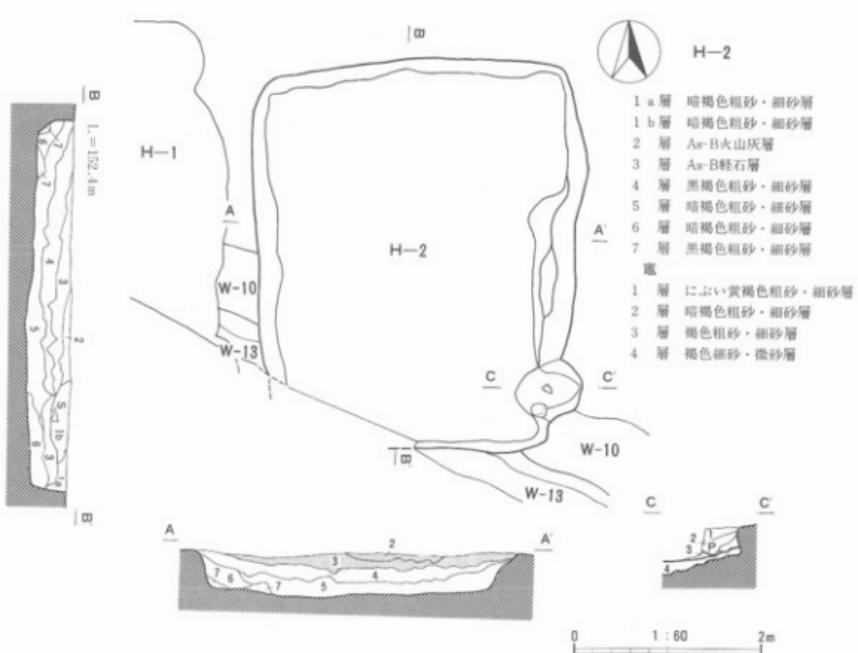
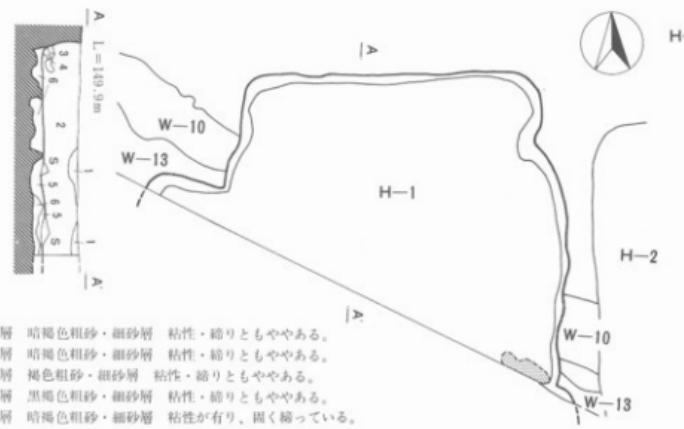


Fig. 15 平安時代の住居址 (1)

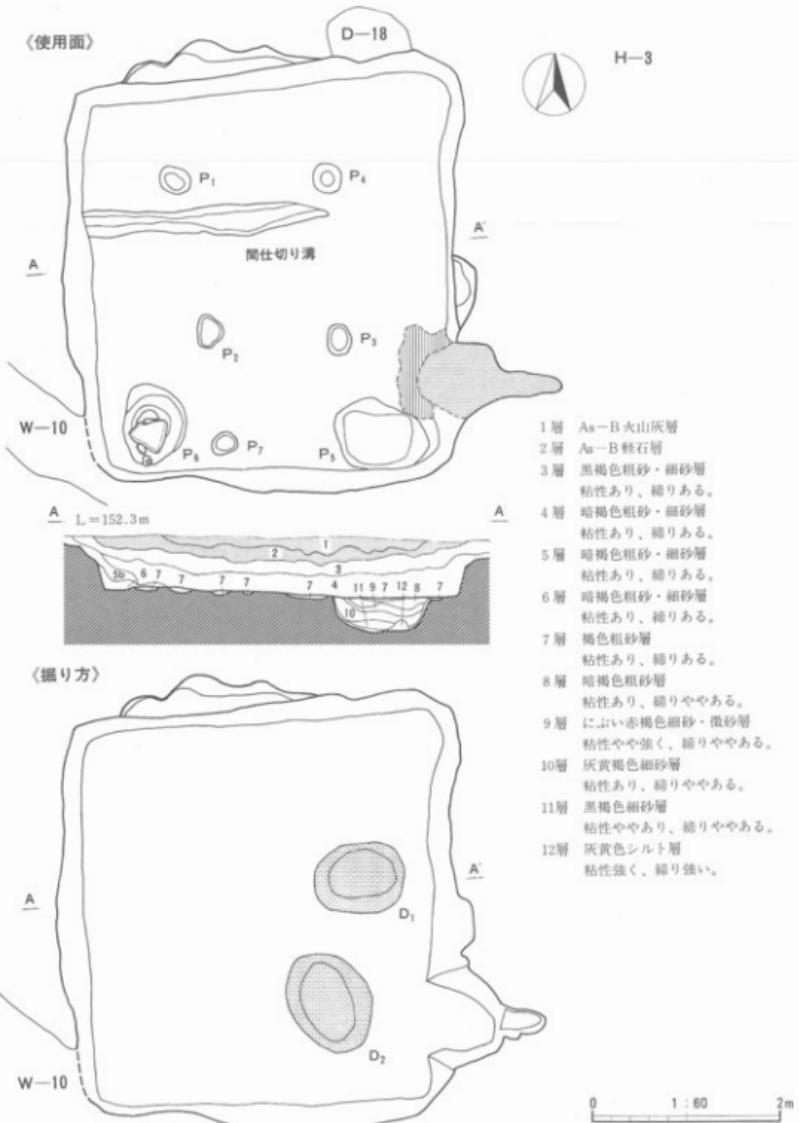


Fig. 16 平安時代の住居址 (2)

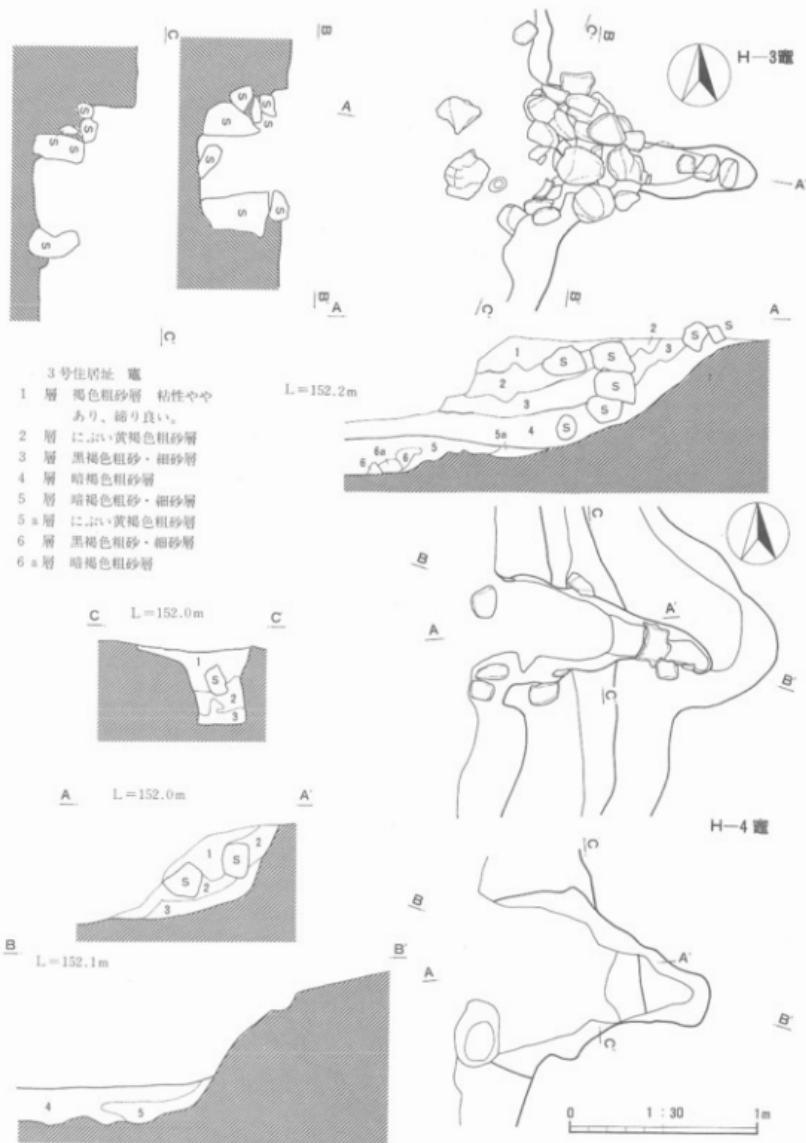
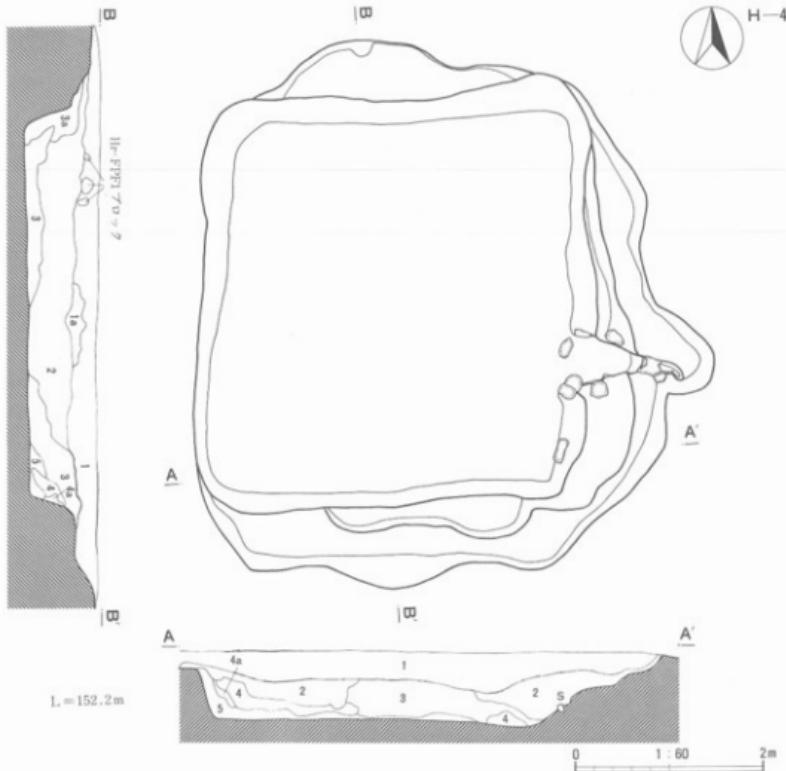


Fig. 17 平安時代の住居址（3）



H-4号住居址

- 1 層 オリーブ褐色粗砂層 粘性あり、締り良い。
- 1 a層 明黄褐色粗砂・細砂層 粘性ややあり、締り良い。
- 2 層 褐色粗砂層 粘性あり、締り良い。
- 3 層 暗褐色粗砂層 粘性あり、締り良い。
- 3 a層 黄褐色粗砂層 粘性ややあり、締りやや良い。
- 4 层 明黄褐色粗砂層 粘性ややあり、締りない。
- 4 a層 黑褐色粗砂層 粘性あり、締りややある。
- 5 層 オリーブ褐色粗砂層 粘性あり、締りない。

H-4号住居址 電

- 1 層 にじい黄褐色粗砂・細砂層 粘性あり、締り良い。
- 2 層 にじい黄褐色粗砂・細砂層 粘性ややあり。
- 3 層 黑褐色粗砂・細砂層 粘性あり、締りやや良い。

H-5号住居址

- 1 層 暗褐色粗砂・細砂層 粘性弱い。締りやや良い。耕作土。
- 2 層 暗褐色粗砂・細砂層 粘性ややあり、締り良い。
- 3 層 にじい黄褐色粗砂・細砂層 粘性弱い。
- 3 a層 にじい黄褐色粗砂・細砂層 粘性ややあり。
- 4 層 にじい黄褐色粗砂・細砂層 粘性ややあり。
- 5 層 暗褐色粗砂・細砂層 粘性あり、締り良い。
- 5 a層 暗褐色粗砂・細砂層 粘性あり、締り良い。
- 6 層 にじい黄褐色粗砂・細砂層 Hr-FPF1を60%含む。
- 6 a層 黄褐色粗砂層 II層のブロック粒子90%を占める。
- 6 b層 暗褐色微砂層 IV層が主体を占める。
- 6 c層 暗オリーブ褐色粗砂・粗砂層 IV層60%、II層20%含む。
- 6 d層 オリーブ褐色粗砂・粗砂層 IV層60%、III層20%含む。
- 6 e層 黒褐色細砂・粗砂層 IV・II層が大半を占める。
- 7 層 にじい黄褐色粗砂層 Hr-FPF1のブロックを70%含む。
- 7 a層 暗赤褐色粗砂・細砂層 地下ブロック60%含む。
- 8 層 暗褐色粗砂・微砂層 III・IV層を各40%含む。

Fig. 18 平安時代の住居址（4）

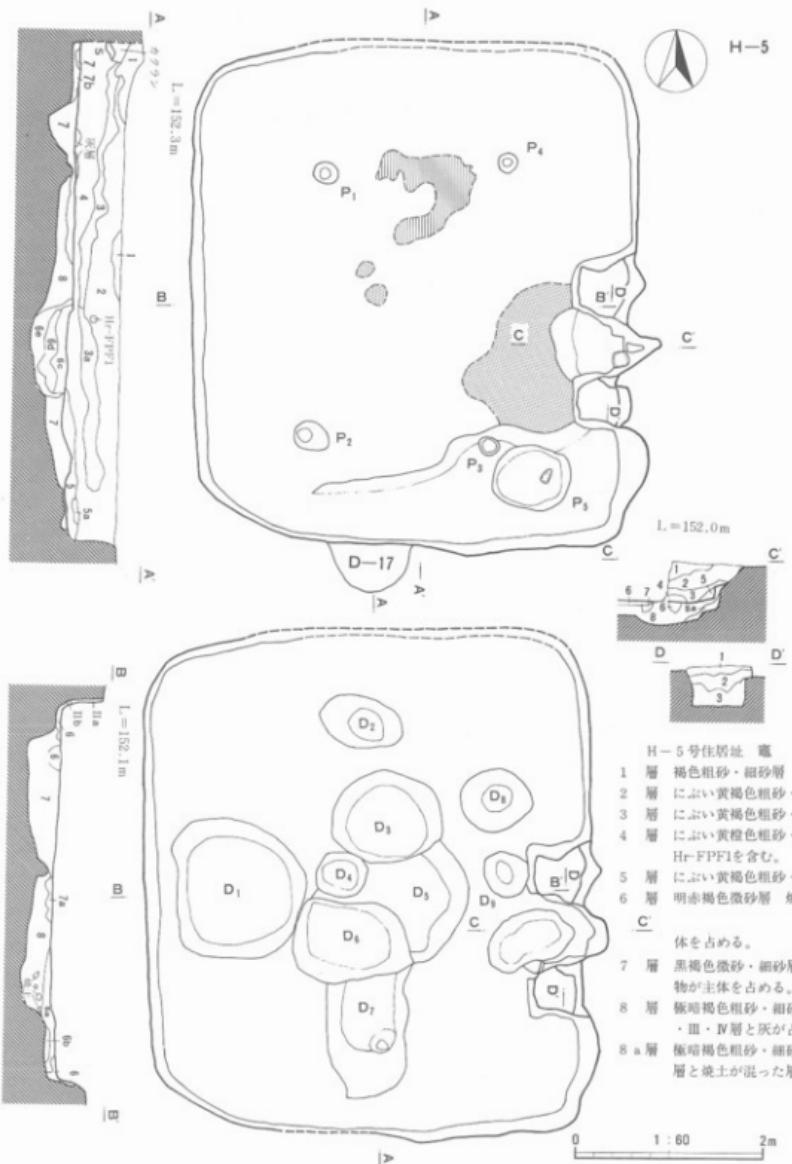


Fig. 19 平安時代の住居址（5）

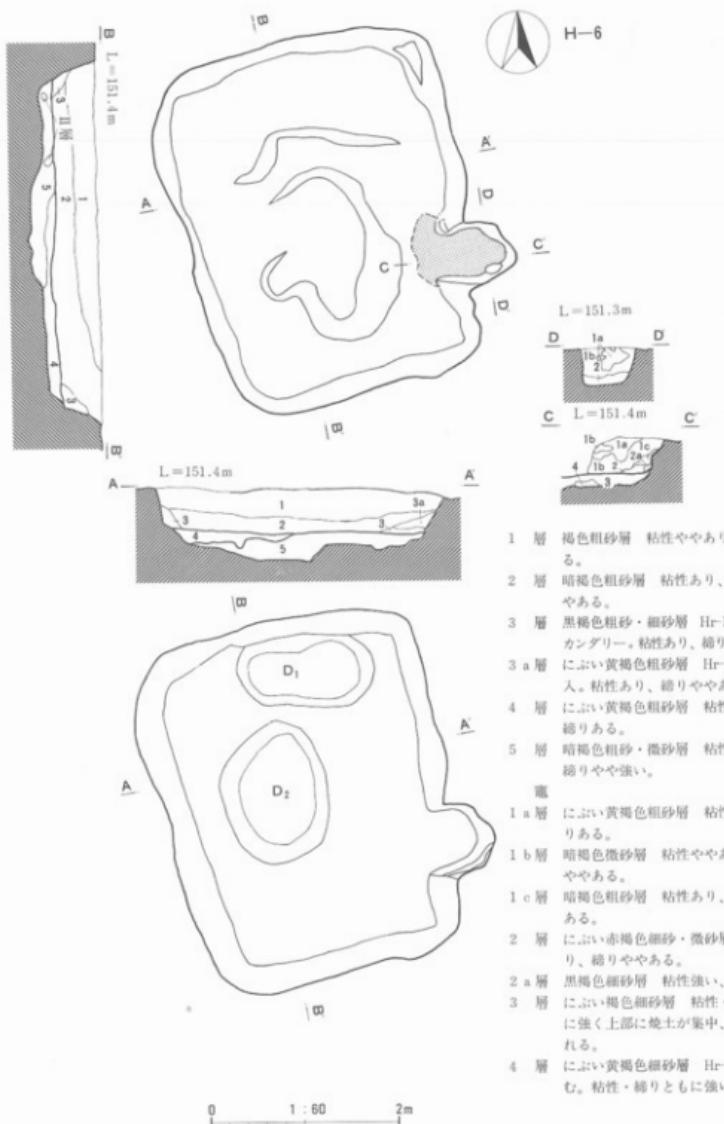


Fig. 20 平安時代の住居址(6)

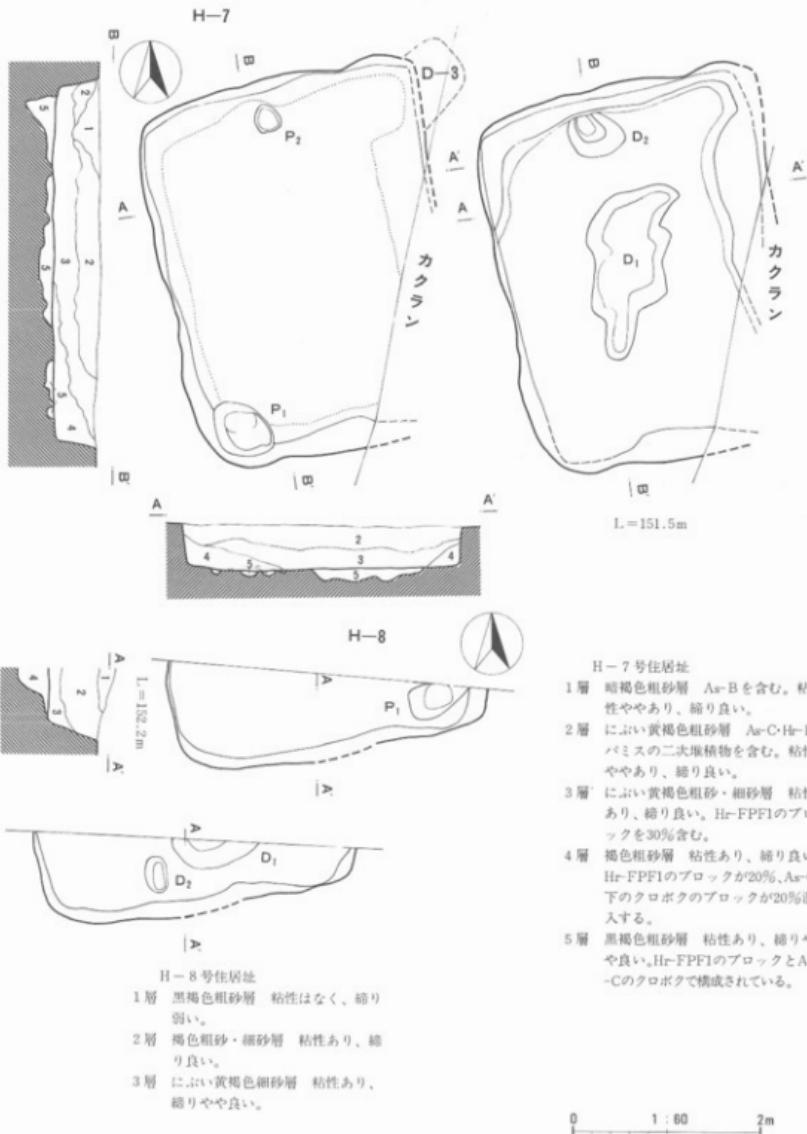


Fig. 21 平安時代の住居址（7）

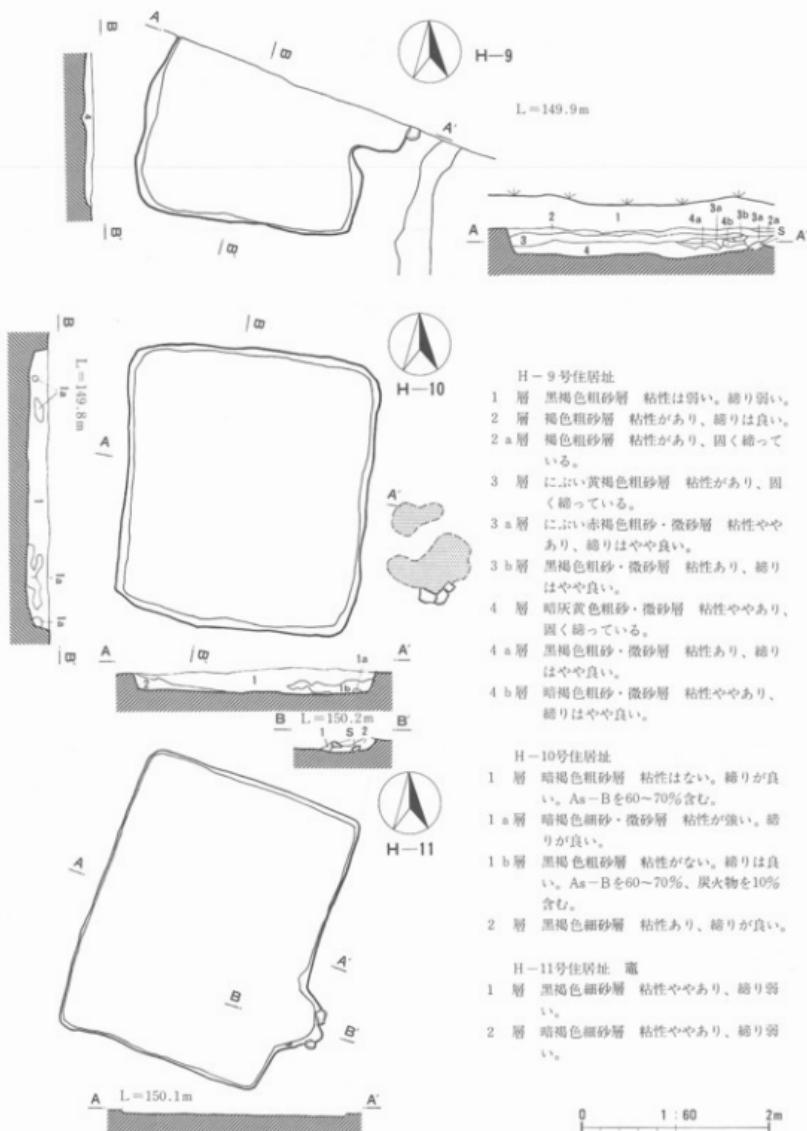


Fig. 22 平安時代の住居址(8)

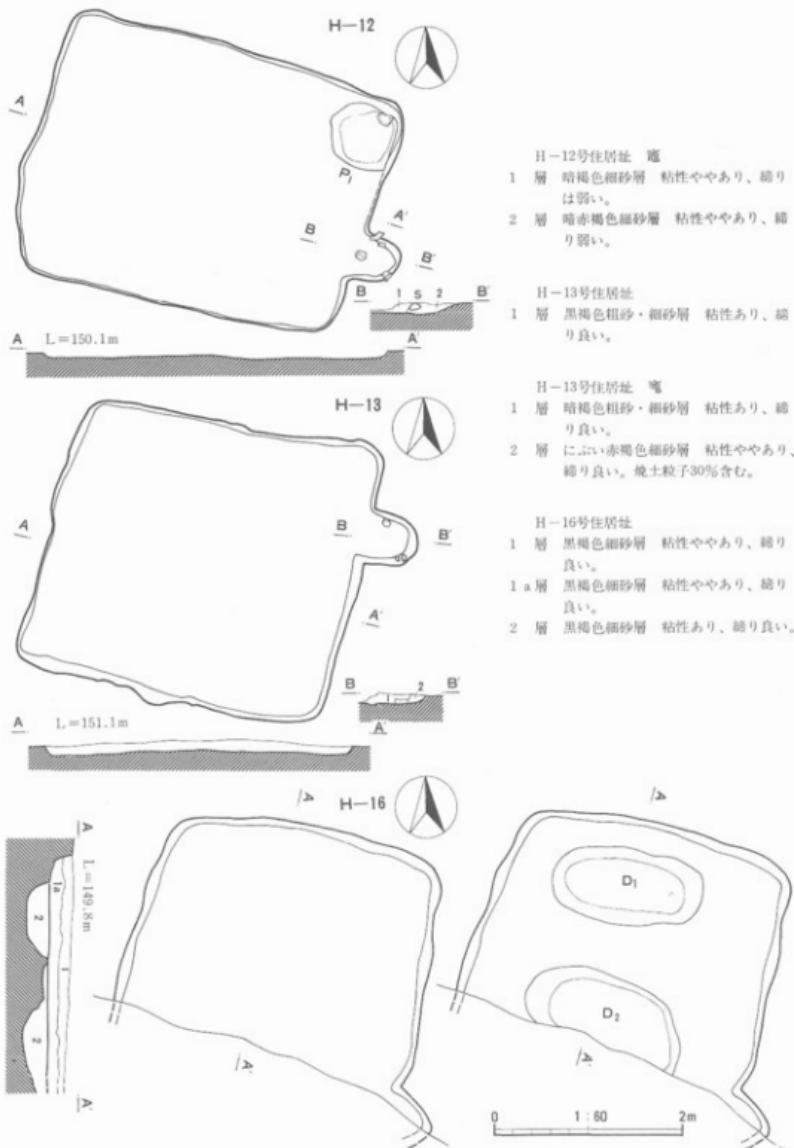


Fig. 23 平安時代の住居址（9）

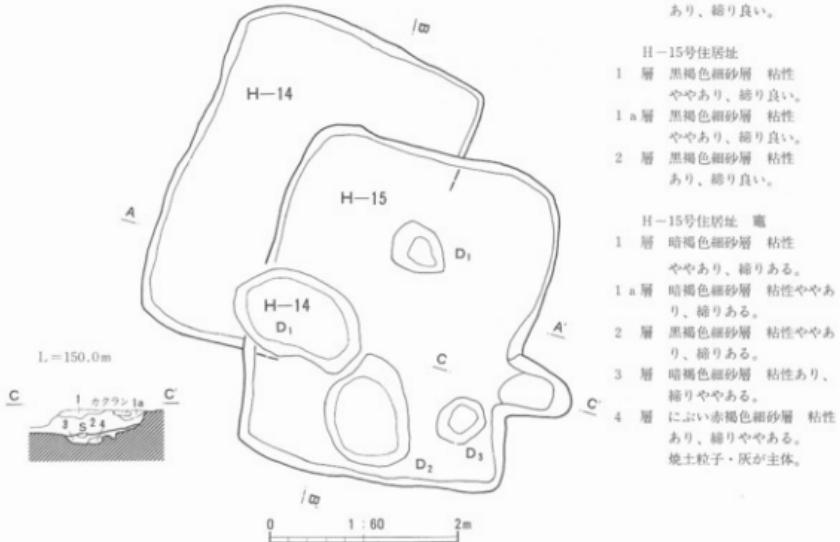
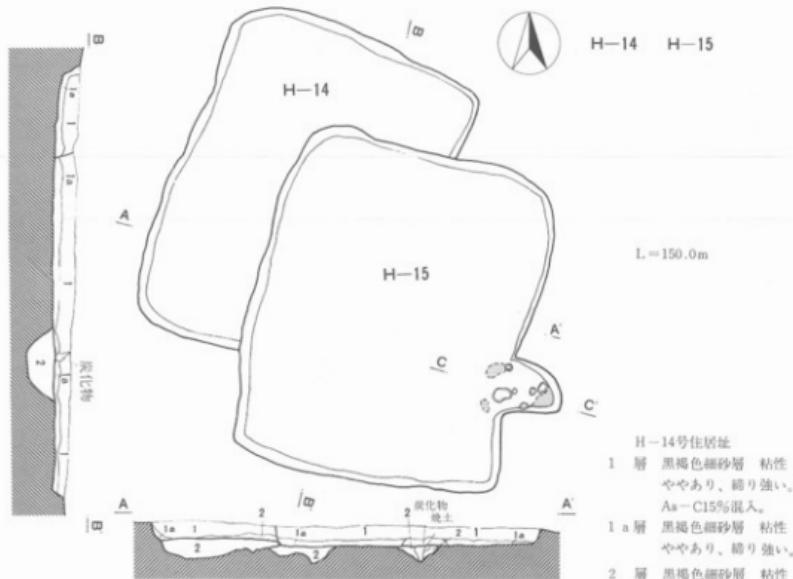
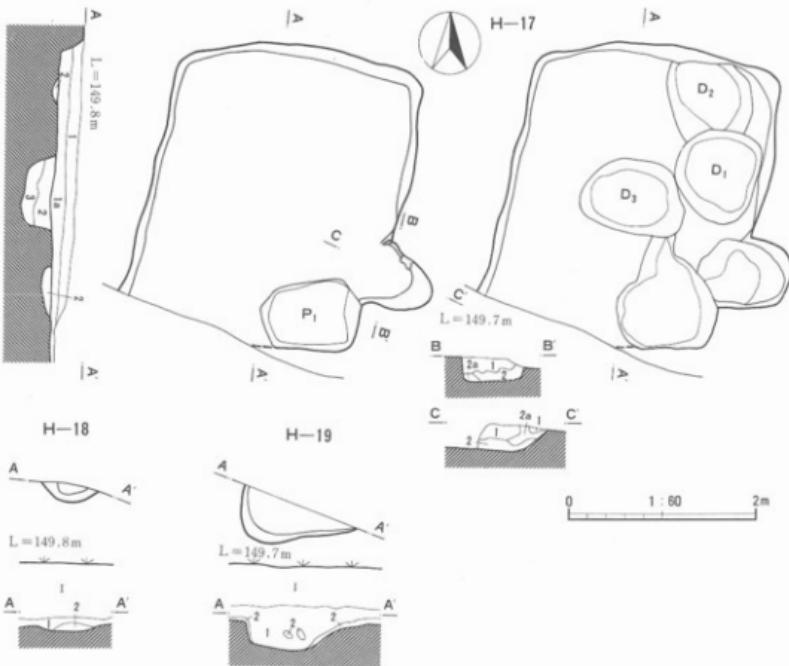


Fig. 24 平安時代の住居址 (10)



H-17号住居址

- 1 層 黒褐色細砂層 粘性ややあり、繊りが良い。As-C
10%を含む。
- 1 a 層 黒褐色細砂層 粘性ややあり、繊りが良い。
- 2 層 黒褐色細砂層 粘性あり、繊りが良い。
- 3 層 黒褐色細砂層 粘性あり、繊りが良い。

H-17号住居址 蔓

- 1 層 黒褐色細砂層 粘性ややあり、繊り良い。
- 2 層 赤褐色細砂層 粘性あり、繊りやや良い。焼土が全体を占める。
- 2 a 層 暗褐色細砂層 粘性あり、繊りやや良い。焼土が60~70%を占める。

H-18号住居址

- 1 層 黒褐色粗砂・微砂層 粘性強い。圓く締っている。
- 2 層 暗褐色粗砂・微砂層 粘性あり、繊りは良い。

H-19号住居址

- 1 層 暗褐色細砂層 粘性ややあり、繊りやや良い。
- 2 層 黒褐色細砂層 粘性強い。圓く締っている。

H-20号住居址

- 1 層 暗褐色細砂層 粘性ややあり、繊り弱い。
- 1 a 層 黒褐色細砂 As-Cを含む。粘性あり、繊り弱い。
- 1 b 層 黄褐色細砂層 Hr-FAを含む。粘性あり、繊り弱い。
- 2 層 暗褐色細砂層 粘性あり、繊りは弱い。ローム土を主体とする。
- 3 層 暗褐色細砂層 粘性ややあり、繊りは弱い。

H-20号住居址 蔓

- 1 層 黒褐色細砂層 粘性ややあり、繊りは弱い。
- 2 層 暗褐色細砂層 粘性ややあり、繊りは弱い。
- 3 層 暗褐色細砂層 粘性ややあり、繊りは弱い。

Fig. 25 平安時代の住居址 (11)

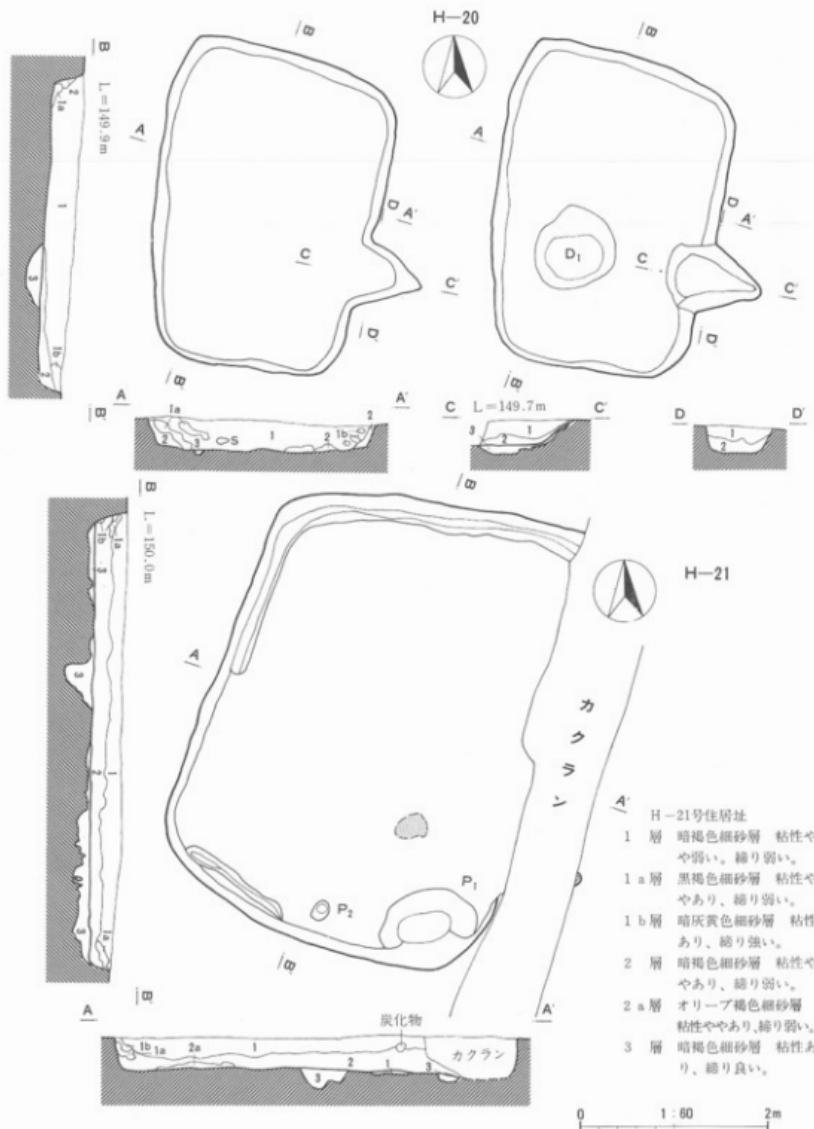


Fig. 26 平安時代の住居址 (12)

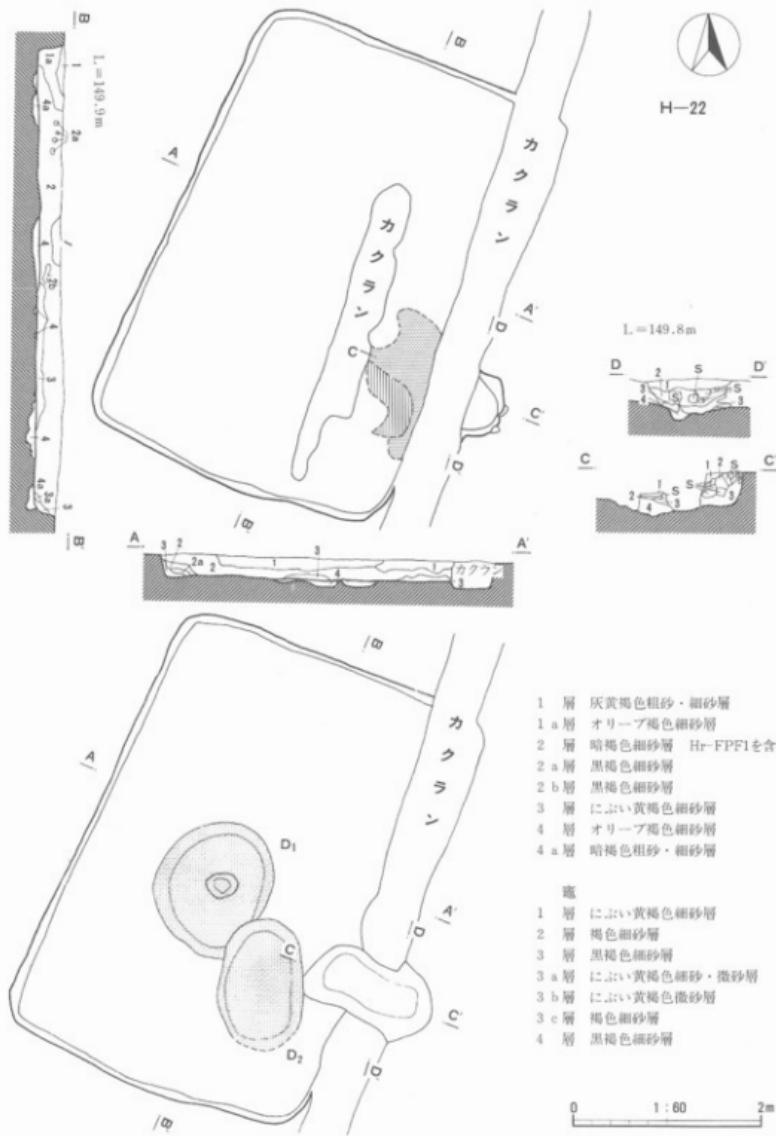
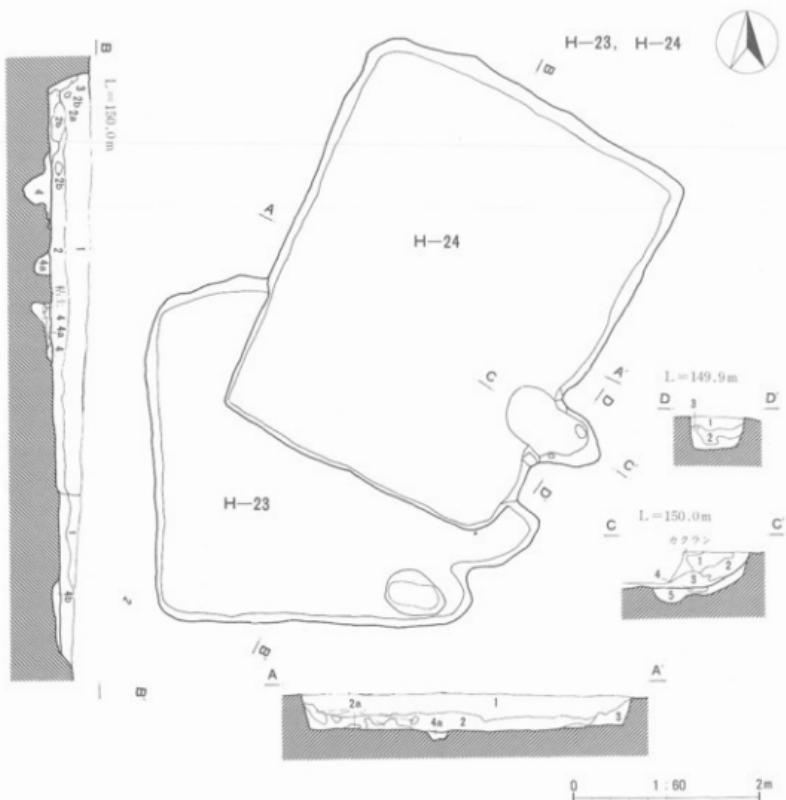


Fig. 27 平安時代の住居址 (13)



H-23号住居址

- 1 層 暗褐色細砂層 粘性ややあり、縮り良い。
- 2 層 にじい黄褐色細砂層 粘性あり、縮りやや良い。
- 4 b 層 オリーブ褐色細砂層 粘性ややあり、縮り弱い。

H-24号住居址

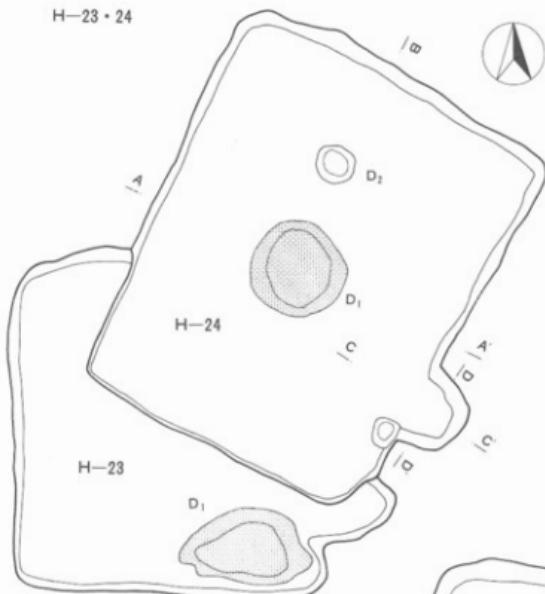
- 1 層 暗褐色細砂層 粘性ややあり、縮り良い。
 - 2 層 にじい黄褐色細砂層 粘性あり、縮りやや良い。
 - 2 a 層 黒褐色細砂層 粘性ややあり、縮りやや良い。
 - 2 b 層 オリーブ褐色細砂層 粘性ややあり、縮り良い。
 - 3 層 暗褐色細砂層 粘性あり、縮り良い。
 - 4 層 オリーブ褐色細砂層 粘性ややあり、縮り強い。
- ローム土を50%含む。

4 a 層 暗褐色細砂・微砂層 粘性弱い。固く縮っている。
ローム土が大半を占めている。

- H-24号住居址：竈
- 1 層 褐色細砂層 粘性あり、縮り良い。
 - 2 層 にじい赤褐色細砂層 灰土を60%含む。粘性あり、縮り良い。
 - 3 層 にじい黄褐色細砂層 粘性あり、縮りやや良い。灰を30~40%を占める。
 - 4 層 赤褐色細砂・微砂層 粘性わずかにあり、縮りやや良い。灰土80%を占める。
 - 5 層 褐色細砂・微砂層 粘性ややあり、縮りやや良い。質層粒子が90%を占める。

Fig. 28 平安時代の住居址 (14)

H-23・24



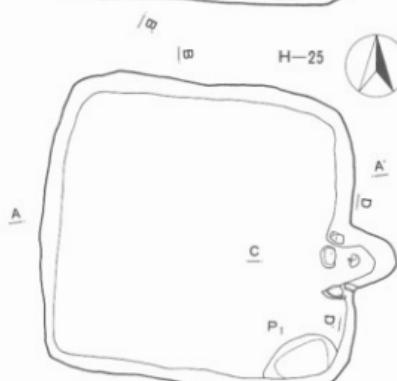
H-25号住居址

- 1 層 灰黄褐色細砂層
- 2 層 にさび黄褐色細砂層 Hr-Faを20%含む。
- 2 a 層 オリーブ褐色細砂層
- 3 層 オリーブ褐色細砂層 Hr-Faを15%含む。
- 3 層 黒褐色細砂層 As-Cが70%を占める。
- 4 層 喷褐色粗砂・細砂層 As-Cを25%含む。

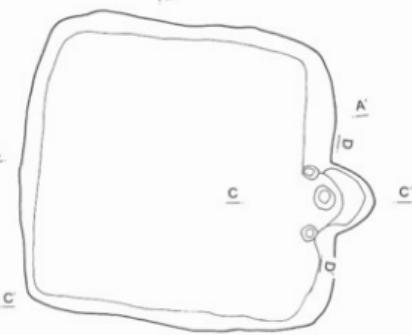
H-25号住居址 穴

- 1 層 褐色細砂層
- 1 a 層 褐色細砂層
- 2 层 褐色細砂層
- 2 a 层 黑褐色細砂層
- 3 层 褐色細砂層 粘性あり。焼き40%含む。
- 4 层 喷赤褐色細砂層 粘性が強い。焼き20%含む。
- 5 层 喷褐色粗砂・細砂層 As-C軽石粒を25%含む。

H-25



|φ



0 1:60 2m

Fig. 29 平安時代の住居址 (15)

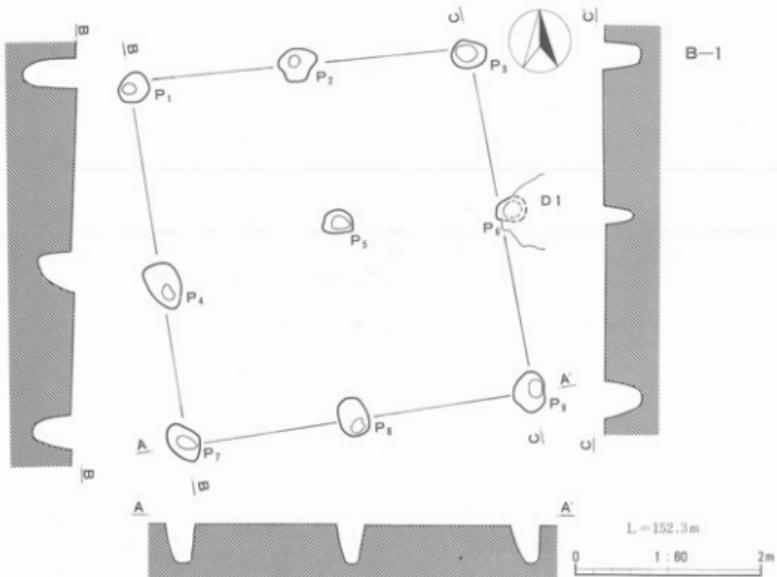


Fig. 30 平安時代の堀立柱建物址

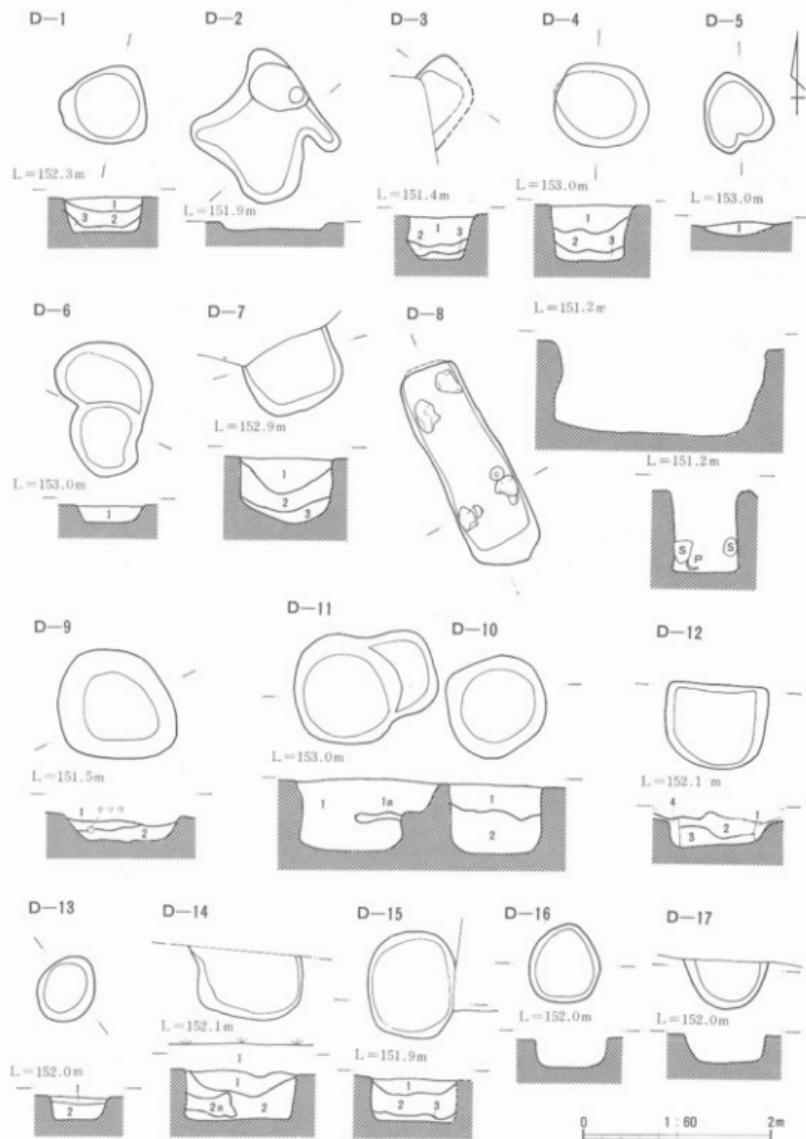


Fig. 31 平安時代の土坑(1)

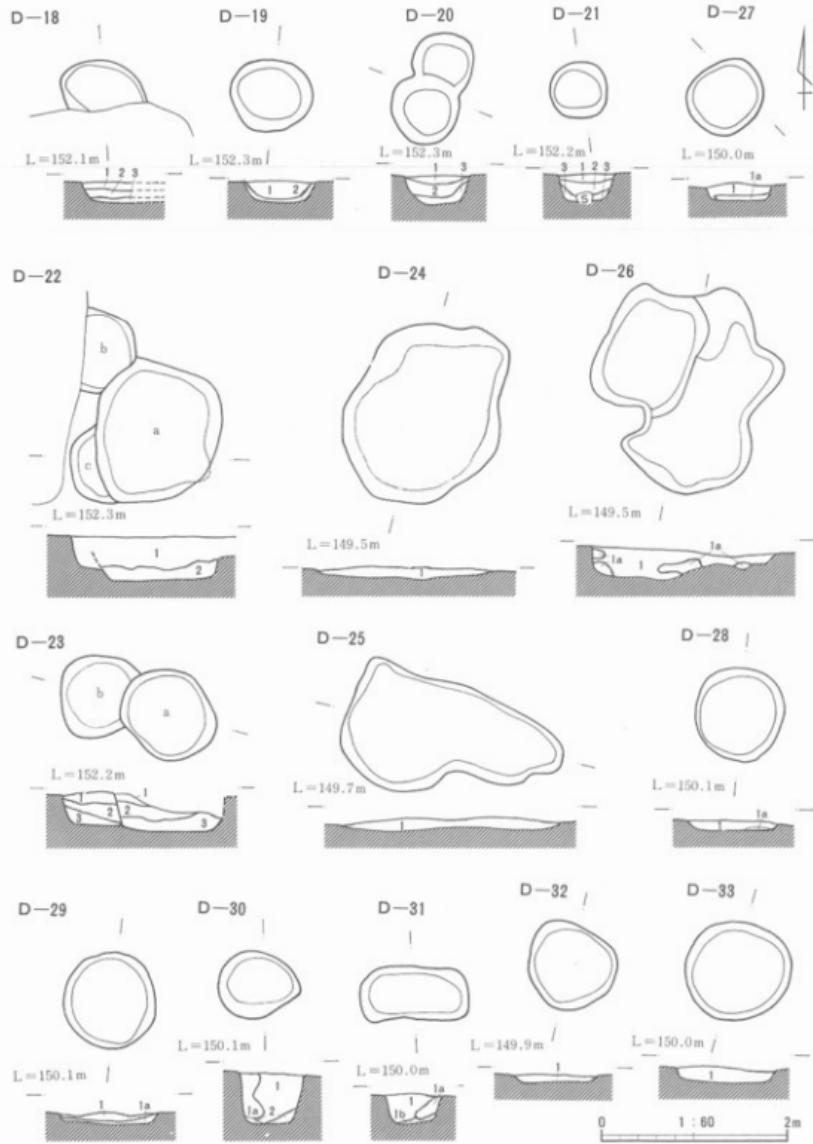
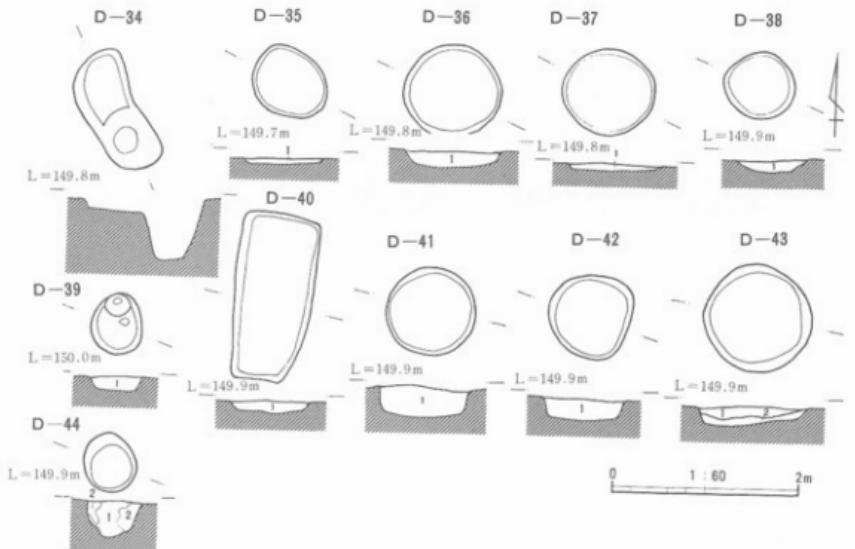
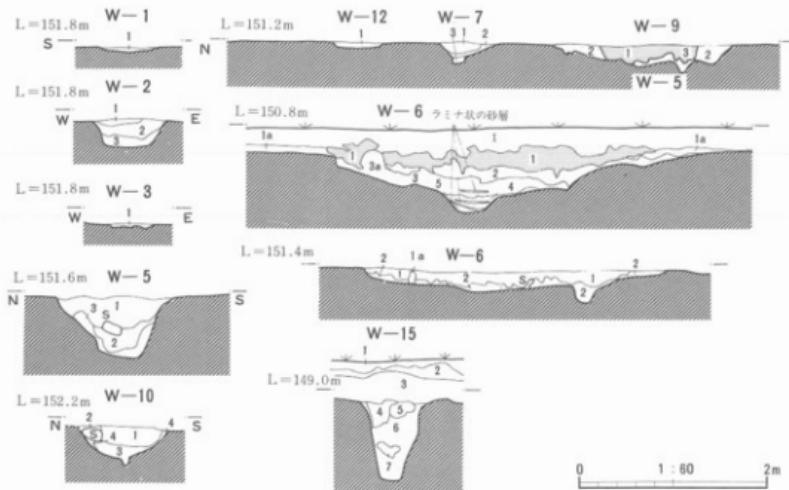


Fig. 32 平安時代の土坑(2)



D-22号土坑	D-28号土坑	D-36号土坑
1 層 褐色粗砂・細砂層	1 層 黒褐色粗砂層 As-B 80%含む。	1 层 黑褐色粗砂層 As-B 80%含む。
2 層 褐色粗砂層 Hr-FPF1含む。	1 a 層 黒褐色粗砂層 As-B 15%含む。	
D-23号 a 土坑	D-29号土坑	D-37号土坑
1 層 褐色粗砂・細砂層 Hr-FPF1含む。	1 層 黒褐色粗砂層 As-B 80%含む。	1 层 黑褐色粗砂層 As-B 80%含む。
2 層 にぶい黄褐色土層 Hr-FPF1含む。	1 a 層 黒褐色粗砂層 As-B 15%含む。	D-38号土坑
3 層 暗褐色粗砂層 Hr-FPF1含む。	2 層 暗褐色粗砂層 ローム土40%含む。	1 层 黑褐色粗砂層 As-B 80%含む。
D-23号 b 土坑	D-30号土坑	D-39号土坑
1 層 にぶい黄褐色粗砂層	1 層 黒褐色粗砂層 粘性あり。	1 层 黑褐色粗砂層 As-B 80%含む。
2 層 褐色粗砂・細砂層	1 a 層 暗褐色粗砂層 粘性あり。	D-40号土坑
3 層 にぶい黄褐色粗砂・細砂層	2 層 暗褐色粗砂層 ローム土40%含む。	1 层 暗褐色粗砂層 粘性なし。
D-24号土坑	D-31号土坑	D-41号土坑
1 層 黑褐色粗砂層 粘性あり。	1 層 暗オリーブ褐色粗砂層	1 层 暗褐色粗砂層 As-B 20%。
D-25号土坑	1 a 層 暗オリーブ褐色粗砂層 As-C 20%。	D-42号土坑
1 層 黑褐色粗砂層 粘性あり。	1 b 層 オリーブ褐色粗砂層 ローム土20%。 1 层 暗褐色粗砂層	1 层 暗褐色粗砂層
D-26号土坑	D-32号土坑	D-43号土坑
1 層 黑褐色粗砂層 粘性あり。	1 层 黑褐色粗砂層 As-C 15%含む。	1 层 暗褐色粗砂層 As-Bを含む。
1 a 层 黑褐色粗砂層 粘性あり。 白色粘土ブロックが含まれる。	D-33号土坑	D-44号土坑
D-27号土坑	1 层 黑褐色粗砂層 As-C 15%含む。	1 层 暗褐色粗砂層
1 层 黑褐色細砂層 繰り良い。	D-35号土坑	2 層 褐色粗砂層 As-Bを含む。
1 a 层 黑褐色粗砂層 繰り良い。	1 层 黑褐色粗砂層 粘性なし。	

Fig. 33 平安時代の土坑(3)



W-1号溝

1層 暗褐色粗砂層 粘性はなく、硬く縮っている。

W-2号溝

1層 暗褐色粗砂層 粘性はなく、硬く縮っている。

2層 暗褐色粗砂層 粘性はなく、硬く縮っている。

3層 に述べた黄褐色粗砂層 粘性はなく、硬く縮っている。

W-3号溝

1層 暗褐色粗砂層 粘性はなく、硬く縮っている。

W-5号溝

1層 黒褐色粗砂・細砂層 粘性あり、固く縮る。

2層 黒褐色粗砂・細砂層 粘性あり、縮りやや良い。

3層 黒褐色粗砂・細砂層 粘性ややあり、縮り良い。

W-6号溝

1層 黒褐色粗砂層 As-Bが70%以上入る。

1a層 暗褐色粗砂層 As-B混入。

2層 暗褐色粗砂層 粘性あり、縮り強い。

3層 に述べた黄褐色粗砂・微砂層 ラミナ状に砂層が入る。

4層 黄褐色粗砂・微砂層 ラミナ状に砂層が入る。

5層 に述べた黄褐色粗砂・細砂層 粘性弱く、極めて固く縮る。

W-7号溝

1層 黒褐色粗砂・As-Bを40%含む。

2層 暗オリーブ褐色粗砂層 Hr-FA・FPFIが混入。

3層 暗オリーブ褐色粗砂・砾層 主体は円礫。(1~3cm大)

W-9号溝

1層 黑褐色粗砂層 As-B70%混入。フク土が主体。

W-10号溝

1層 黒褐色粗砂・細砂層 粘性弱い。縮りない。

2層 暗褐色粗砂・細砂層 粘性弱い。縮りない。

3層 暗褐色粗砂・細砂層 粘性弱い。縮りない。

4層 暗褐色粗砂・細砂層 粘性弱い。縮りない。

W-12号溝

1層 に述べた黄褐色粗砂層 As-B40%混入。

W-15号溝

1層 黄褐色粗砂層 粘性、縮りともにややある。

2層 黄褐色粗砂・細砂層 粘性あり、Hr-FPFIを含む。

3層 暗褐色粗砂層 粘性ややあり、縮り良い。

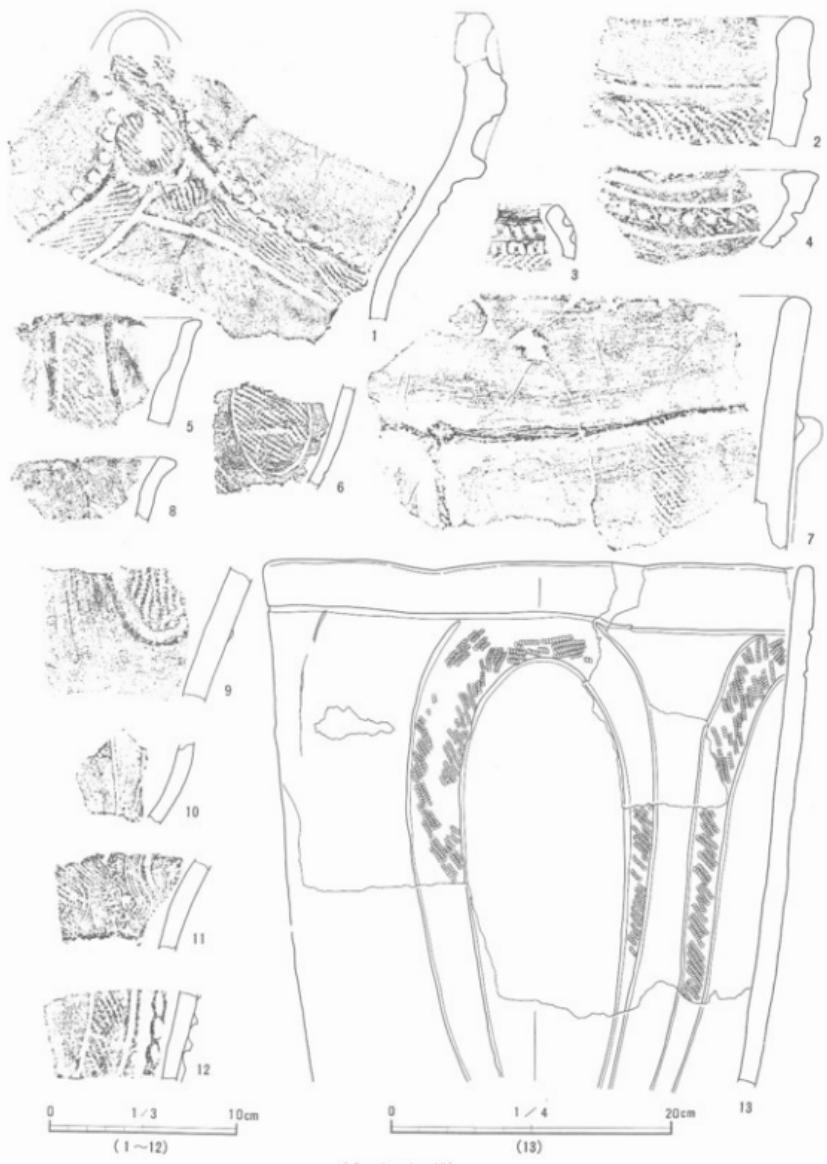
4層 黑褐色粗砂層 粘性ややあり、縮り良い。

5層 に述べた黄褐色粗砂層 縮りやや良い。

6層 黄褐色粗砂層 粘性ややあり、縮り弱い。

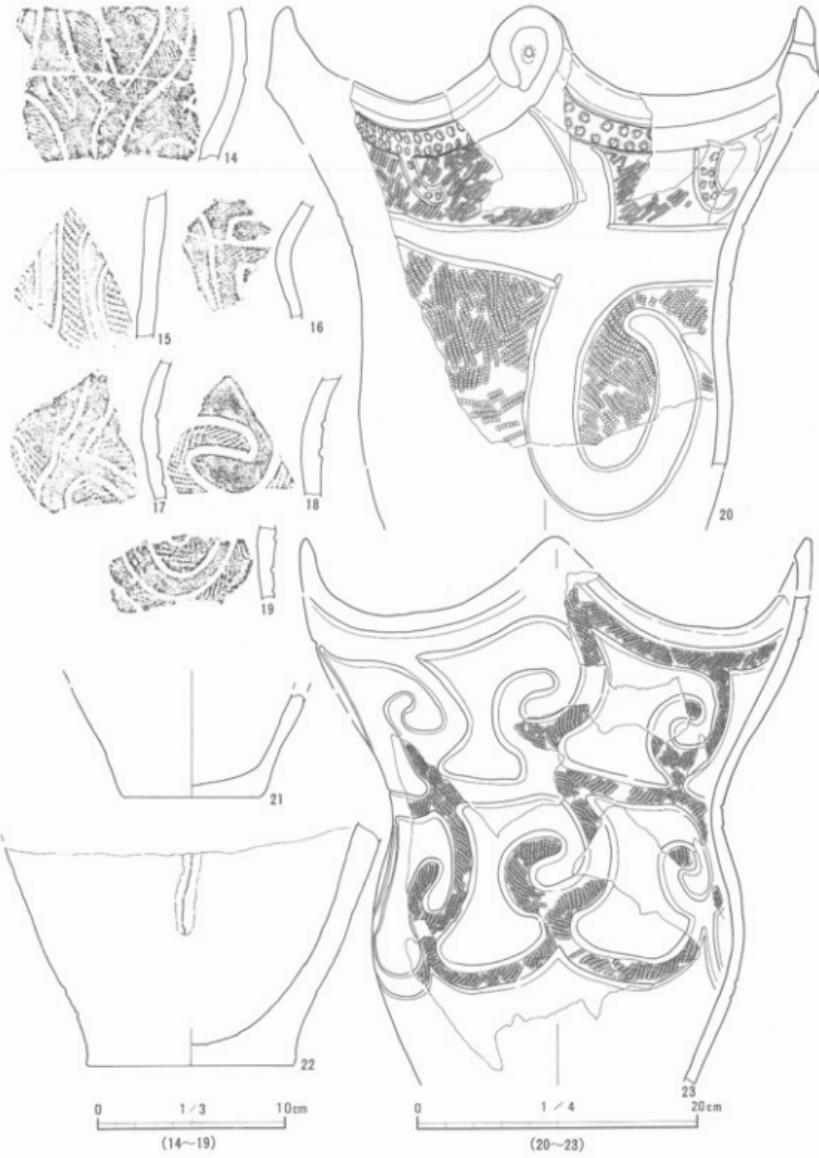
7層 暗褐色粗砂層 粘性ややあり、縮り弱い。

Fig. 34 平安時代の溝



(1 - 13)

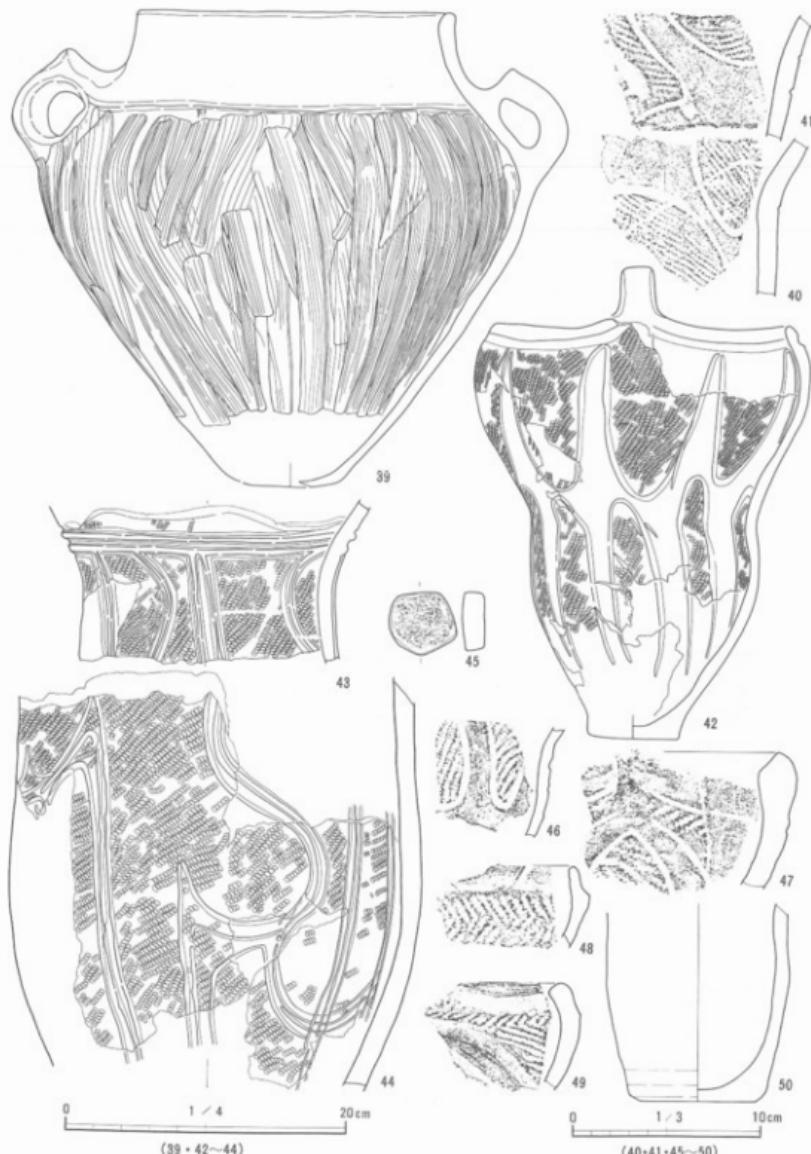
Fig. 35 縄文式土器(1)



(J - 1 ---14-23)
Fig. 36 繩文式土器(2)

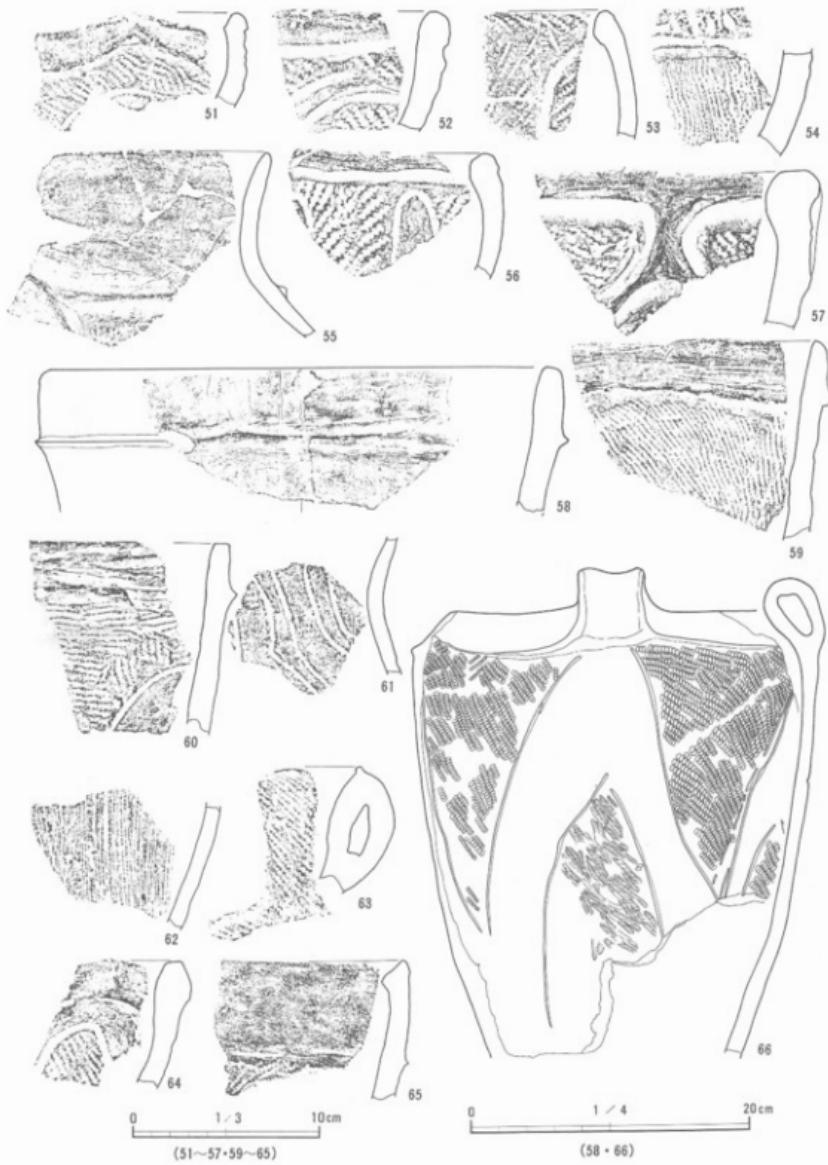


(J - 3-24-38)
Fig. 37 繩文式土器(3)



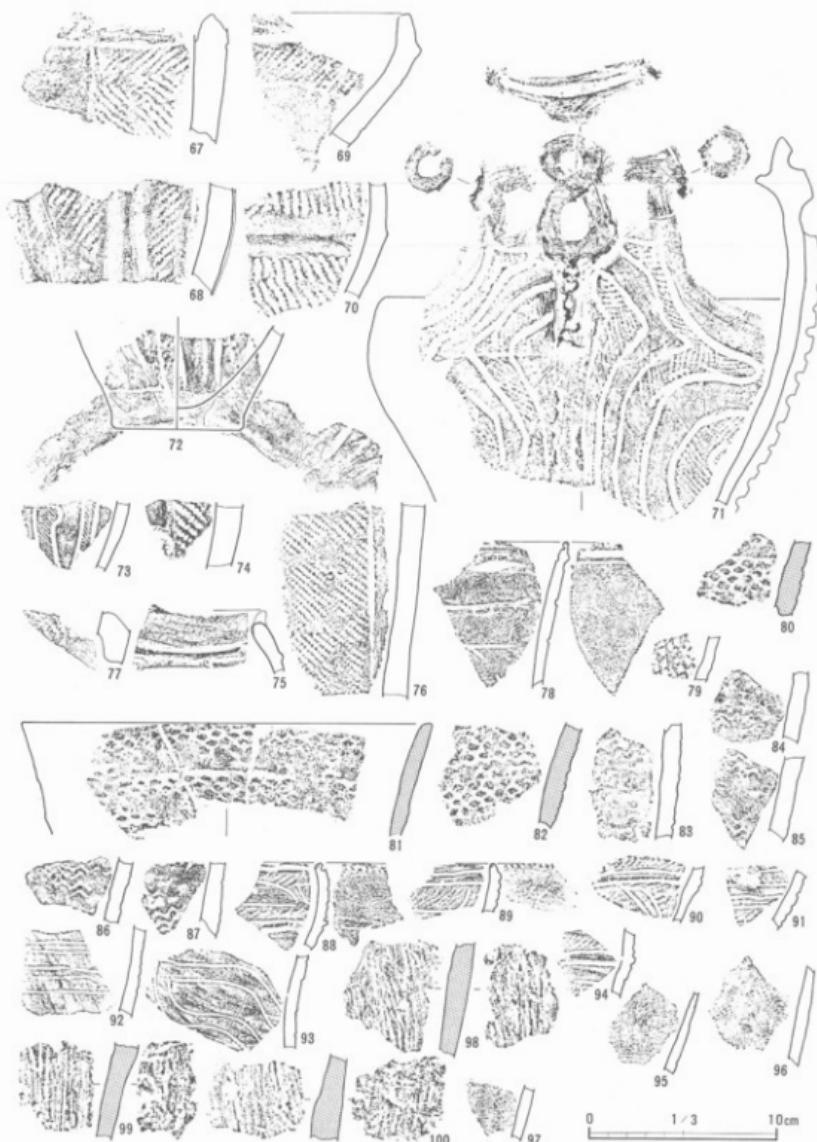
(J - 3 ... 39-42, J - 4 ... 43-44, J - 5 ... 45-50)

Fig. 38 繩文式土器(4)



(J - 5 ~ 51 ~ 55, JT - 1 ~ 56 ~ 65, JD - 1 ~ 66)

Fig. 39 繩文式土器(5)



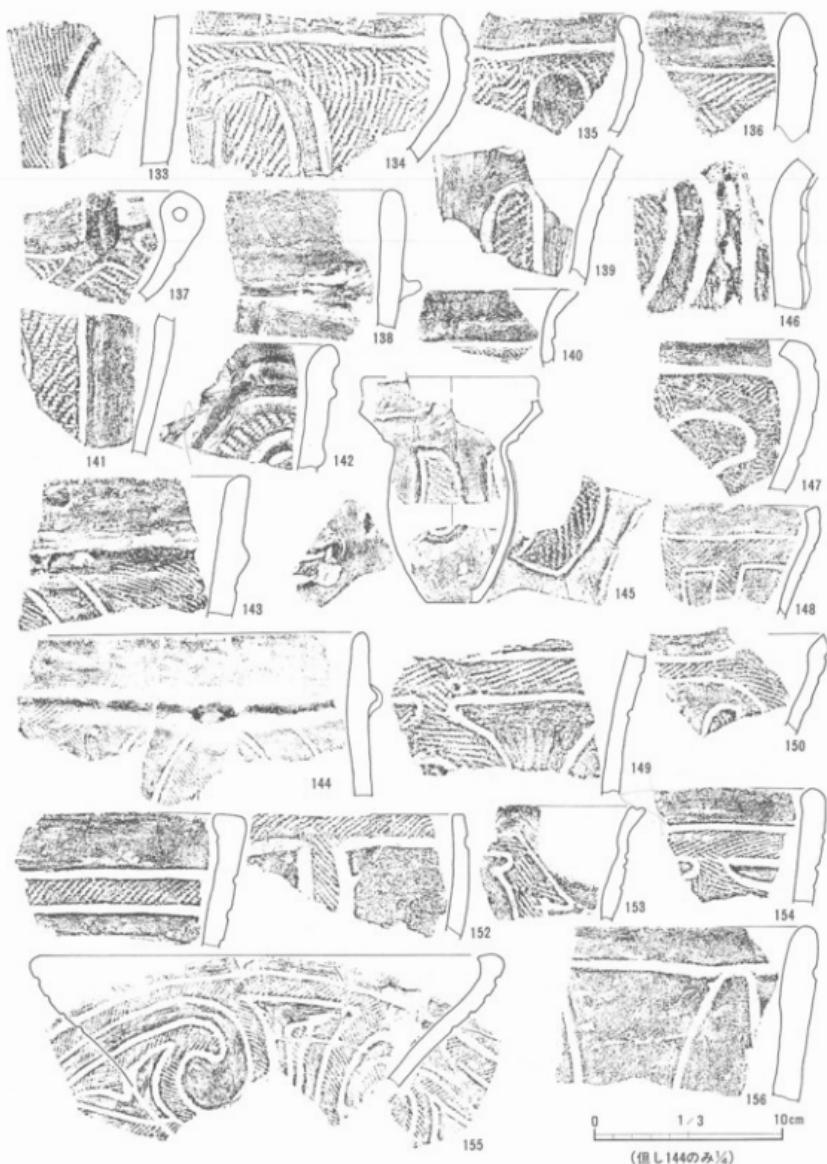
(JD-3~67, JD-4~68, JD-5~69~71, JD-6~72, JD-7~73~74, JD-8~75~76, JD-9~77, 1号烧土~78, 包含层~79~100)

Fig. 40 繩文式土器(6)



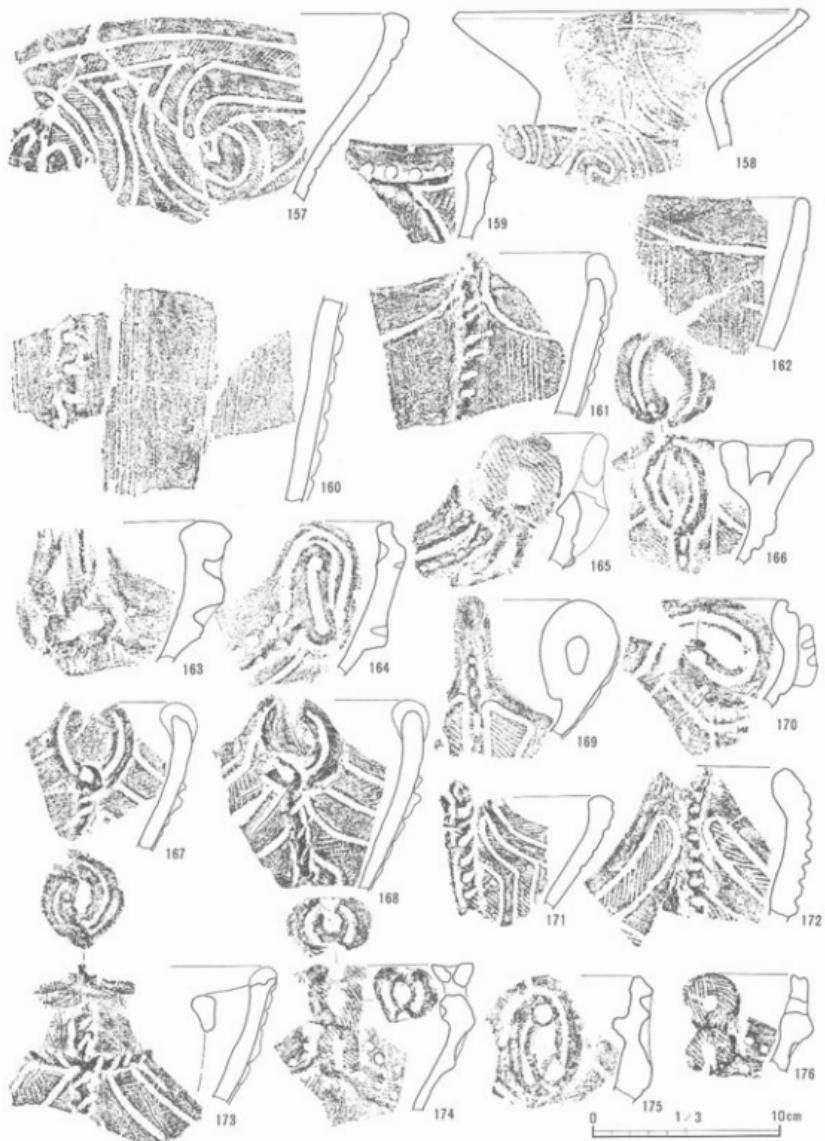
(J—3—123, 包含層—101—122, 124—132)

Fig. 41 繩文式土器(7)



(JT-1~140、包含層…133~139・141~156)

Fig. 42 繩文式土器(8)



(J - 1·JT - 1~172, 包含层...157~171·173~176)

Fig. 43 網文式土器(9)

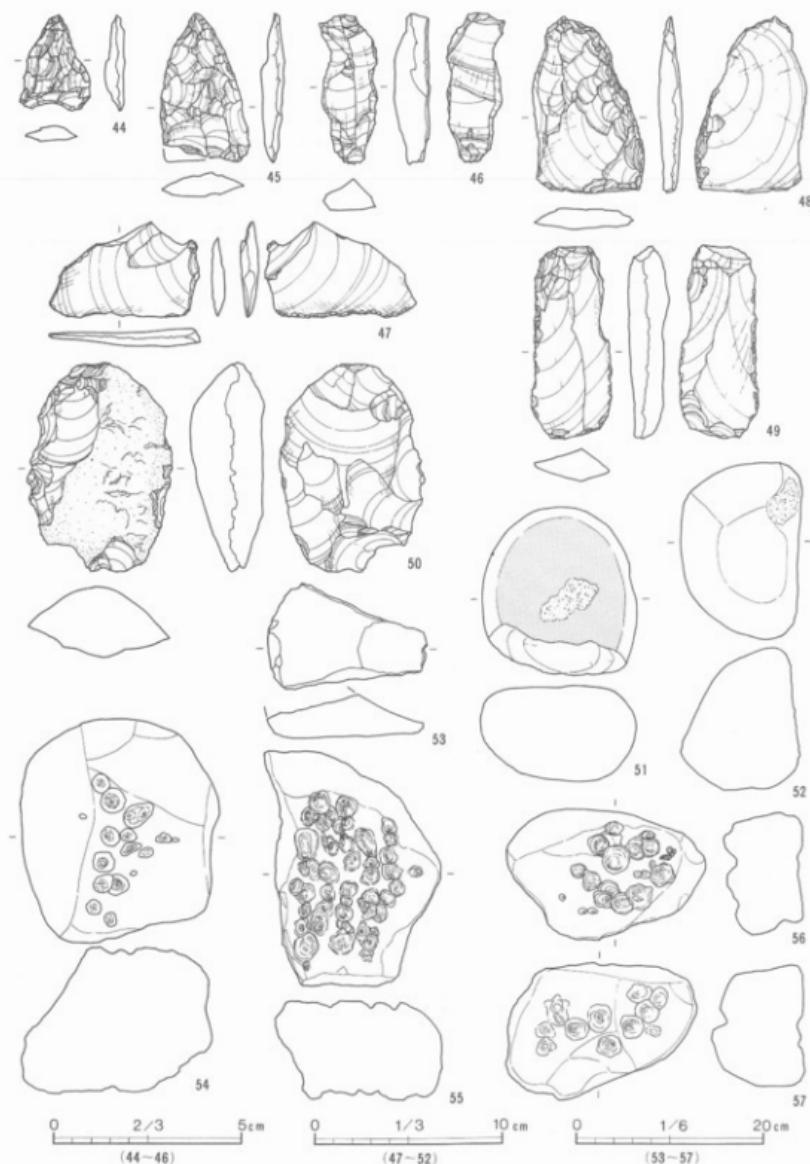


Fig. 44 繩文時代の石器(1)



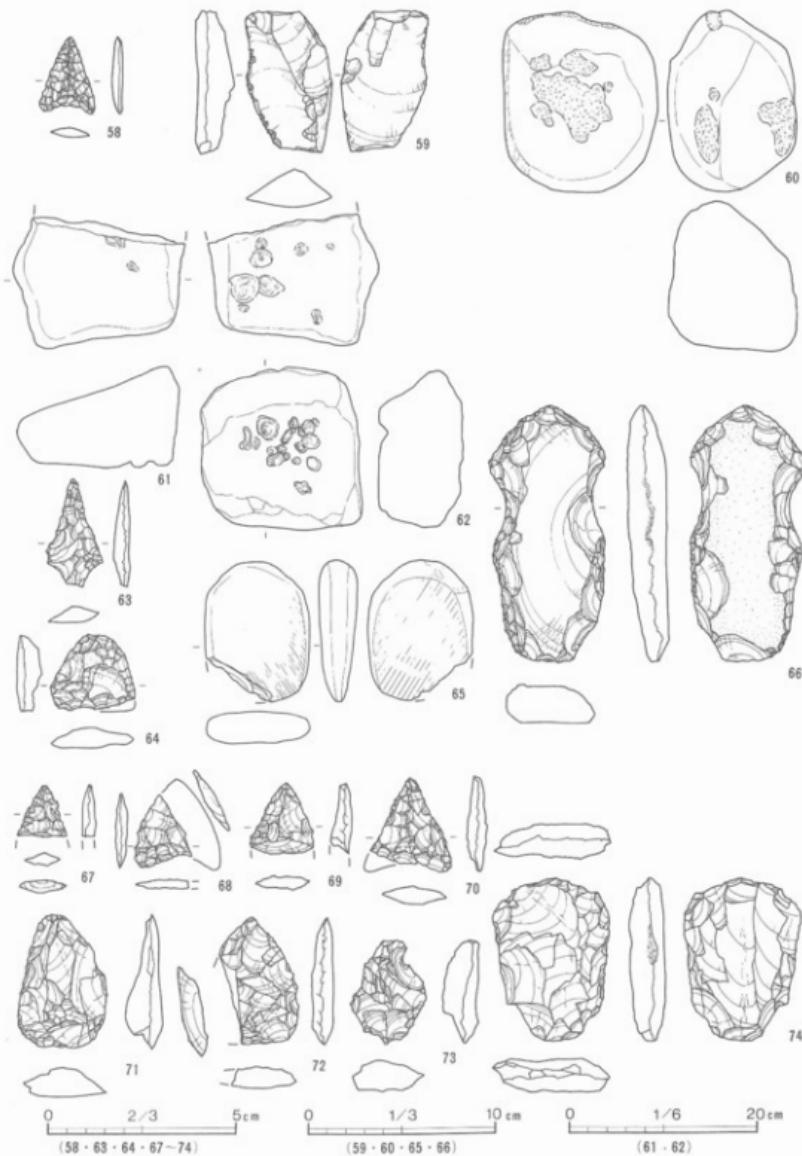
(J - 1 ⋯ 32-43)

Fig. 45 繩文時代の石器(2)



(J - 1 ... 53, J - 3 ... 44~52, 54~57)

Fig. 46 繩文時代の石器(3)



(J - 4 ... 58~62, J - 5 ... 63~66, JT - 1 ... 67~74)

Fig. 47 繩文時代の石器(4)



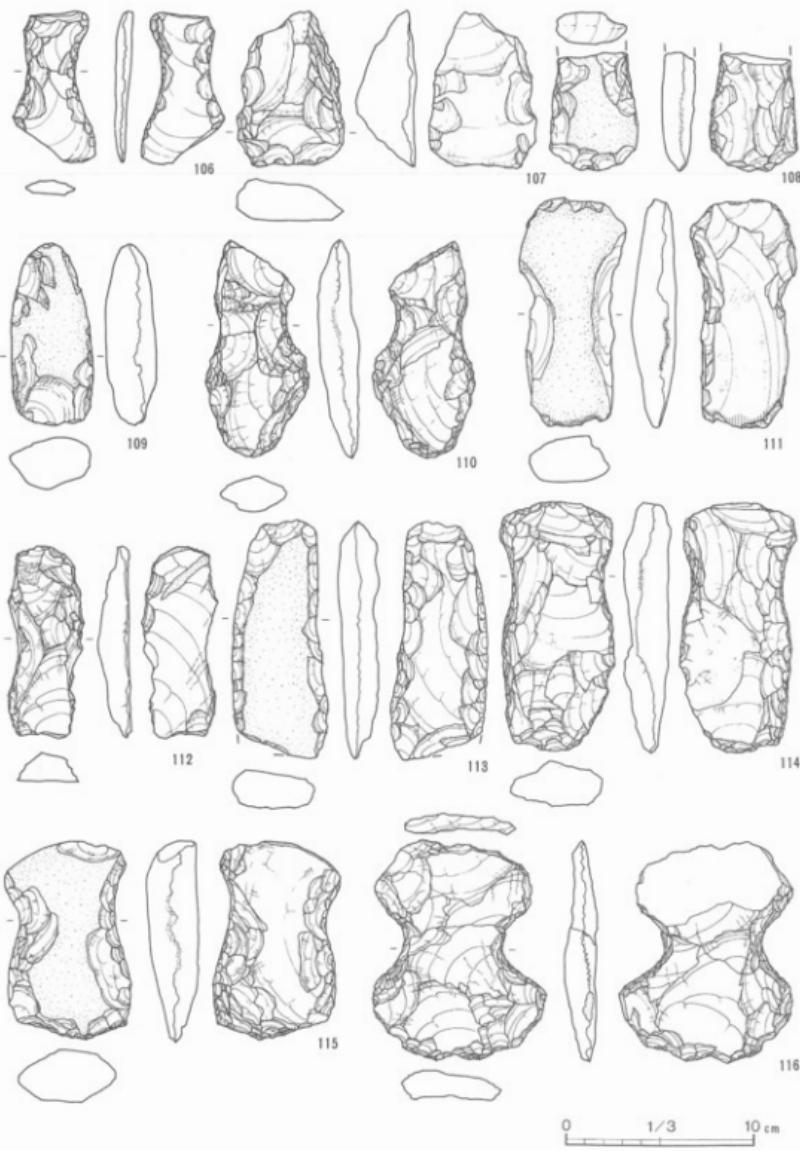
(J T - 1 ... 75-82, J D - 1 ... 83-84)

Fig. 48 繩文時代の石器(5)



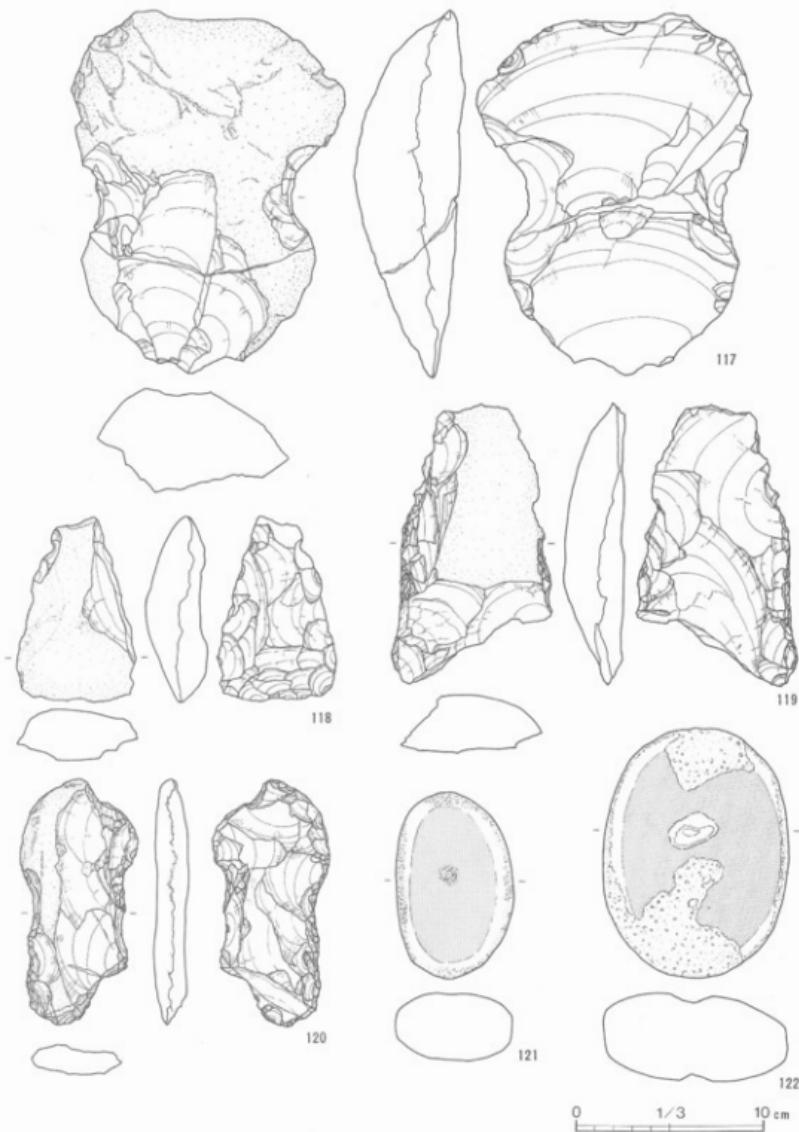
(J-4-104、包含層…85-103・105)

Fig. 49 繩文時代の石器(6)



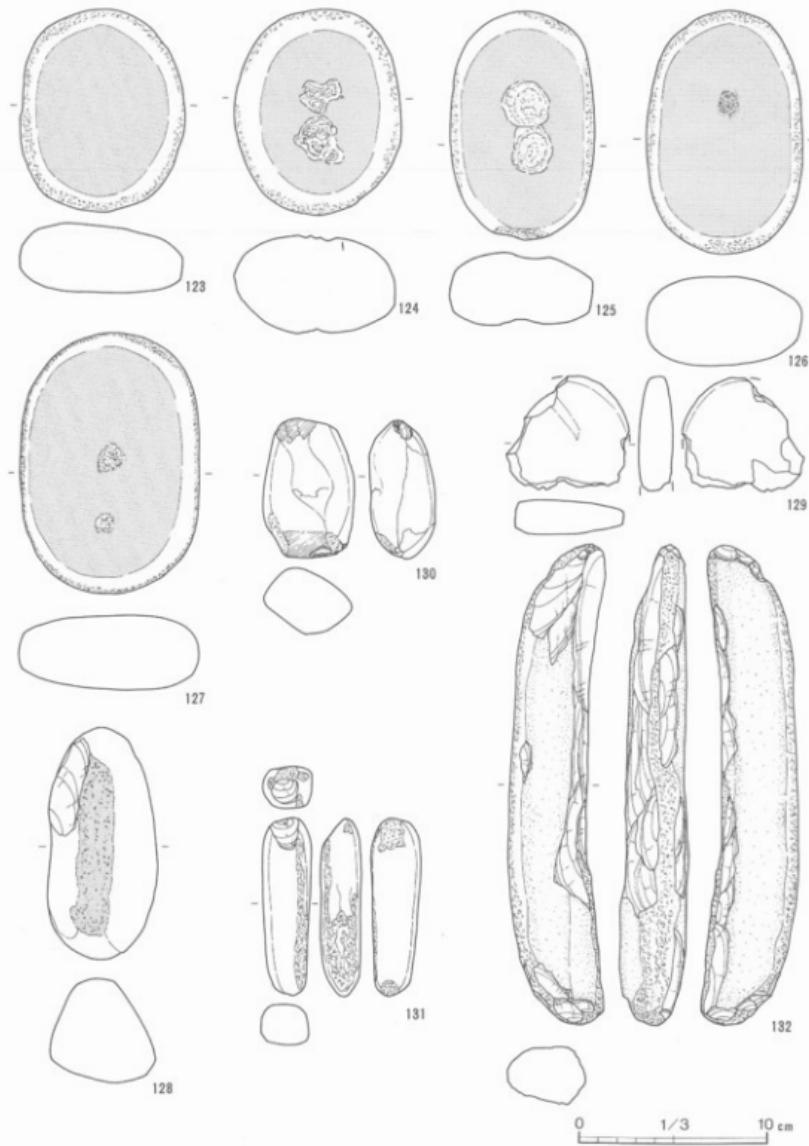
(包含層…106~116)

Fig. 50 繩文時代の石器(7)



(J-3-119、包含層-117・118・120-122)

Fig. 51 繩文時代の石器(8)



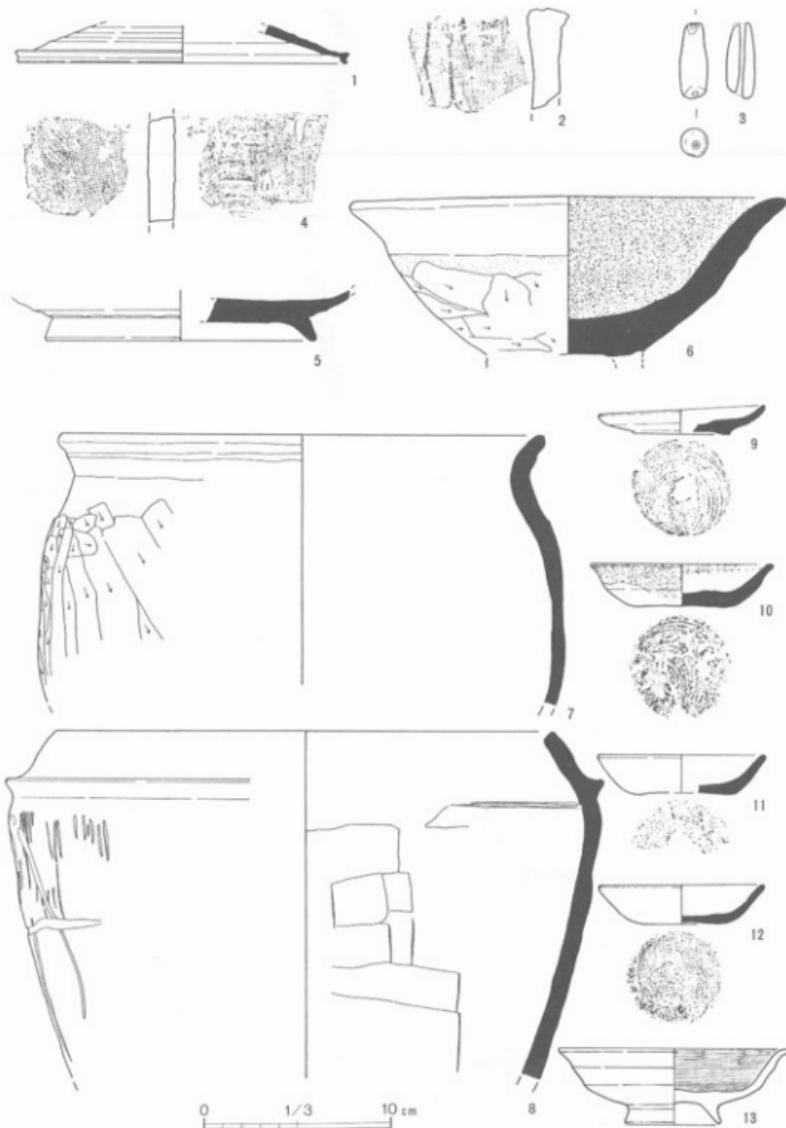
(J = 1~126, 包含層…123~125・127~132)

Fig. 52 繩文時代の石器(9)



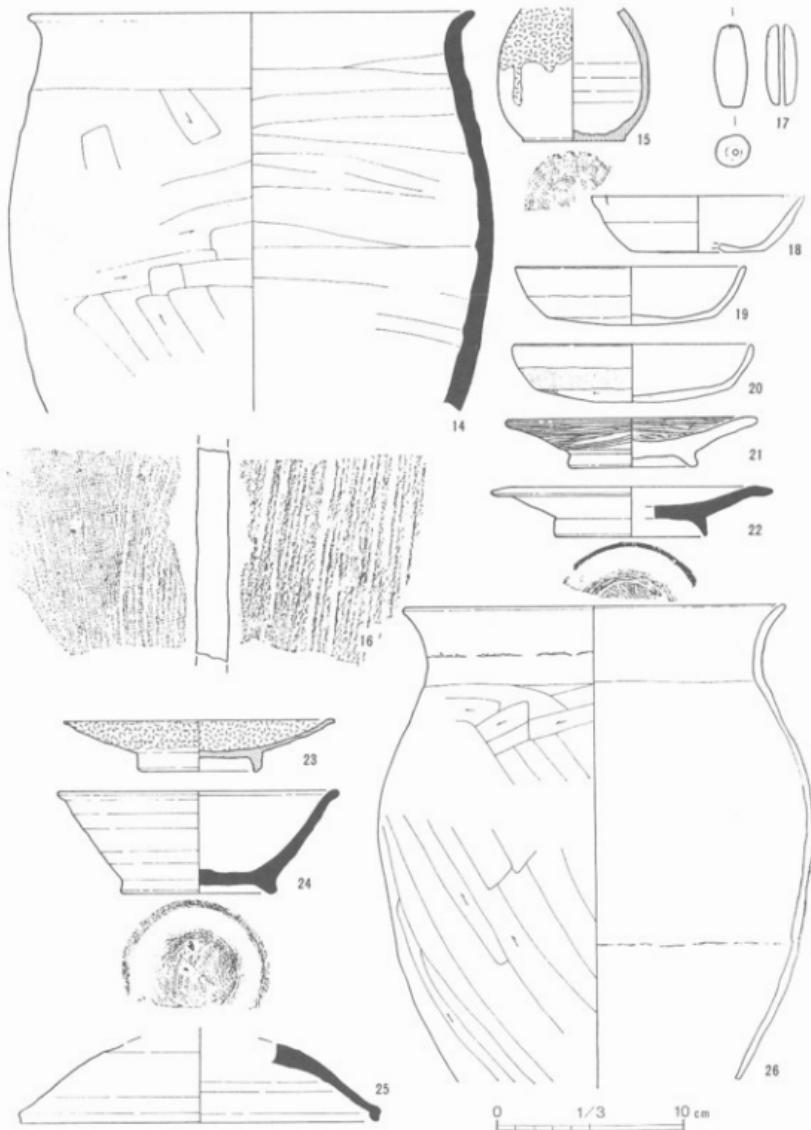
(J D - 5 … 139、包含層…133~138・140~142)

Fig. 53 繩文時代の石器(10)



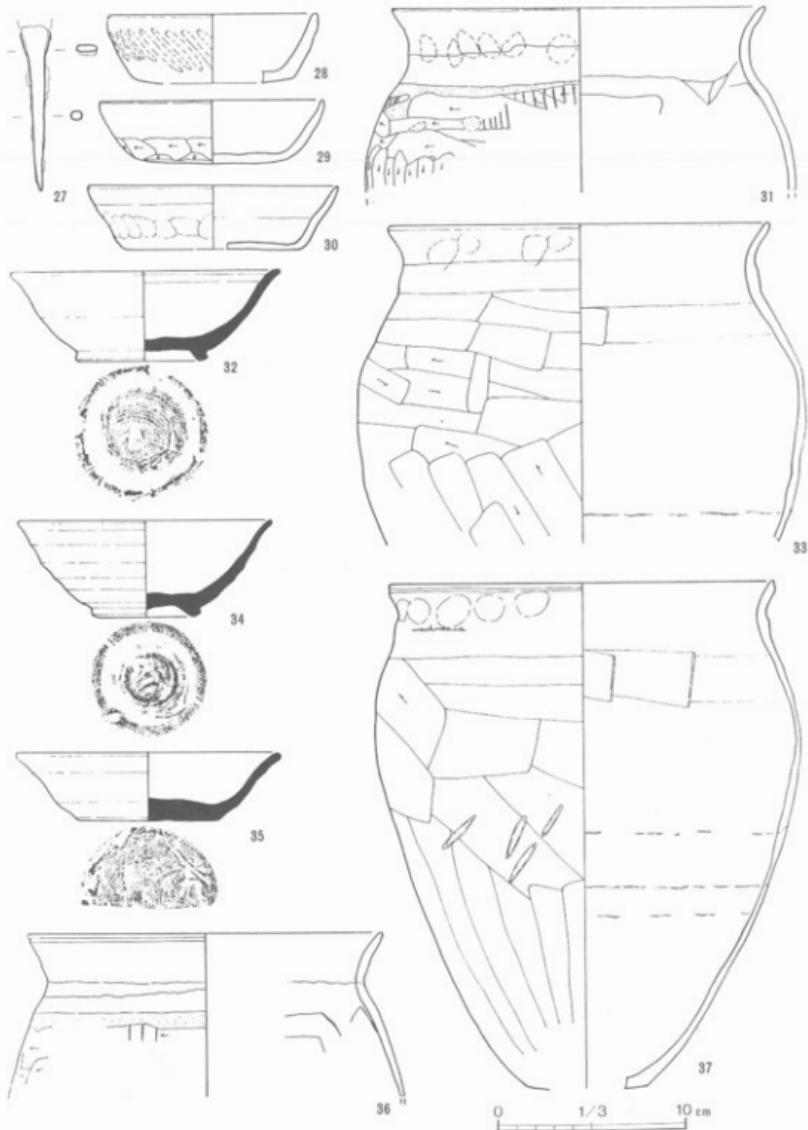
(H-1 … 1 ~ 3, H-2 … 4 ~ 8, H-3 … 9 ~ 13)

Fig. 54 平安時代の遺物 (1)

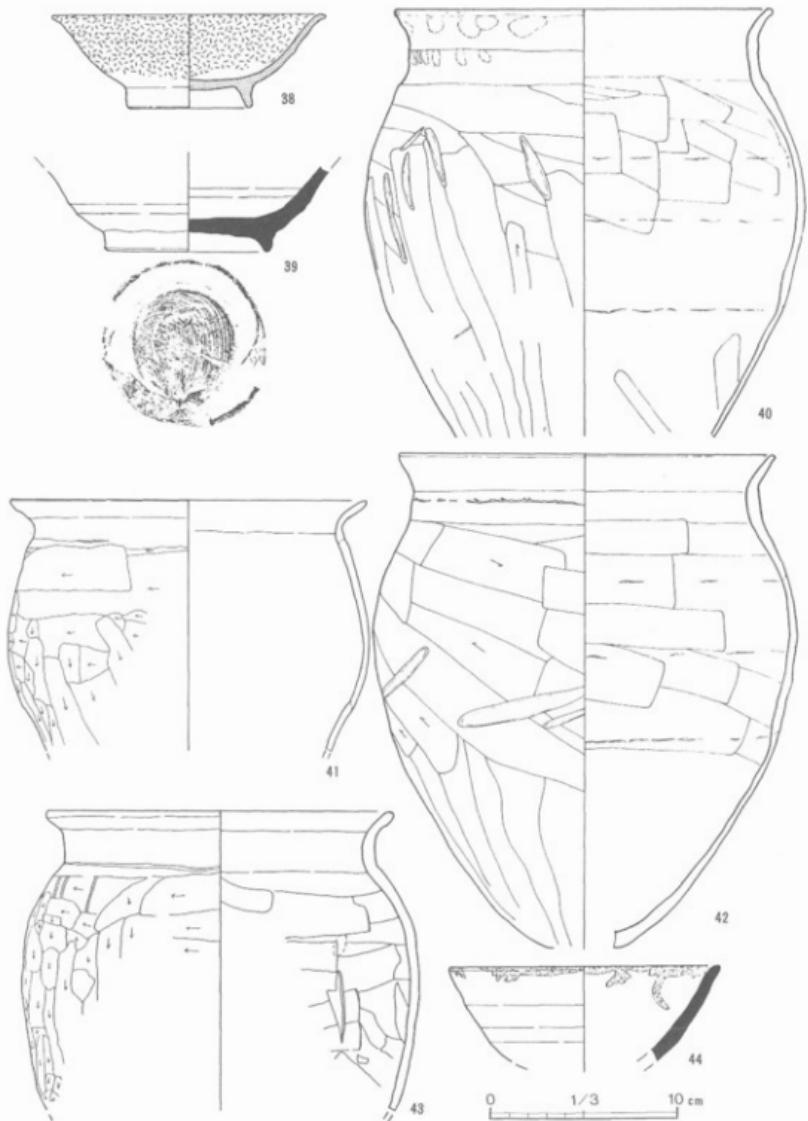


(H - 3 14-16, H - 4 17-26)

Fig. 55 平安時代の遺物 (2)

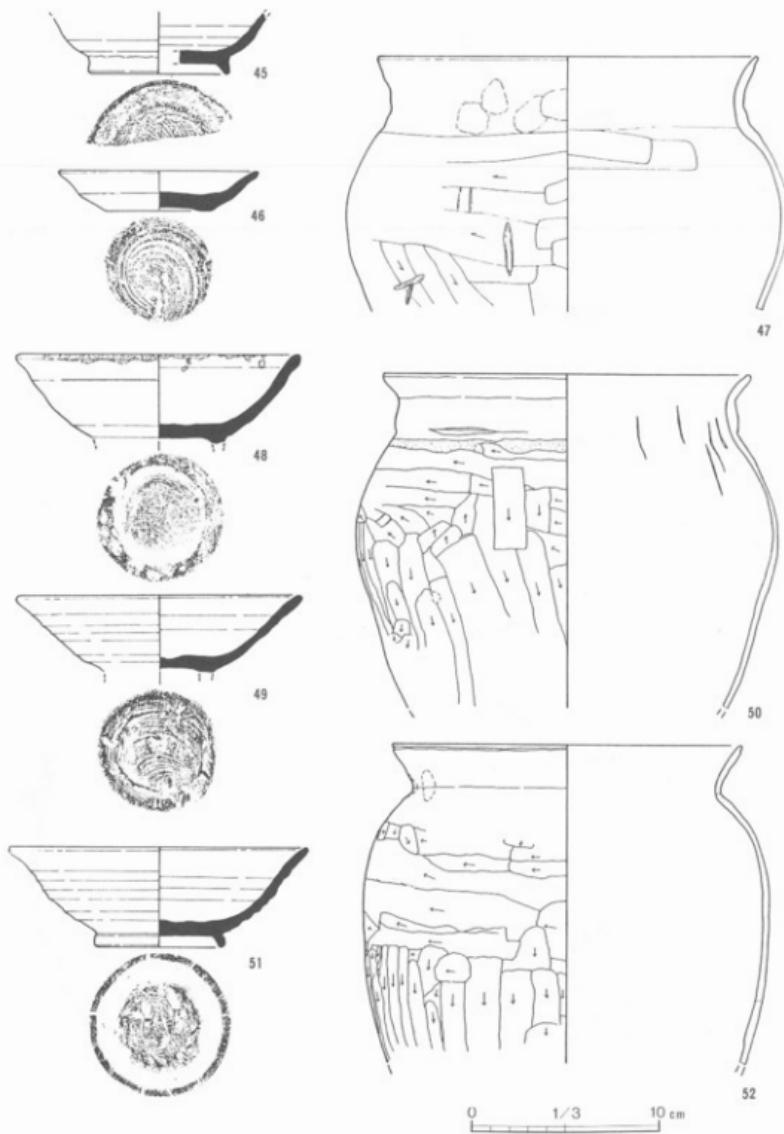


(H-5-27-37)
Fig. 56 平安時代の遺物 (3)

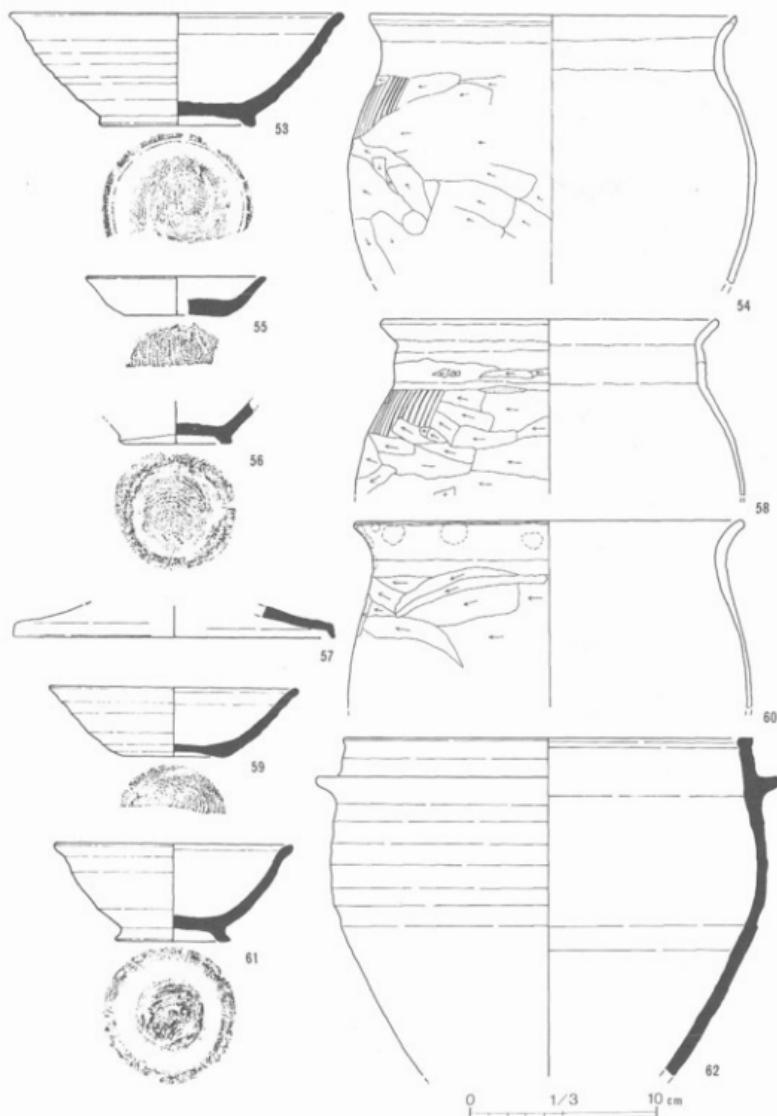


(H - 5 ⋯ 38 ⋯ 42, H - 6 ⋯ 43 ⋯ 44)

Fig. 57 平安時代の遺物 (4)

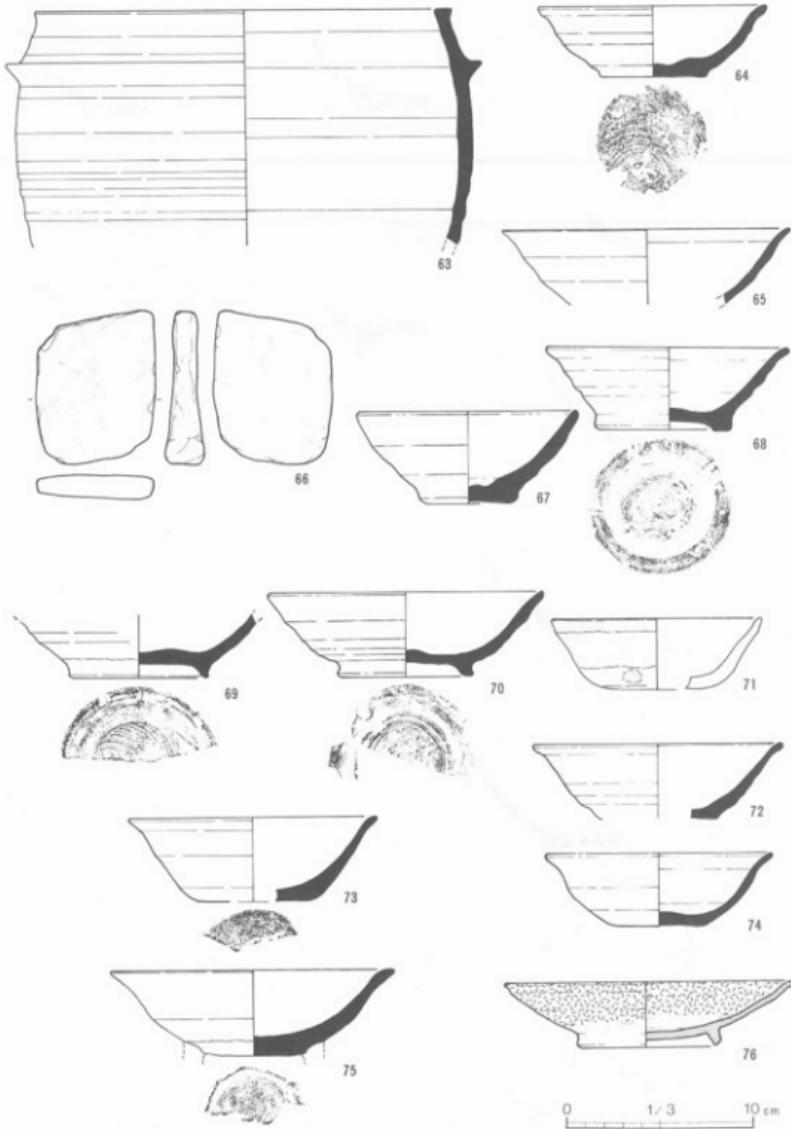


(H - 6 45~52)
Fig. 58 平安時代の遺物 (5)



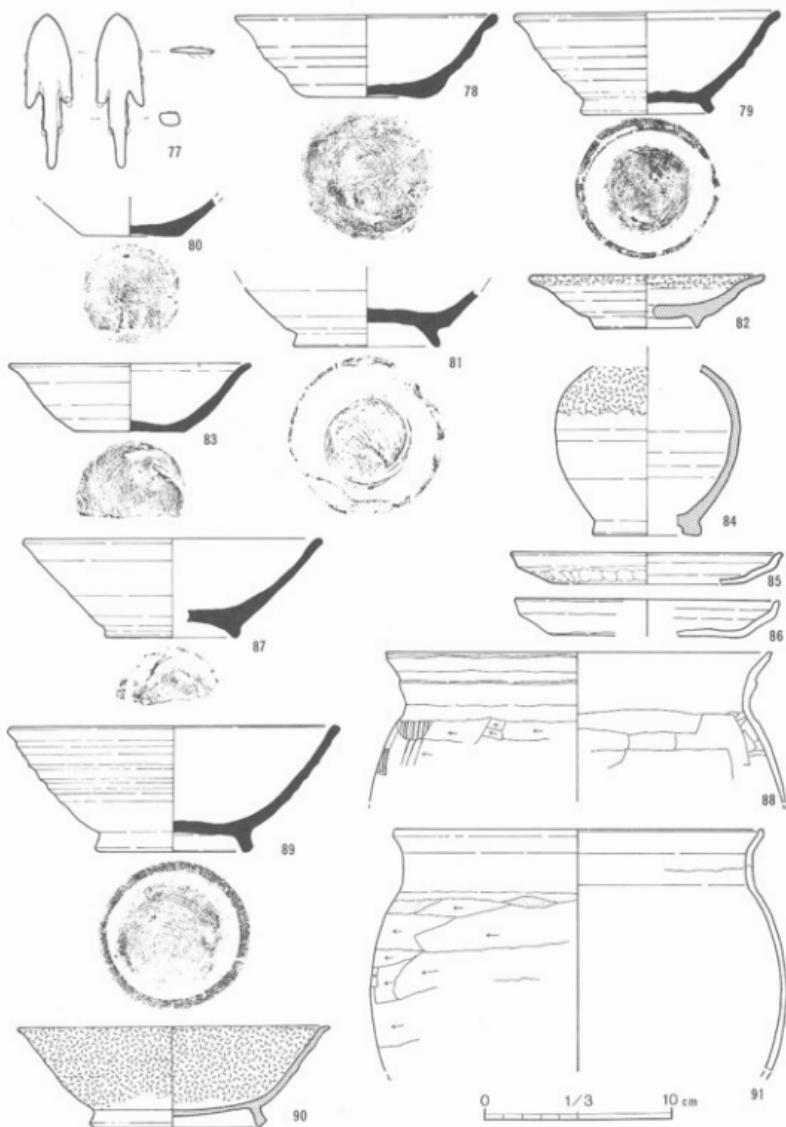
(H - 6 … 53 · 54、H - 7 … 55~57、H - 8 … 58~60、H - 11 … 61 · 62)

Fig. 59 平安時代の遺物 (6)



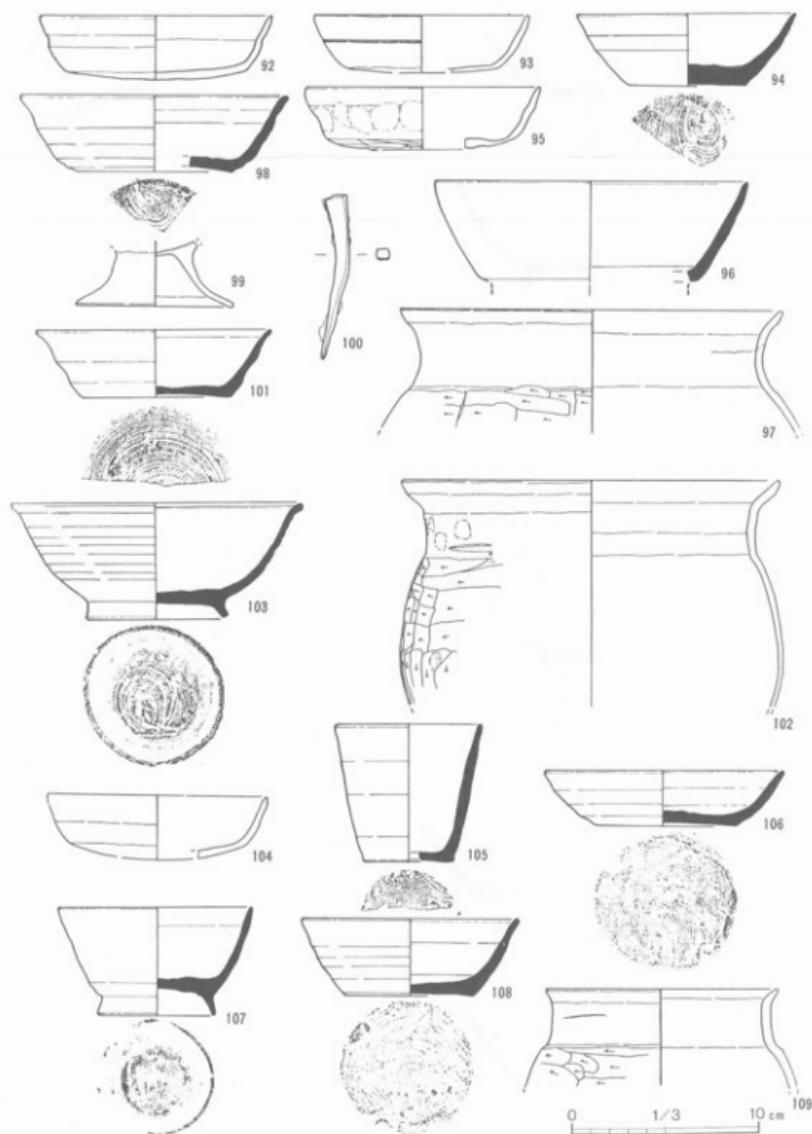
(H-11-63, H-12-64-68, H-13-69, H-14-70-72, H-15-73-76)

Fig. 60 平安時代の遺物(7)



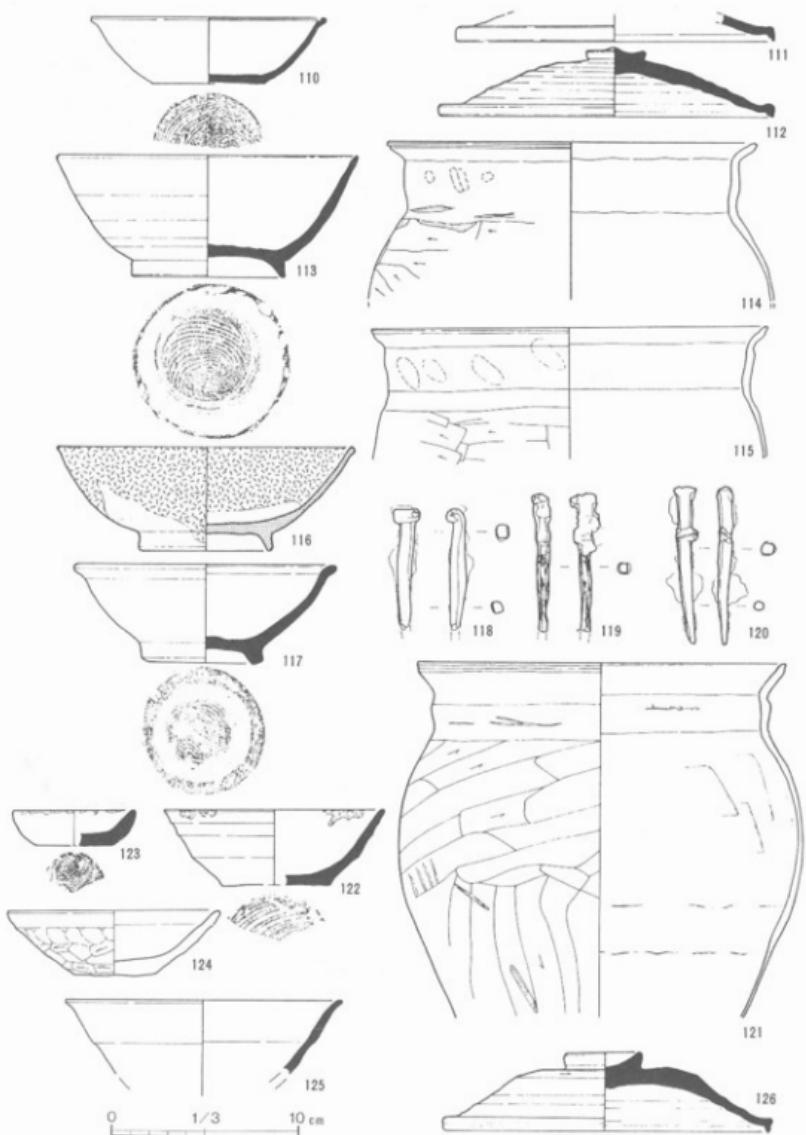
(H-16-77~80、H-17-81~91)

Fig. 61 平安時代の遺物(8)



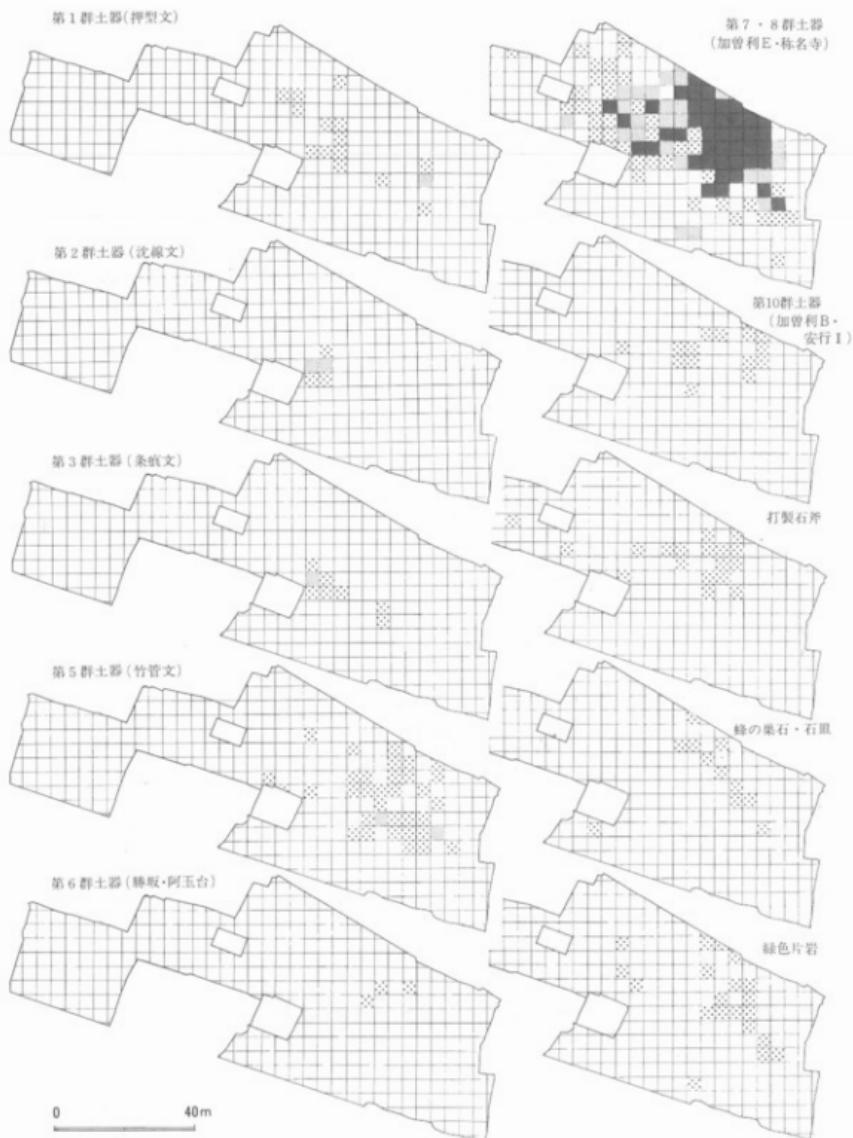
(H - 21…92~97, H - 22…98~102, H - 23…103, H - 24…104~109)

Fig. 62 平安時代の遺物 (9)



(H-25…110-115, D-8…116-120, D-34…121, W-2…122, W-6…123・124, W-10…125, F[K]…126)

Fig. 63 平安時代の遺物 (10)



グリッド毎の点数は、淡点…1~4点、濃点…5~14点、黒塗…15点以上を示す。

Fig. 64 縄文時代包含層の遺物分布

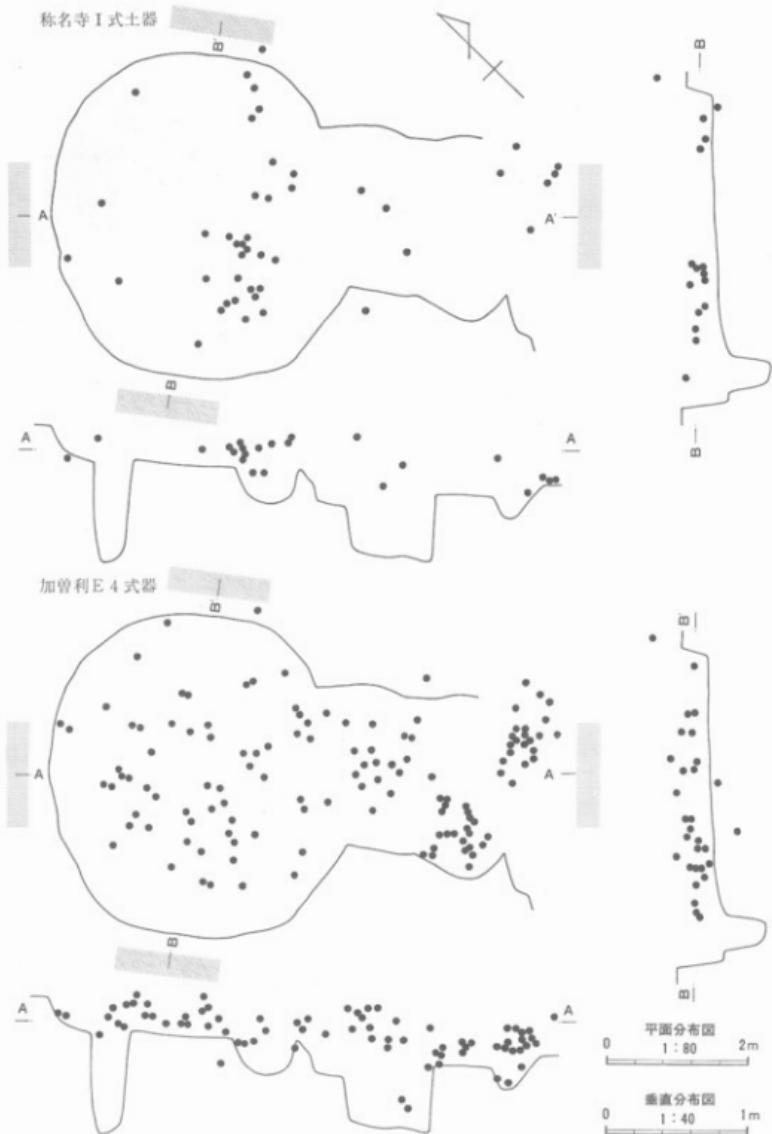


Fig. 65 J-1号住居址の遺物分布



1. A区全景（北東から空撮）



2. A・B区全景（北から空撮）



1. 熊野谷遺跡全景(北東から空撮)



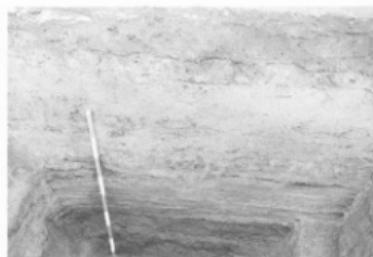
2. 熊野谷遺跡と榛名山（東から空撮）



1. A区縄文時代面試掘トレンチ（西から空撮）



2. A区深掘り（西から）



3. B区深掘り（西から）



4. F区調査区（南西から）



5. F区遺物出土状態（西から）



1. J-1号住居址『上面』（北西から）



2. J-1号住居址『上面』の礫と『下面』（北西から）



1. J-1号住居址『下面』（北西から）



2. J-1号住居址『上面』の礫（南東から）



3. J-1号住居址『下面』の炉（北から）



4. J-1号住居址『上面』の石囲い（北西から）



5. J-1号住居址の埋甕（西から）



1. J-3号住居址（南から）



2. J-3号住居址の炉（南から）



3. J-3号住居址の埋甕（南東から）



4. J-4号住居址（北から）



5. J-4号住居址の炉（西から）



1. J-5号住居址（北西から）



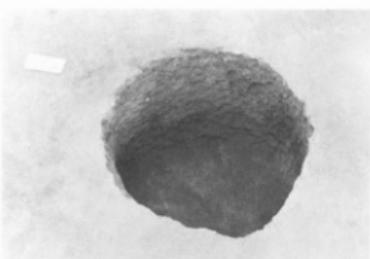
2. J-5号住居址の炉（北から）



3. JT-1号堅穴状遺構（南から）



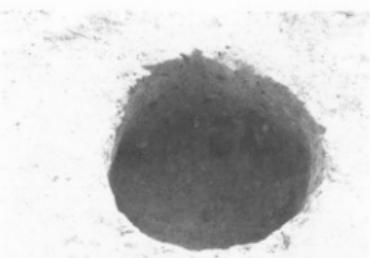
4. JD-1号土坑（西から）



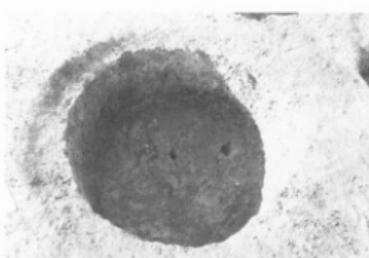
5. JD-3号土坑（南から）



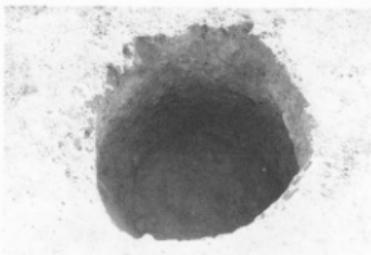
6. JD-5号土坑（西から）



7. JD-6号土坑（北から）



8. JD-7号土坑（南西から）



1. JD-9号土坑（北から）



2. JD-6号土坑のトチの実出土状態
(北東から)



3. S-1号集石（東から）



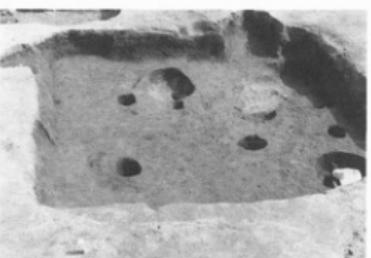
4. 繩文時代包含層遺物出土状態（南東から）



5. H-1・2号住居址（東から）



6. H-3号住居址（西から）



7. H-3号住居址掘り方（西から）



8. H-4号住居址（西から）



1. H-3号住居址の竈（西から）



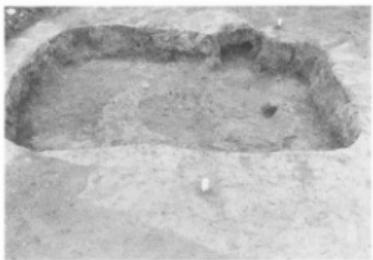
2. H-4号住居址の竈掘り方（西から）



3. H-5号住居址（西から）



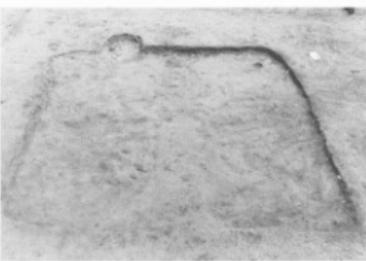
4. H-5号住居址掘り方（西から）



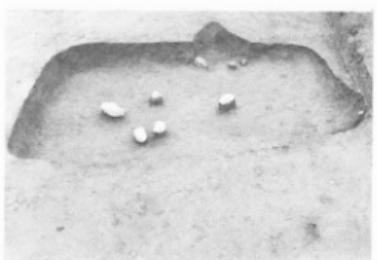
5. H-6号住居址掘り方（西から）



1. H-11~17号住居址（北東から空撮）



2. H-13号住居址（南から）



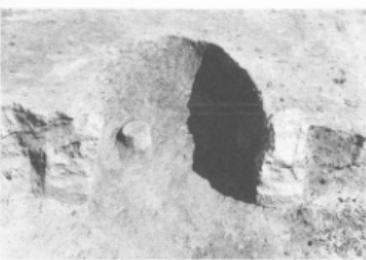
3. H-20号住居址（西から）



4. H-21号住居址（東から）



5. H-23・24号住居址掘り方（西から）



6. H-24号住居址の窓（西から）



7. H-25号住居址（西から）



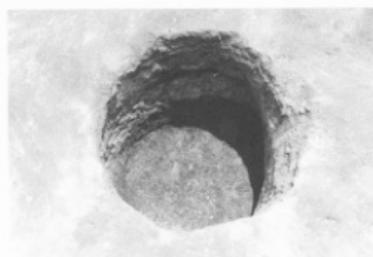
8. B区調査風景（北西から空撮）



1. B-1号掘立柱建物址（西から）



2. D-1号土坑（西から）



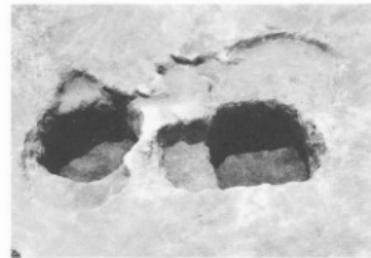
3. D-4号土坑（西から）



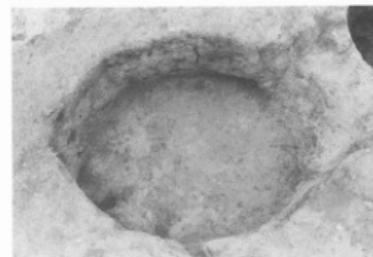
4. D-8号土坑（北西から）



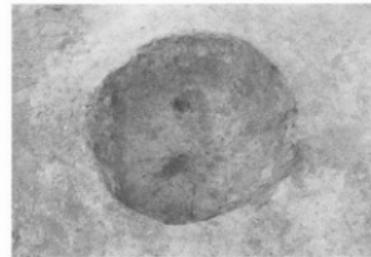
5. D-8号土坑遺物出土状態（北西から）



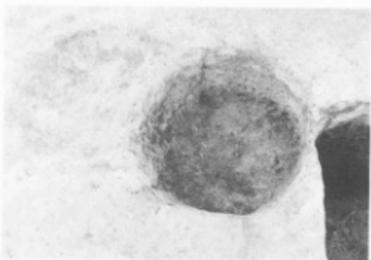
6. D-10・11号土坑（西から）



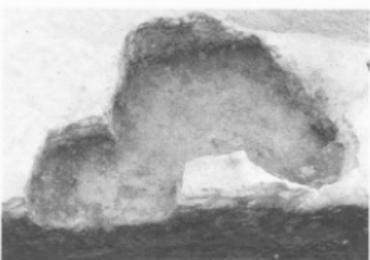
7. D-16号土坑（西から）



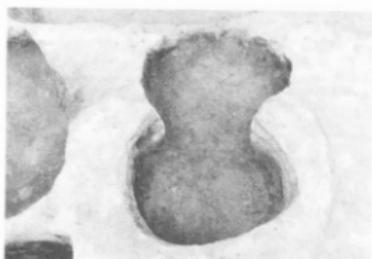
8. D-19号土坑（西から）



1. D-20号土坑（西から）



2. D-22号土坑（西から）



3. D-23号土坑（西から）



4. D-34号土坑（北東から）



5. W-6・7号溝（西から）



6. W-10・13号溝と遺祖神（北西から）



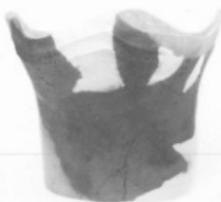
7. W-15号溝（北東から）



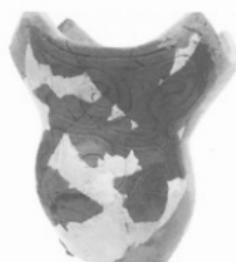
8. 記念撮影



1. J - 1 号住居址 (13)



2. J - 1 号住居址 (20)



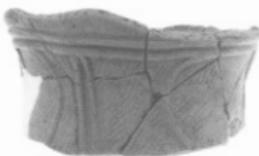
3. J - 1 号住居址 (23)



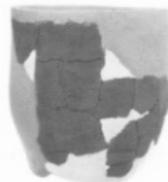
4. J - 4 号住居址 (42)



5. J - 3 号住居址 (39)



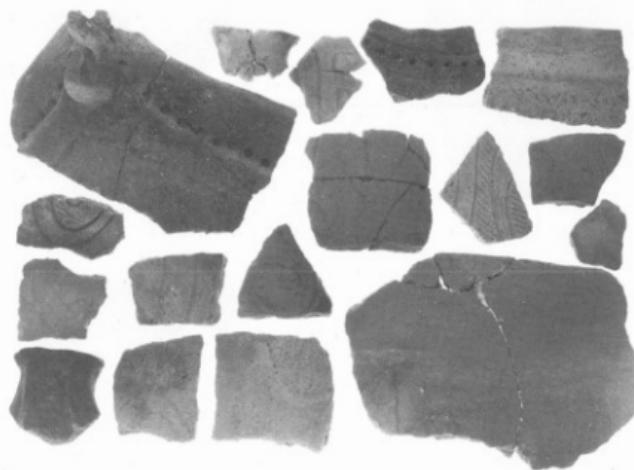
6. J - 4 号住居址 (43)



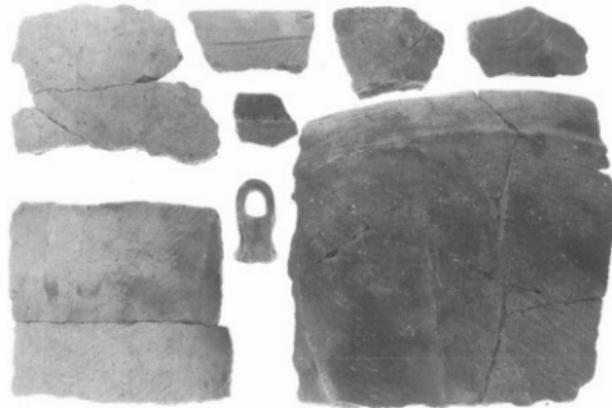
7. J - 4 号住居址 (44)



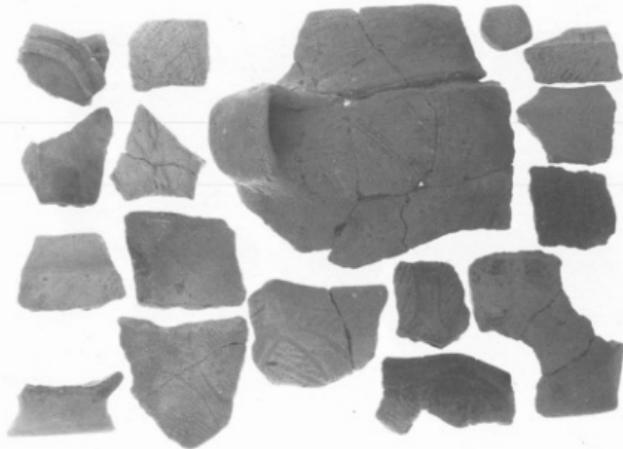
8. JD - 1 号土坑 (66)



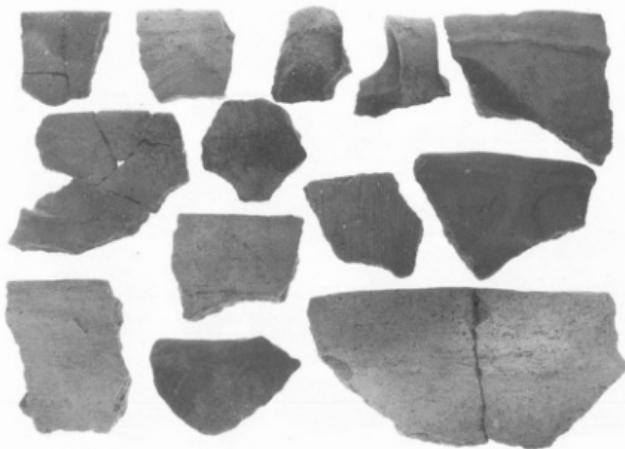
1. J-1号住居址出土の土器



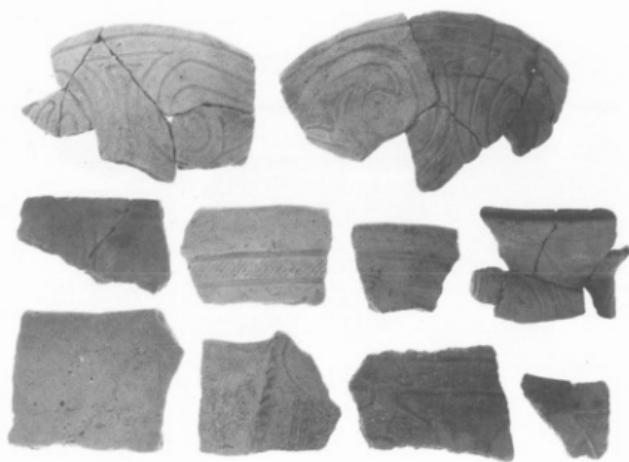
2. J-3号住居址出土の土器



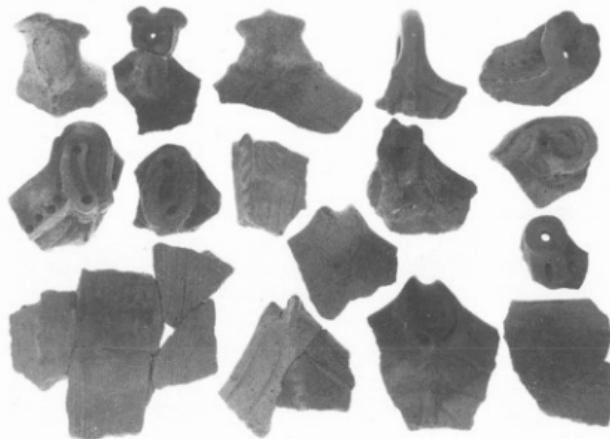
1. J - 3・5号住居址出土の土器



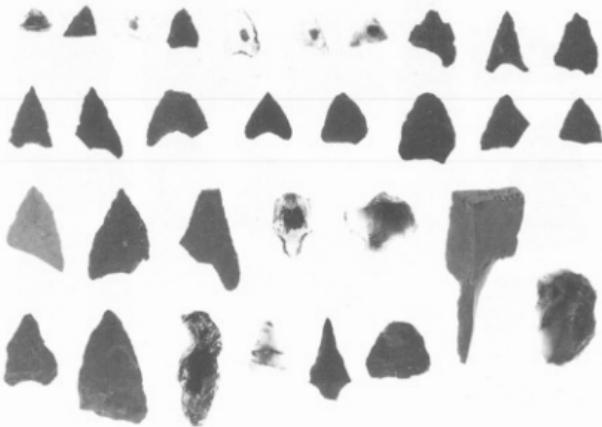
2. J - 5号住居址・JT - 1号竪穴状遺構出土の土器



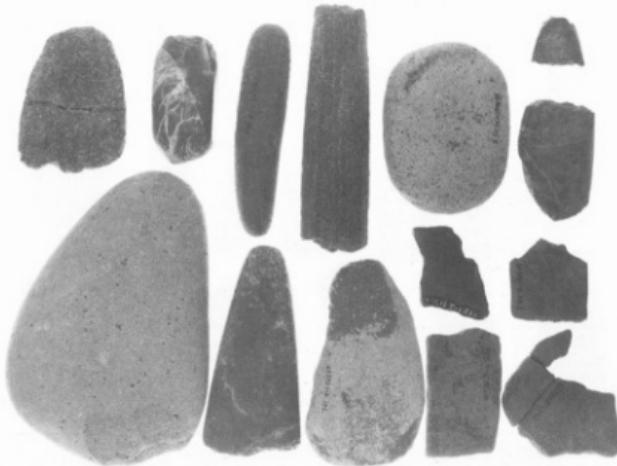
第8・9群土器



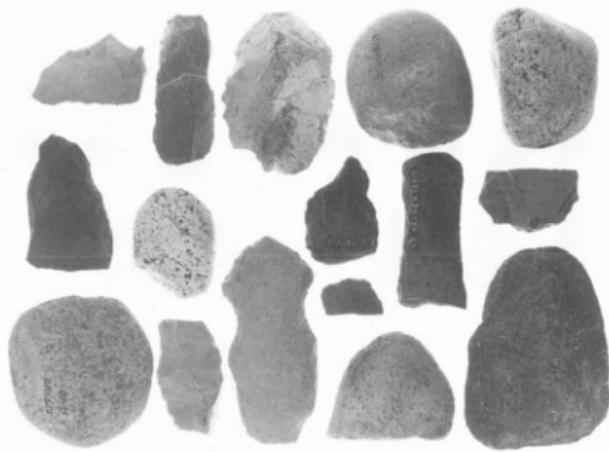
2. 第8群土器



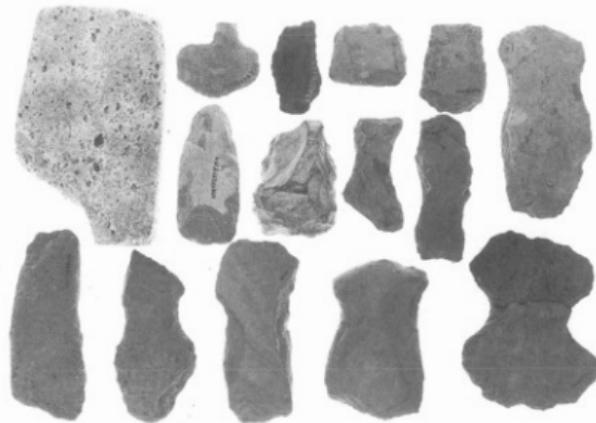
1. J-1号住居址出土の石器



2. J-1号住居址出土の石器



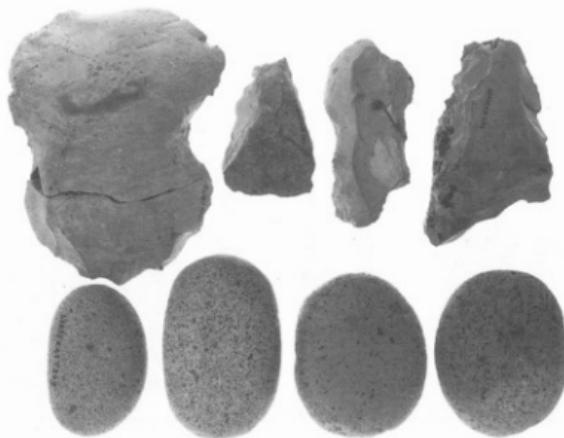
1. J-3~5号住居址・JT-1号竪穴状遺構出土の石器



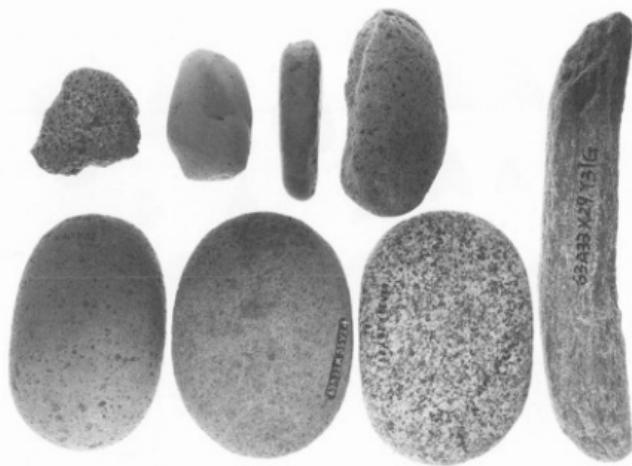
1. JD-1号土坑の軽石製品、石匙、削器、打製石斧



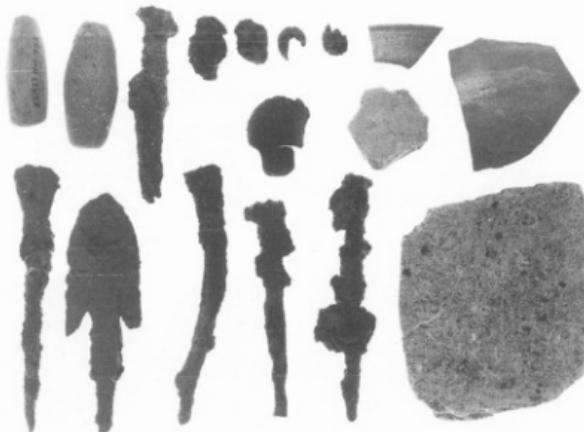
1. 石鎌・楔形石器・石錐



2. 打製石斧・磨石・凹石



1. 磨石・敲石類



2. 平安時代の特殊遺物



1. H-5号住居址(40)



2. H-5号住居址(37)



3. H-5号住居址(42)



4. H-5号住居址(32)



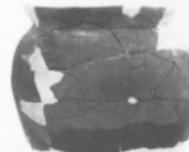
5. H-5号住居址(34)



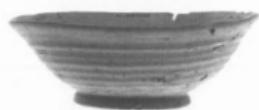
6. H-6号住居址(50)



7. H-6号住居址(43)



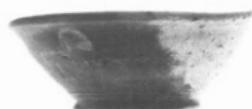
8. H-6号住居址(52)



1. H-6号住居址 (51)



2. H-6号住居址 (48)



3. H-16号住居址 (79)



4. H-25号住居址 (113)



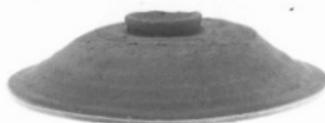
5. D-8号土坑 (117)



6. D-8号土坑 (116)



7. D-34号土坑 (121)



8. F 区 (126)

調査要項

遺跡名稱 熊野谷遺跡（くまのやいせき）
遺跡記号 63A33
遺跡所在地 群馬県前橋市青葉町1295番地他
調査期間 昭和63年6月1日～昭和63年11月15日
調査面積 試掘対象面積：31,400m² 発掘調査面積：13,670m²
開発面積 31,400m²
調査原因 住宅団地造成
調査依頼者 前橋工業団地造成組合 管理者 清水一郎
調査主体者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 二瓶益巳
事務局 事務局長 福田紀雄 事務局次長 濱田博一 財政係員 内田由治郎 関根吉晴 松本卓
庶務担当 須田陽子 阿藤孝子

調査担当者 前原 豊 都敬尚

調査参加者 井草トク 石関秀男 井田裕子 岩木操 大田一郎 大塚美智子 大塚みつゑ
小澤和代 菊地松之助 岸 フクエ 小島勝雄 小林延寿 駒形邦子 桜井恒子
柴崎まさ子 白井和子 鈴木民江 須藤カツフ 須藤恒雄 住谷文彦 関根初江
高橋キヨ子 高橋初代 竹内敏江 田村友一郎 千明香根子 辻 みつる 戸丸澄江
富沢清八 中島黒子 長岡徳治 根岸進一 花村敏夫 川 千恵子 原澤政雄
広橋良吉 福島智恵子 星野陽子 星野ミドリ 堀川千恵子 松嶋擴子 松島政子
三沢喜久江 宮原麻吉 清木順 渡原久仁江 渡辺たま江 渡辺道子 横地キク
横地ツヤ子 吉本千保 渡辺タツ江 渡辺良子

調査協力 群馬県教育委員会文化財保護課 群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬町教育委員会
前橋工業団地造成組合 市民部厚生課
飯島静男 女屋和志雄 小宮俊久 新藤彰 早田勉 大工原豊
戸田哲也 能登健市 隆之 松本保若狭徹 織賀綾子
小椋貞事務所 シン航空 スナガ環境測設 青高館 株式会社測設

熊野谷遺跡

平成元年3月20日 印刷
平成元年3月30日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市上泉町664-4

TEL. 0272-31-9531

印刷 株式会社 開文社 印刷所

